信濃片桐古墳

長野県上伊那郡

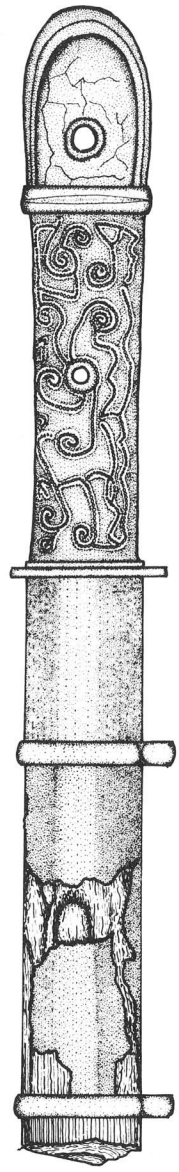
中川村教育委員会

信濃片桐古墳

上川名　昭編著

長野県上伊那郡

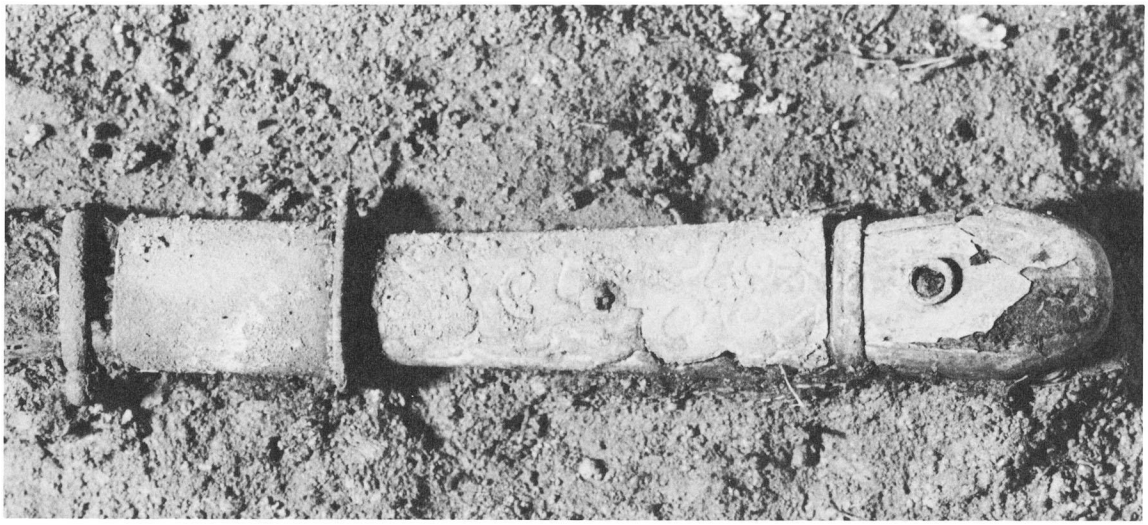
中川村教育委員会



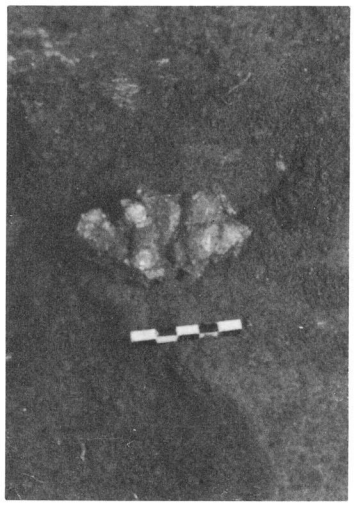
原色　金銅装円頭大刀

1　古墳への入口

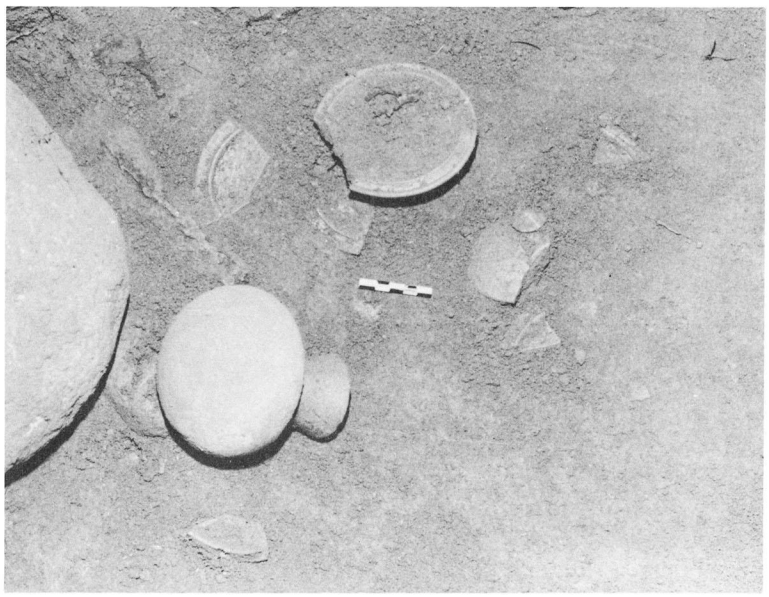
2　古墳の全景



3　金銅装円頭大刀出土状態

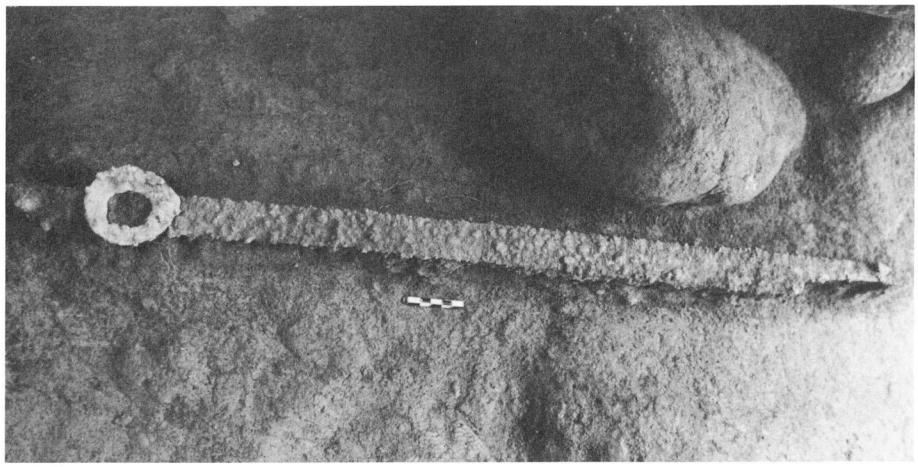


4　留金具出土状態(玄室内)



5　須恵器・鉄製品出土状態(袖部附近)

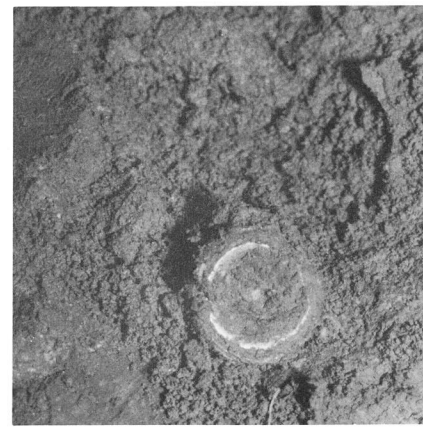
6　轡・鞍・鋲具出土状態(玄門西側)



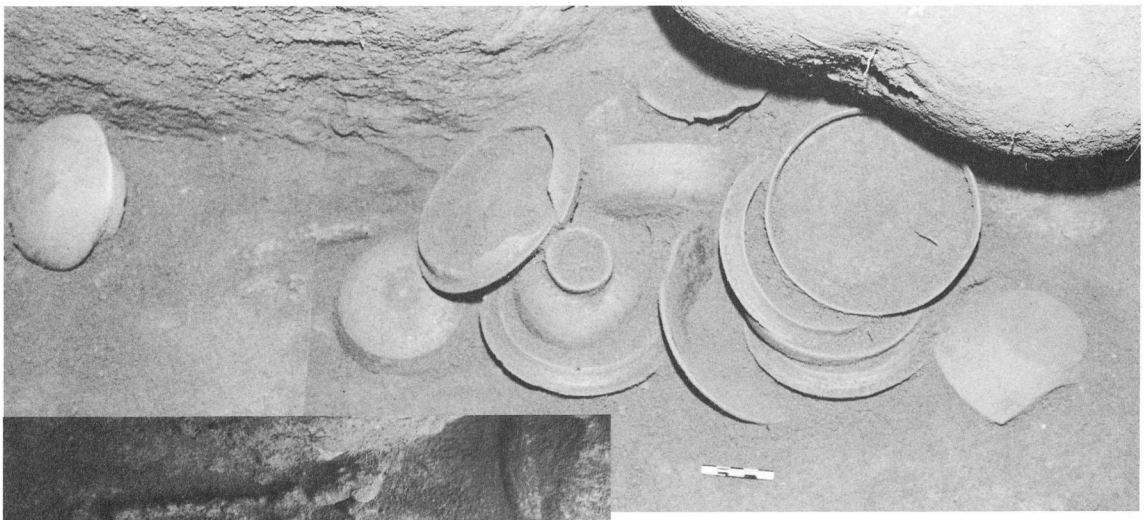
7　直刀・鐔出土状態(玄室東壁附近)

8　人骨(大腿骨)検出状態(玄室)

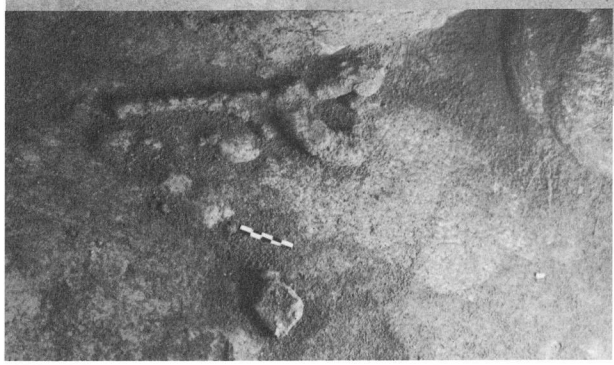
9　金環出土状態(玄室内)



10　銅環出土状態(玄室内)



11　須恵器・土師器出土状態(羨道部東壁附近)

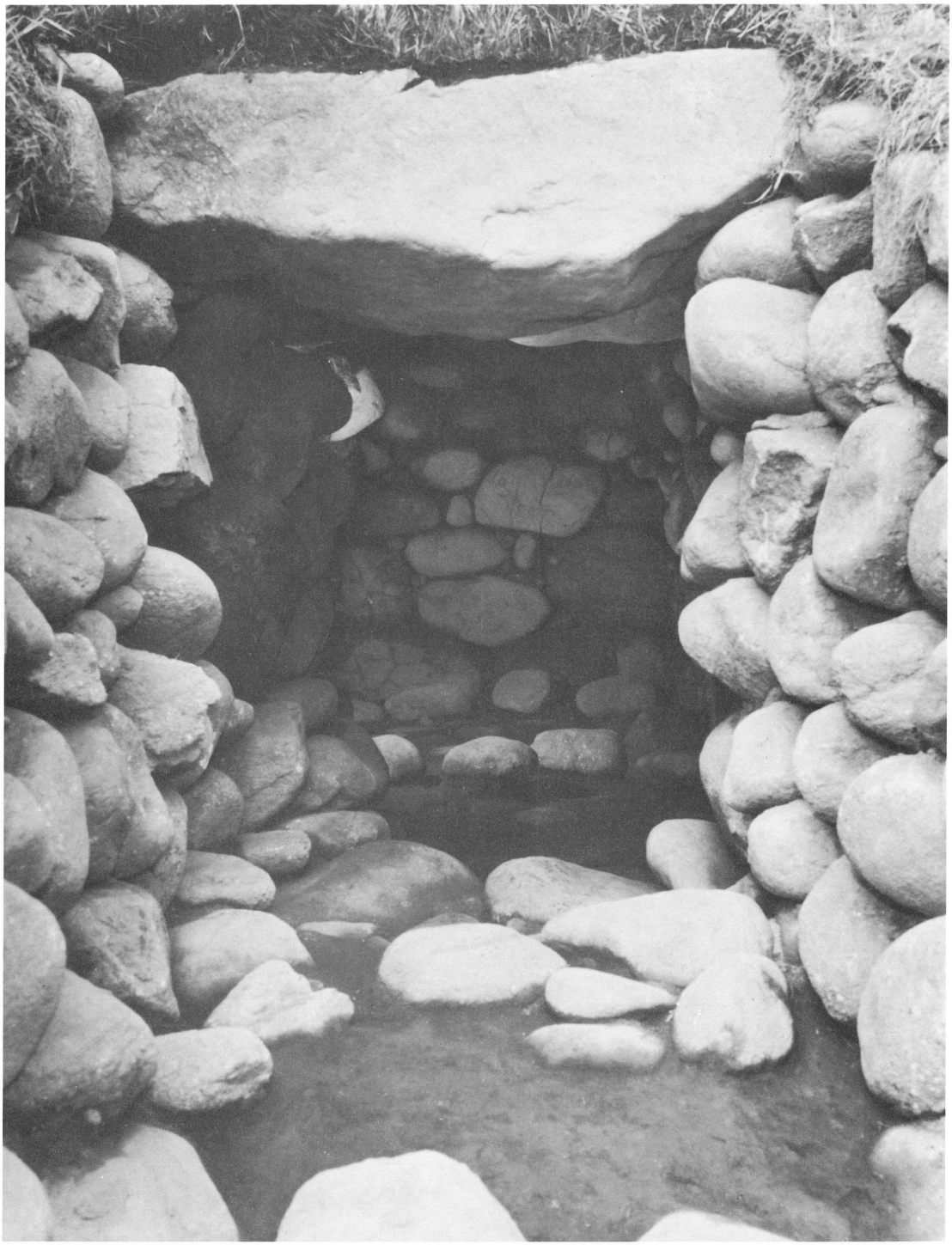


12　喰出土状態(羨道部東壁附近)

13　留金具出土状態(トレンチ内)

14　金環出土状態(トレンチ内)

15　トレンチのセクション

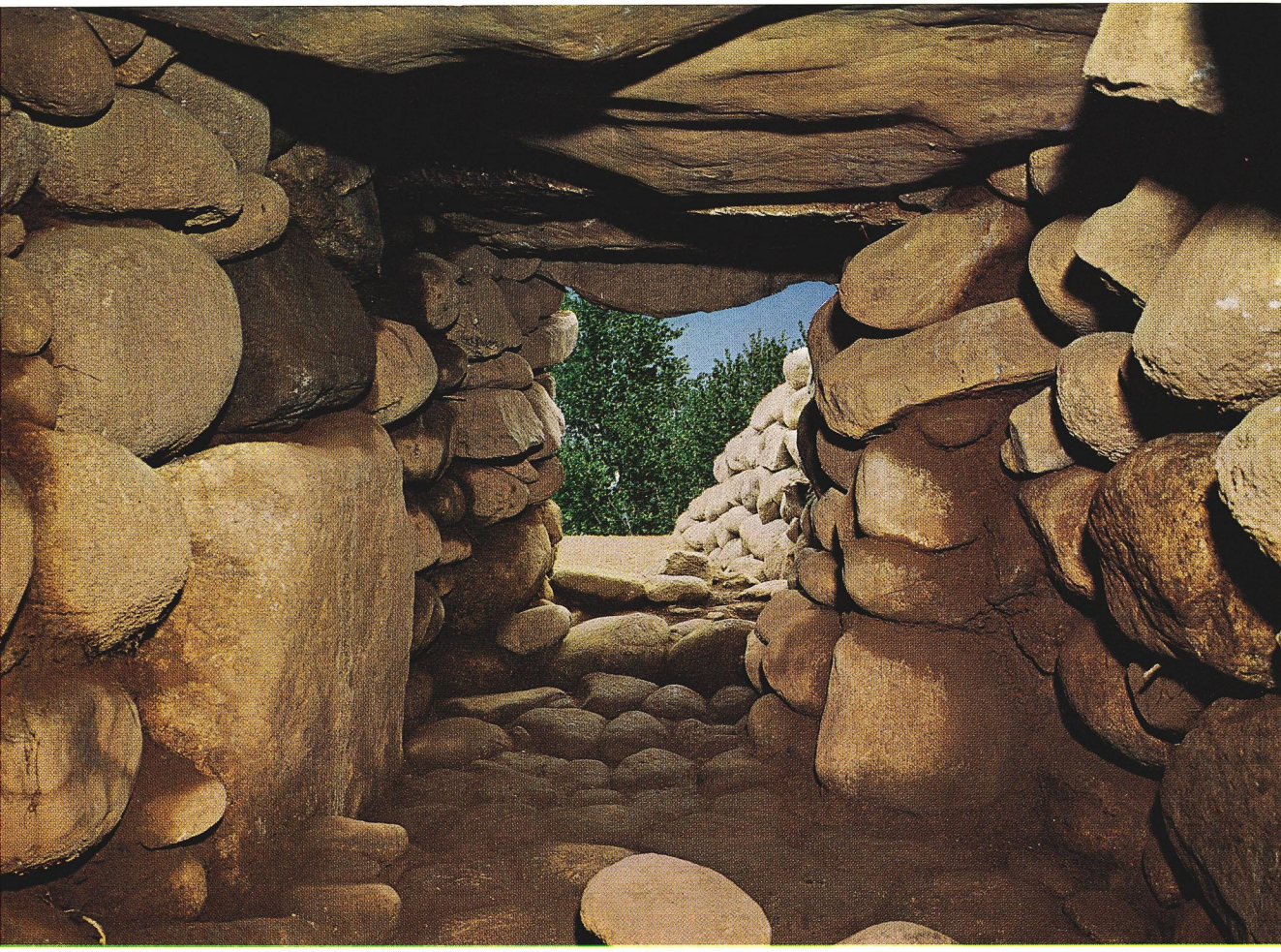


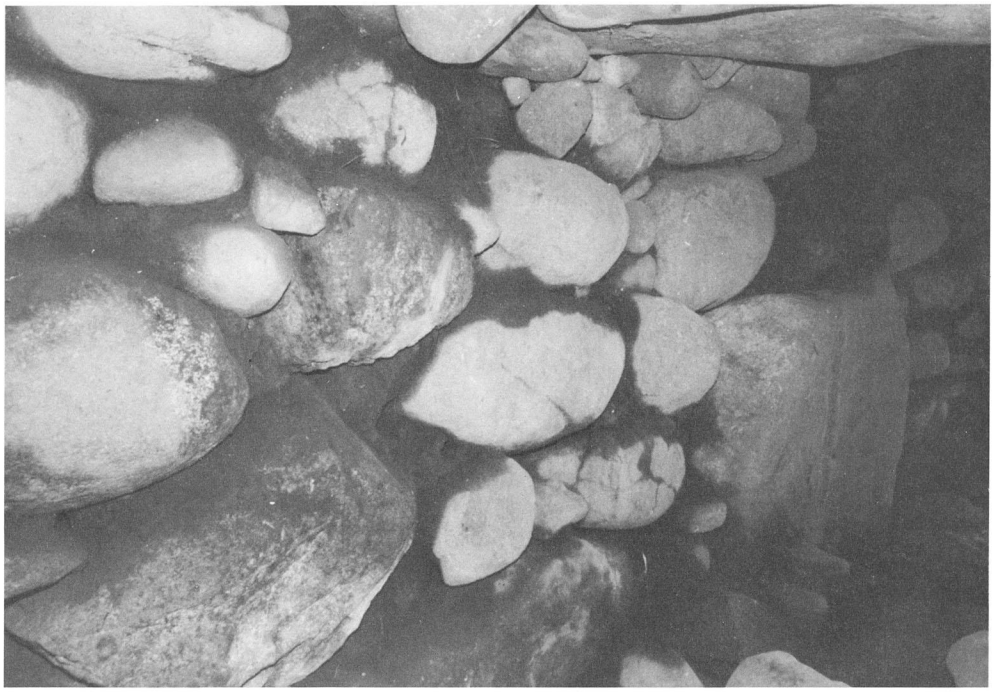
16 玄室全景

17　玄室奥壁

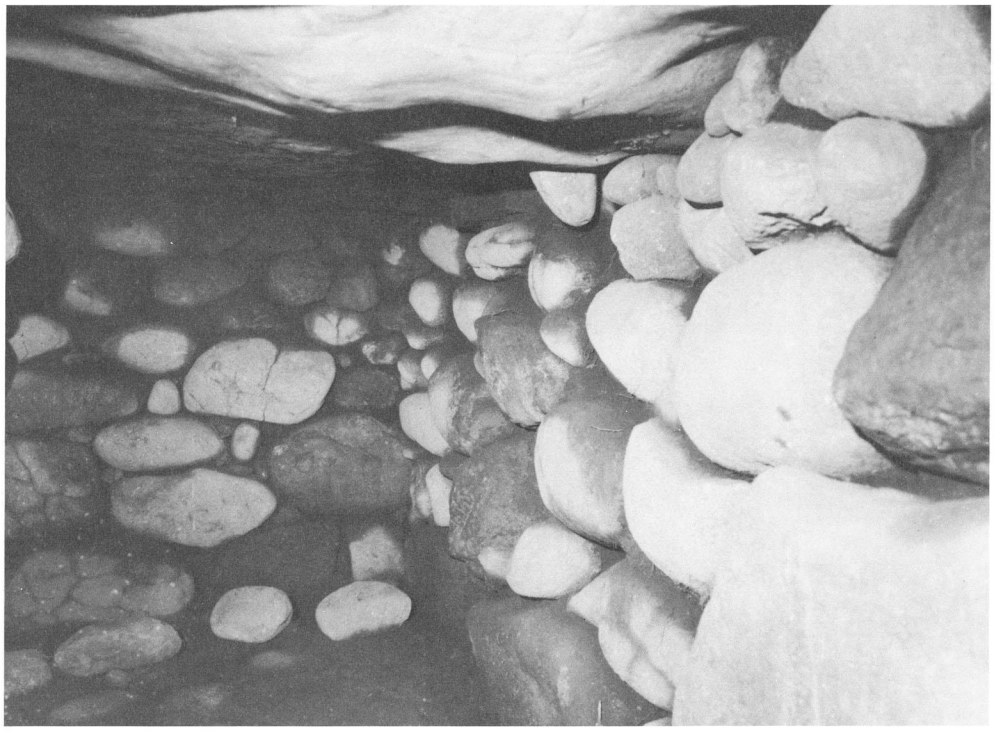
18　玄室床面と仕切りされた状態で発見された人頭大の石

原色　玄室より羨道を望む(上)

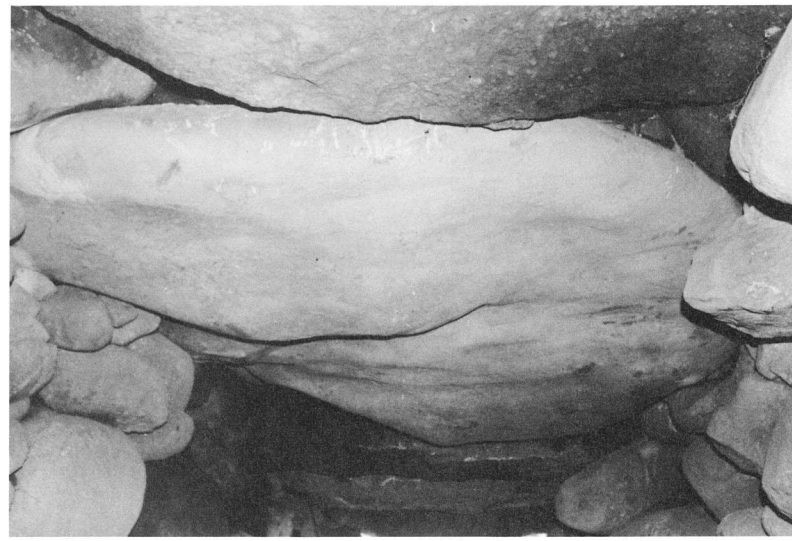




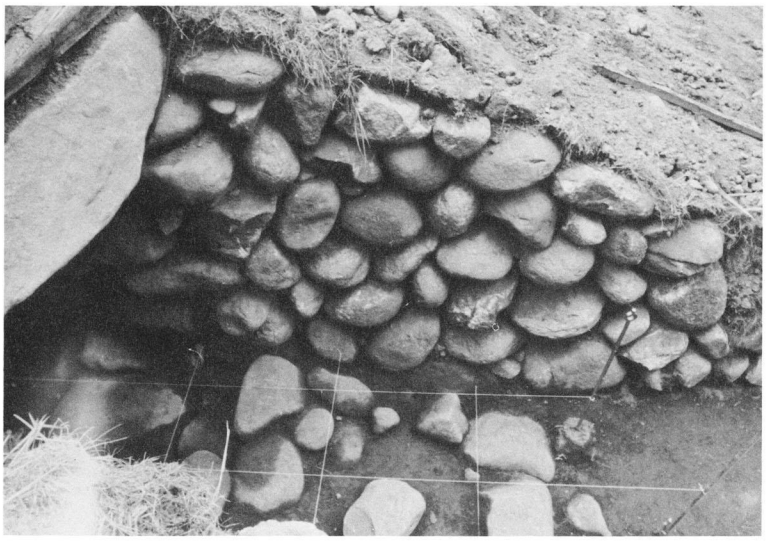
19　玄室東壁の状態



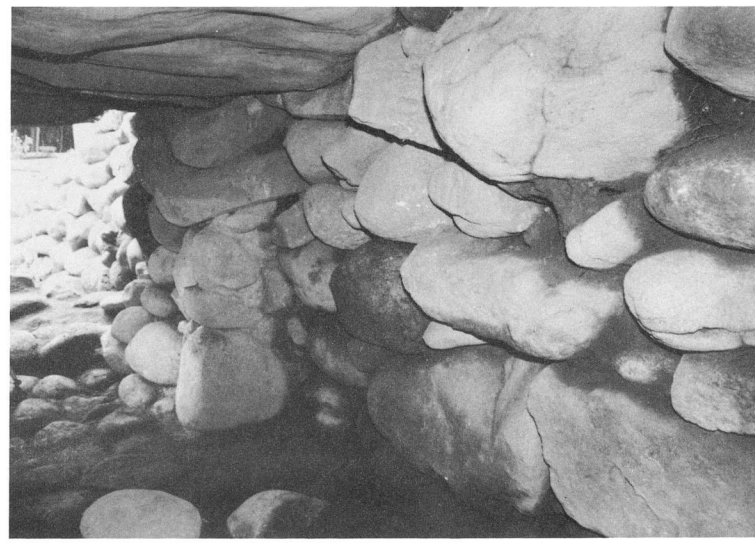
20　玄室奥壁東側隅部の状態



21　奥壁より天井石を望む

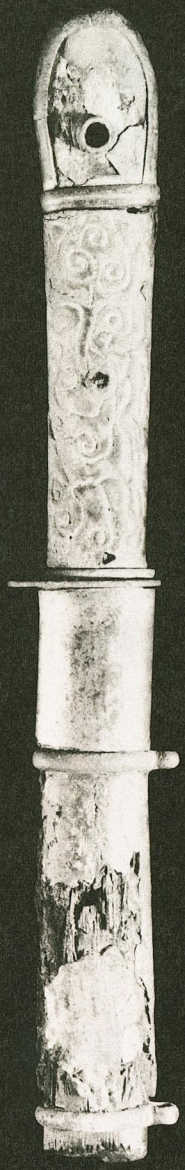


22　羨道部の東壁



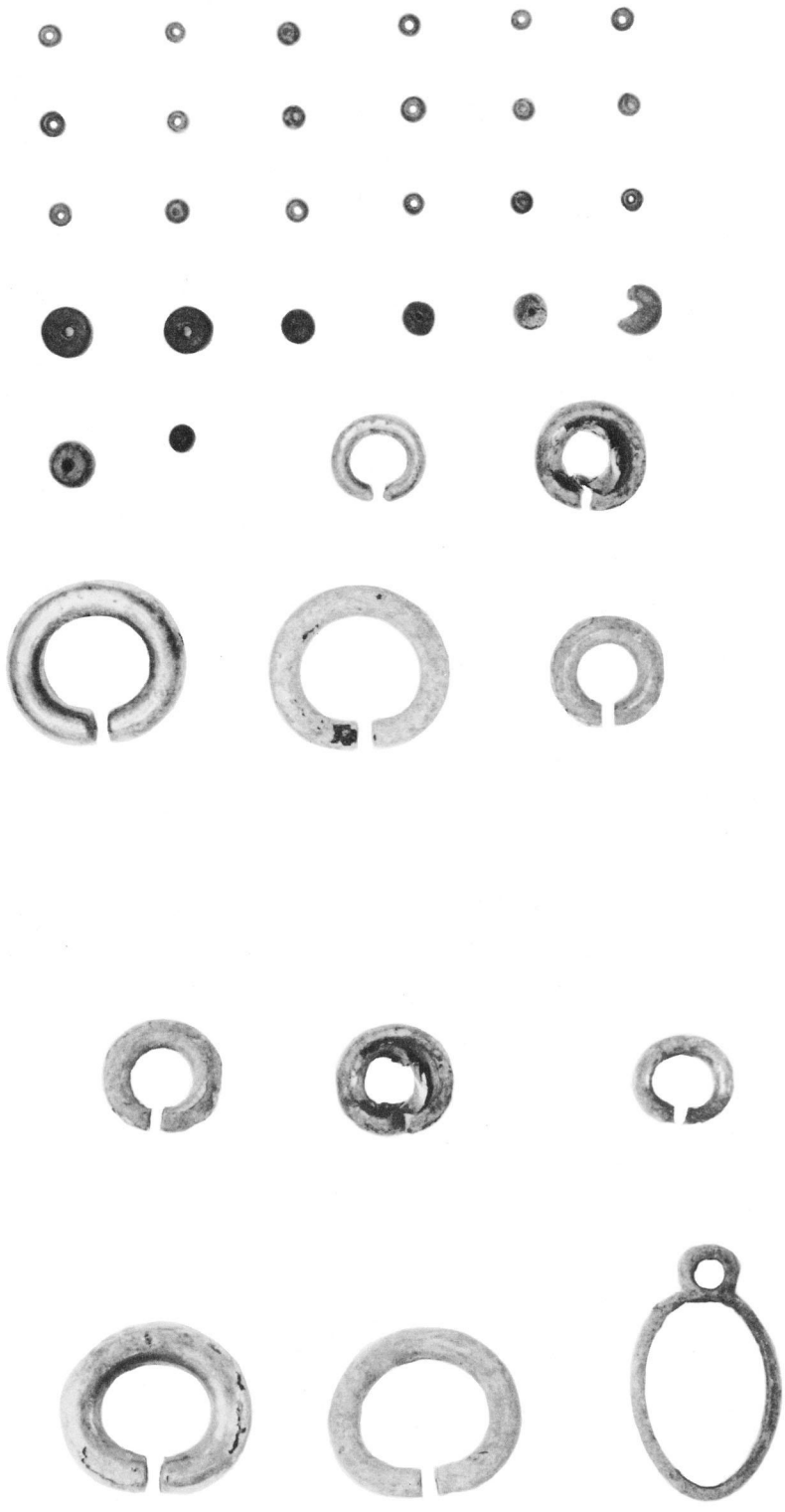
23　奥壁より袖部を望む

24　副装品　直刀

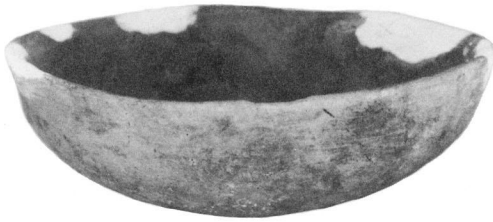


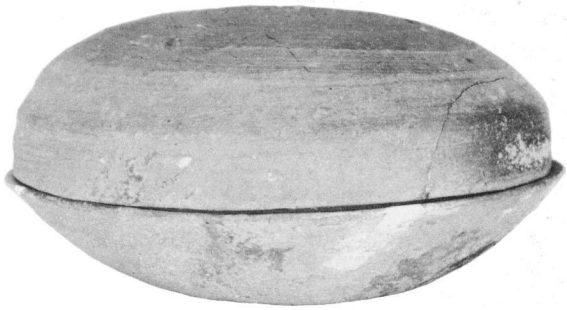
25　副葬品　金銅装円頭大刀

26 副葬品　鉄器



27　副葬品　装身具





29 副葬品　土器類

序

ここに報告する片桐古墳は、牧ヶ原台地の西隅にあります。この上伊那地域にある古墳と目されるものの中で一番大きく、六万部古墳として古くから知られていたものです。近年石室の石積みに崩れが生じ、一九七七（昭和五二）年、修理保存のための調査にふみ切ったのであります。

諏訪湖に源を発した天竜川が約五八キロ程流れた伊那谷のほぼ中央に中川村片桐地区があります。ここに報告されましたように極めて、学術的・教育的価値の高い地域であります。金銅装柄頭をはじめとする多数の副葬品から古墳時代後期と推定されますこの片桐古墳の調査結果も、それを証明しているといえましょう。

調査団長として指導戴きました上川名昭氏をはじめとする調査団各位のご苦労には、衷心より感謝申し上げます。

片桐古墳の調査によって伊那谷の古墳文化の一端が解明されることになりました。報告書が刊行されるにあたって心からお喜び申し上げます。

昭和五五年四月

中川村長　宮崎昌直

例言

一　本書は昭和五二年三月から九月までの四次に渡って行われた長野県上伊那郡中川村片桐古墳発掘調査の報告書である。

二　本調査は中川村教育委員会から上川名昭が委嘱を受け実施したものである。

三　墳丘の測量については、小野征之、山本信夫、上川名玲子が、玄室内の測量は、上川名昭、小野征之、佐々木蔵之助、本田秀明、中塚和司、宮崎千里、桃沢貴美、斎藤五月が担当したたものである。

四　遺構・遺物の実測は主として上川名昭があたり、遺物の一部は三浦和信の手によるものである。

五　写真撮影は主として佐々木蔵之助、上川名昭があたり、原色写真、遺物写真については北澤廣氏の協力を得た。

六　本報告書の執筆は全て上川名昭によってなされたものである。

調査関係者一覧

団長　上川名　昭

副団長　小野　征之

調査員　佐々木蔵之助　本田秀明　今井正司　早川敏男　山本信夫　室伏輝男　小杉秀一　角　伸二　上川名玲子　中塚和司　宮崎千里　桃沢貴美　斎藤五月　南沢裕子　水野秀子　北島かよ子

補助員　石原　勉　片桐敏和　斎藤隆敏　佐々木均　清水匡文　下平　享　鶴岡琢臣　宮崎育王　宮崎尚司　前沢卓也

目次

序
まえがき
第一章　調査契機とその経過
第一節　調査契機……一三
第二節　片桐古墳の地理的・歴史的環境……一五
第三節　調査日誌……三三

第二章　古墳の構造と副葬品
第一節　遺跡……三九
第二節　副葬品……四五
第三章　信濃の古墳文化
第一節　伊那谷とその周辺……七七
第二節　善光寺平とその週辺……一一五
第三節　その他の地域……一一七
第四章　片桐古墳と残された問題
第一節　築造時期について……一二一
第二節　被葬者について……一三三
おわりに

図目次

Fig. 1　片桐古墳と周辺遺跡分布図　16
Fig. 2　横穴式石室区分図　26
Fig. 3　古墳実測図　40
Fig. 4　横穴式石室実測図　42
Fig. 5　副葬品出土状態図　47
Fig. 6　羨道部前トレンチ内遺物出土状態図　49
Fig. 7　副葬品①　直刀　51
Fig. 8　副葬品②　鞘金具・金銅装円頭大刀　52
Fig. 9　副葬品③　鉄鏃・刀子　55
Fig. 10　副葬品④　玉類・金環・銅環・留金具　58
Fig. 11　副葬品⑤　鐔・留金具・鋲具・轡・木片・馬具片　61
Fig. 12　副葬品⑥　鉄製鋲・鋲釘・鉄片　63
Fig. 13　副葬品⑦　鉄鏃の柄・鉄片　65
Fig. 14　副葬品⑧　鉄片　66
Fig. 15　副葬品⑨　土器類　68
Fig. 16　副葬品⑩　土器類　70
Fig. 17　副葬品⑪　土器類　72
Fig. 18　副葬品⑫　土器類　74
Fig. 19　大刀集成①　130
Fig. 20　大刀集成②　131
附図　東山道とその周辺　21

表目次

表1　玉類一覧　59
表2　伊那谷の古墳　80
表3　伊那谷の前方後円墳　113
表4　伊那谷の円墳　114
表5　伊那谷の鏡を出土する古墳　114
表6　冑・短甲・桂甲出土古墳　114
表7　柄頭出土地一覧　123

写真図版

1 古墳への入口
2 古墳の全景
3 金銅装円頭大刀出土状態
4 留金具出土状態(玄室内)
5 須恵器・鉄製品出土状態(袖部附近)
6 轡・鞍・鋏具出土状態(玄門西側)
7 直刀・鐔出土状態(玄室東壁附近)
8 人骨(大腿骨)検出状態(玄室)
9 金環出土状態(玄室内)
10 銅環出土状態(玄室内)
11 須恵器・土師器出土状態(羨道部東壁附近)
12 喰出土状態(羨道部東壁附近)
13 留金具出土状態(トレンチ内)
14 金環出土状態(トレンチ内)
15 トレンチのセクション
16 玄室全景
17 玄室奥壁
18 玄室床面と仕切りされた状態で発見された人頭大の石
19 玄室東壁の状態
20 玄室奥壁東側隅部の状態
21 奥壁より天井石を望む
22 羨道部の東壁
23 奥壁より袖部を望む
24 副葬品　直刀
25 副葬品　金銅装円頭大刀
26 副葬品　鉄器
27 副葬品　装身具
28 副葬品　土器類
29 副葬品　土器類

原色　金銅装円頭大刀
原色　玄室より羨道を望む(上)
　　玄室全景　　(下)

信濃片桐古墳

まえがき

長野県上伊那郡中川村で古墳を保存したいがその前に学術的な調査をして記録を残したい、と依頼を受けて今回の発掘調査を実施したものである。

早くから六万部古墳として知られていたが、片桐の地名は、倭名類聚鈔に堅錐、延喜式では賢錐として東山道の主要な駅として知られ、堅錐・賢錐から変化して今日の片桐と呼ばれるようになったのである。よって古代史を解明する資料であることから、旧地名にもとづき報告することとした。

片桐地域には二基の円墳が存在し、調査対象となったのは比較的大きい片桐一号墳である。

古墳は盗掘が頻繁になされ、直刀二振、金環一個、人骨等もすでに出土していたので、測量と実測図に重点をおいて調査に踏み切ったのであったけれど、思わぬ多量の副葬品が発見された。

片桐古墳は長野県でも貴重な古墳であり、やっとここに報告出来ることは、研究者として責任を果し、感慨無量な心境である。

第一章　調査契機とその経過

第一節　調査契機

昭和五一年七月に伊那市教育委員会の依頼で第三次月見松遺跡の遺物整理中に、月見松遺跡調査の責任者であった林茂樹氏より、中川村で古墳を保存することになっているが、その前に精密な測量と石室内の清掃をしてくれないかと話があった。伊那谷の考古学の調査に参加したのは、まだこの地方でも考古学的な、調査の行われていなかった昭和二五年、筆者が大学院の時代であった。よって伊那谷には早くから深い関心を持っており、ましてや古墳であることから、この依頼は古代史の研究にこの上もない機会と考えていた。

聞くところによると、古墳の石室の入口は開口していて、大人一人がくぐって入れるとのことで近所の子供達が出入りして危険であり、調査後は石室の入口を閉鎖したいとのことであった。すでに石室内からは直刀二振、金環一個と人骨の出土が報ぜられていた。しかしどんな小さな古墳でも実測するとなると時間もかかり、費用もかさむことを伝え、一度見学に行き自分の眼でたしかめることを約束したのであった。その後中川村の古墳のことを忘れかけていた昭和五二年二月一四日に突然林氏より連絡があり、中川村の古墳を是非一度見学してほしいとのことであった。そこで前からの約束もあったので、三月五日(土)に見学に行くことにした。

三月五日午前六時五〇分新宿発の第一駒ヶ根行に乗車し、伊那市近くで林茂樹氏と車中で一緒になり飯島駅で下

車。中川村の西公民館で教育長・支所長・公民館長と相談の後、古墳の見学にいく。公民館から南に一〇分ほどの扇状地のエプロン状に張り出した梨畑と墓地にかこまれた箇所にあり、古墳の裾部は果樹園と墓によって削りとられて方形をなしていた。石室の天井部はくずれ落ちてずれていて、そこに大人が一人くぐって入れるほどに口が開いていた。中に入って石室内の調査をする。

以前に聞いていたよりも石室は大きく、石室の底部には多量の土砂が堆積していた。また墳丘も相当くずれており、墳丘の裾には河原石の葺石が見られるがこれもくずれてしまって原形をとどめていなかった。墳頂部には江戸時代に建てられたと思われる大乗妙典供養塔がある。古墳見学後再び公民館にもどり、墳丘の実測に何日で何人必要等調査日数と費用の打合せをする。

五人で一週間あれば地形測量と墳丘の測量は完成するだろうが、提起された予算ではとても石室内の清掃は不可能であることを伝える。しかも天候によっては、七日では終了しないかもしれないことも説明する。三時三〇分の飯島発の列車で帰京する。その後三月一一日に再び林茂樹氏より連絡あり、予算がないので調査は不可能であることを伝えてくる。私も無理な調査はしたくないので了承する。ところが三月一四日にまた林茂樹氏より連絡あり、とにかく当初の予算内で測量をできるだけやってくれないかとのこと、一週間好天候がつづけばなんとか出来るが、雨に会えば無理であることを説明する。また石室内の調査は補正予算を計上して進めてもらうことにする、とのことであった。無理な調査であると思ったが、村で古墳を保存するという熱意に、応急処置として墳丘の測量だけをすることを決意し、期日は三月二七日より一週間とした。一度調査を実施することを断念したのであったが、村の情熱に動かされて受けることにしたのである。

第二節　片桐古墳の地理的・歴史的環境

地理的環境

伊那盆地は北は辰野町から南は飯田市天竜狭まで長さ約八〇キロにわたり、幅は最も広いところで二〇キロと、まことに狭長な盆地である。

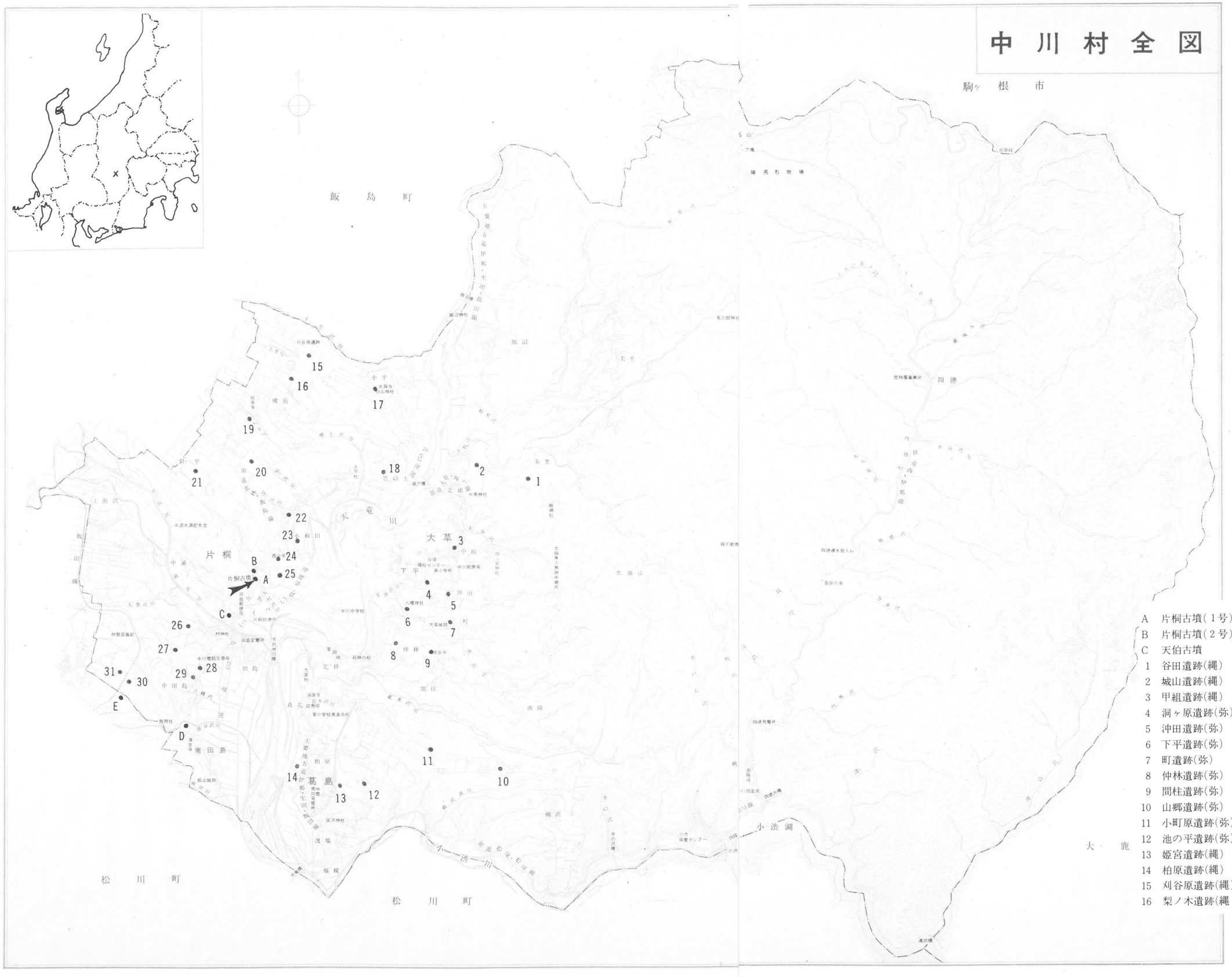
東には赤石山脈（南アルプス）とその前山である伊那山脈、西には木曽山脈（中央アルプス）が屏風のごとく立ちつらなり、その中央を美しく蛇行しながら南流する天竜川は、流域に地質学的に貴重な段丘をとどめ、考古学的にも宝庫ともいうべき谷底盆地を形成し、伊那市、飯田市の邑街を発達させながら静岡県浜松市の東側で太平洋に注いでいる。

この伊那盆地の中央よりやや南下した上伊那郡の最南端部に中川村は位置している。中川村の中央は天竜川によって竜東（東側）と竜西（西側）に二分され、蛇行が美しい谷間をつくっている。竜東はせまく、竜西は広い段丘をつくり、国鉄飯田線も竜西の一部を通過し、地形の開折が激しいため段丘上段部を走り、村内には伊那田島駅を有するが、交通状況はめぐまれているとはいえない。ただ最近中央道が名古屋まで開通し、自動車、バスの便が良くなってきている。

片桐古墳はこの竜西の中川村片桐六万部（四一八五番地）扇状地先端部近くに位置している。

古墳は一号墳と二号墳があり、調査を実施したのは一号墳である。古墳附近は、扇状地で、その中央部に幅五メートルほどの農道が南北に走り、一号墳は農道の東側、そこから一〇〇メートルほど離れた農道の西側に接して二

中 川 村 全 図



A	片桐古墳(１号)	D	田島古墳
B	片桐古墳(２号)	E	富士塚古墳
C	天伯古墳		
1	谷田遺跡(縄)	17	蓮台遺跡(縄)
2	城山遺跡(縄)	18	上原遺跡(縄)
3	甲組遺跡(縄)	19	溝林遺跡(縄)
4	洞ヶ原遺跡(弥)	20	本堂遺跡(縄)
5	沖田遺跡(弥)	21	針ヶ平遺跡(弥)
6	下平遺跡(弥)	22	垣外遺跡(弥)
7	町遺跡(弥)	23	下輪遺跡(土師・須恵)
8	仲林遺跡(弥)	24	松の越遺跡(縄)
9	間柱遺跡(弥)	25	牧ヶ原遺跡(土師)
10	山郷遺跡(弥)	26	前沢平遺跡(縄)
11	小町原遺跡(弥)	27	西四本松遺跡(縄)
12	池の平遺跡(弥)	28	桐山遺跡(縄)
13	姫宮遺跡(縄)	29	大林遺跡(縄)
14	柏原遺跡(縄)	30	堤ヶ原遺跡(縄)
15	刈谷原遺跡(縄)	31	西ヶ原遺跡(土師)
16	梨ノ木遺跡(縄・弥)		

Fig. 1　片桐古墳と周辺遺跡分布図

号墳がある。この扇状地の北側を流れる矢村沢川は浸蝕が激しく、北側から東側にかけては深い谷をつくっている。

中川村の竜西は段丘の集合地帯で、扇状地的性格を強く持っている。段丘を東流する数条の小川も急な段丘崖を流れ落ちるとき急流となって段丘崖をはげしくきざみ、いくつかの沢がつくられ段丘崖を複雑なものとしている。その中でも前沢川のつくる谷は、もっとも代表的なものである。これらが田切地形を形成し、地質学的にも地理学的にも研究の課題を多く有している。

歴史的環境

信濃国が文献に登場してくるのは、大和朝廷が東国開拓してからである。

垂仁朝（古事記）に朝廷の使いが尾張から科野国（信濃）に入り、高志国（越後）に至ったことが見られる。中でも最も顕著なのは、関東と同じく日本武尊の東征である。尊は帰途、常陸国より甲斐国に入り、武蔵、上野を巡り、碓日嶺を越えて信濃に至り、諏訪から天竜川に沿って南下し、伊那谷を通過し、神坂峠を越えて美濃国に出たと記されている。

国造本記には「科野国造・瑞垣朝御世、神八井命孫建五百建命定賜国造」と見え、崇神朝に神八井命の孫である建五百建命を科野国造に定めたとある。その命の子孫は多臣族で、信濃国造として栄えたのである。

また、『三代実録』貞観五年（八六三）九月の条には「信濃国諏訪人右近東将監正六位上金刺舎人貞長賜姓大朝臣並是神八井耳命之苗裔也」とあり、のちに諏訪郡に栄えた金刺一家が神八井耳命の後裔として大朝臣の姓を賜わったことが記されている。この金刺氏と同族で国造の一族に他田舎人が伊那郡にいたことが、続日本紀、神護景雲二年六月の条にみられる。つまり「信濃国伊那郡人他田舎人千世売」なるものが貞節の故をもって爵二級を賜わったと

いう記事である。この国造家の一族である多臣族は、大和中央政権の東国進出の現われである。その勢力範囲は伊勢・尾張・三河・遠江・駿河・甲斐から安房・上総・下総・常陸・上野・下野・磐城・陸奥地方まで及び中部山岳地帯では信濃・美濃に及んでおり、日本武尊東征地域とほぼ一致している。伊那谷は信濃国において、中央文化を享受するに最も有利な地域にあったであろう。それは古事記に出ている信濃坂、すなわち神坂峠の古道が東西交通の要路として、古代より文化流通に大きな役割を果していたということである。

古代信濃国への交通路としての東山道は、また中央と東国を結ぶ内陸交通の要衝でもあった。この東山道の役割がいかに重要視されていたかは、駅の設置状況においてもうかがわれよう。倭名類聚鈔に「阿知」「育良」「堅雒」「宮田」「深沢」「覚志」「錦織」「浦野」「日理」「清水」「長倉」「麻続」「日黒」「多古」「沼辺」の諸駅があげられ、以上信乃と註している。このうち「阿知」より「深沢」までの五駅が伊那谷におかれた。これらの各駅の所在地を現在の地籍にあてはめる努力がなされているが、今日まで明確な場所は判明していない。

美濃国より信濃国への交通の要衝地点として、神坂峠も無視することは出来ない。木曽川づたいにさかのぼって、現在の中津川市あたりから木曽山脈を縦断し神坂峠を越え、阿智駅を経て育良駅（今の伊賀良）賢雒・宮田・深沢と伊那谷を天竜川沿いに北上し、塩尻峠を越え松本平に出て錦織より、東に向い日理から国府に至る。さらに東にのびて上野の国府に入っており、さらに東にのび上野の国府から下野の国府へと続いている。東山道が東国開拓に重要な役割を果したのは東海道と同じなのである。

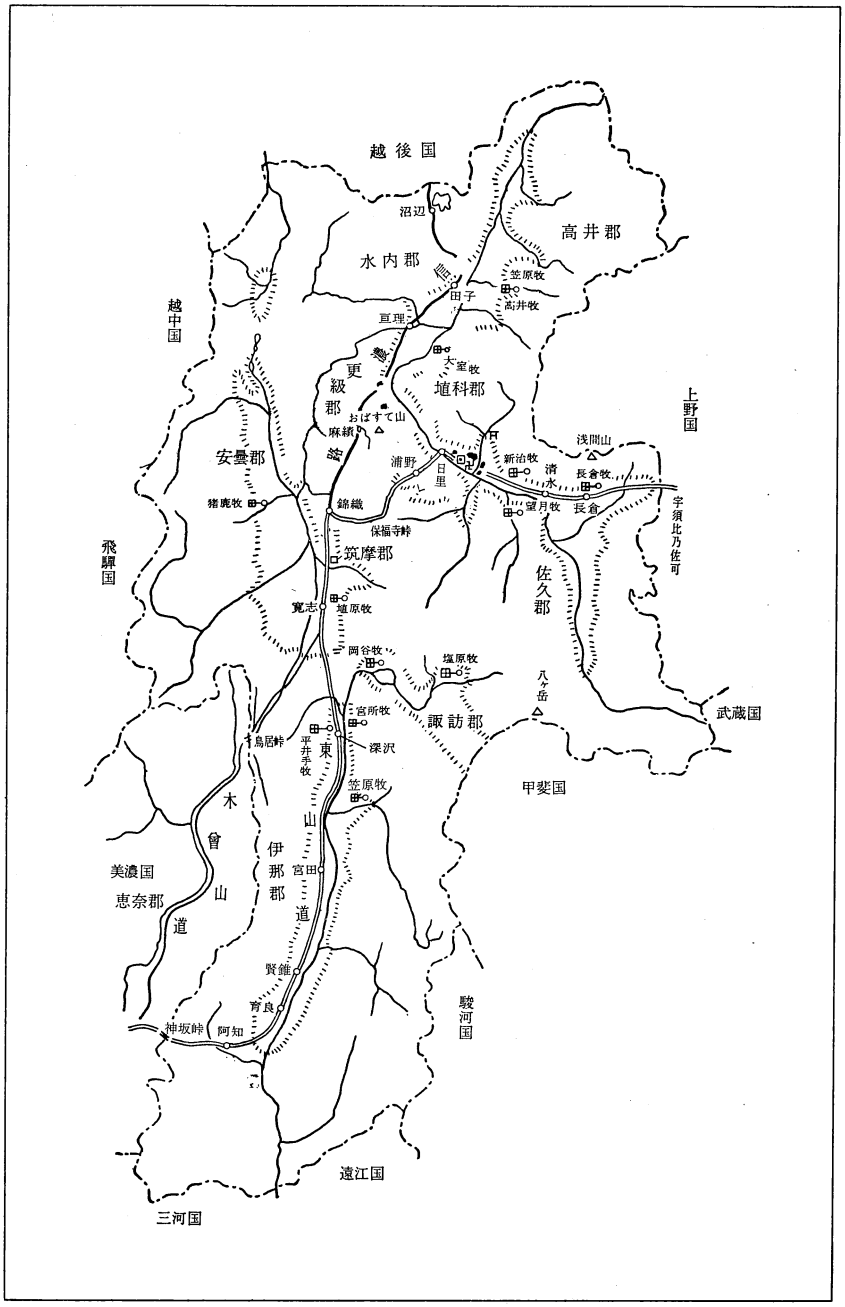
延喜式二八年兵部省諸国駅伝馬の条に信濃国駅馬（阿知卅疋・育良・賢雒・宮田・深沢・覚志各十疋・錦織・浦野各十五疋・日里・清水各十疋・長倉十五疋・多古・沼辺各五疋）伝馬（伊那郡十疋・諏訪・筑摩・小県・佐久郡各五疋）などと見えている。高山寺本倭名類聚鈔には「堅雒」の文字が見え、「賢雒」との差異があり、さらに下って片切となり片桐に至っている。東山道の賢雒駅が信濃国の阿智・育良につづく第三の駅として育良駅より北方四

里ほどの所にあったことは明白であるが、駅跡がどこであるかは諸説あって決定はされていない。なお片桐の部落には牧ヶ原なる地名も残っており、駅馬育成の牧場とも考えられ、賢錐駅もこの近くにあったのではと推定したい。

伊那谷中部の竜西地域は前節でも述べた通り田切地形が顕著で、したがって河川、地名等にこれを取り入れている場合が少くなくない。例えば片切・与田切・田切・中田切・大田切・小田切・犬田切等のごとくである。このように古代社会において堅錐あるいは賢錐と呼ばれていた地域も後の時代に田切地形によって片切となり、さらに片桐と変化したのであろう。

古代東山道の要路であった神坂峠は現阿智村智里にあり、この路が古代人の通路となったのは相当に古いことで、かなりの往来があったことがうかがわれる。奈良時代に至ると中央政府の機構整備と相まって一層官人の往来が多くなったことは疑いもないことで、古代東山道が東西日本の連絡上主要幹線であったことは間違いない事実である。その路上及び附近で発見される考古学的な資料によっても、うかがい知ることが出来る。神坂峠からは祭祀遺跡として多量な石製模造品、あるいは須恵器類が発見されていることも、根拠になり得るであろう。

さて、中川村竜西地域における古墳の存在はそれほど多くはない。片桐一号・二号墳が一番北側にあり、二号墳は小規模な円墳で未調査のため正確にはわからぬが、石室が存在しているようである。さらに中川村中央に、昭和五二年三月の第一次調査のときに古墳と確認出来た天伯古墳があり、相当くずれているが径二〇メートルほどの円墳と思われ、現状は大きな天井石が露出している。現在は消滅してしまったが、南田島の片桐康男氏の屋敷内に円墳があり、直刀・玉類が出土したと伝えられるも実見出来なかった。以上の古墳四基が存在したことは明らかである。また松川町との境に通称富士塚と呼ばれる円墳があり、北側は畑によって相当削りとられてしまったが、東側から南側には周湟の跡が歴然と残っており、比較的大形の円墳であったことを確認している。もっともこの古墳は松川町所在であって中川村に所属するものではない。


越後国
沼辺
高井郡
水内郡
笠原牧
高井牧
田子
亘理
大室牧
更級郡
埴科郡
おばすて山
麻績
浅間山
安曇郡
浦野
新治牧
清水
長倉牧
猪鹿牧
錦織
望月牧
長倉
保福寺峠
筑摩郡
佐久郡
寛志
埴原牧
岡谷牧
塩原牧
八ヶ岳
宮所牧
諏訪郡
武蔵国
鳥居峠
平井手牧
深沢
東山道
笠原牧
甲斐国
木曾山
伊那郡
宮田
美濃国
恵奈郡
賢錐
育良
神坂峠
阿知
駿河国
遠江国
三河国
飛騨国
越中国
上野国
宇須比乃佐可

附図　東山道とその周辺

伊那谷の古墳文化は、南の下伊那古墳文化と北の上伊那古墳文化に大別されている。下伊那古墳文化は、中央文化をいち早く摂取し、古式古墳も見られ、前方後円墳等量的にも上伊那古墳文化をしのいでいる。今日において中川村は上伊那郡の最南端に位置しているが、古代社会においては、古墳の分布状態から見て下伊那古墳文化の最北端に位置するものと考えることができる。上伊那古墳との間にも相当な間隔もあり、下伊那古墳文化圏の一つと考えて間違いなかろう。

第三節　調査日誌

第一次調査

昭和五二年三月二七日(日)晴

先発隊として亜細亜大学四年山本信夫、成徳女子高等学校二年上川名玲子と責任者の私の三名と中川村教育委員会関係者と午後古墳前で簡単な霊魂祭をとり行う。その後調査員で地形測量のため三角点の確認。牧ヶ原の三角点は地図にのっているのと大分位置が異っており、それ以外の三角点は相当距離があり時間がかかりそう。またま片桐小学校の校門の前に標高をとってあるというので見学にいく。しっかりした石柱であるのでこれから標高移動することに決めた。標高五四五メートルである。本日は明日からの器材の整備にあたる。明日からは小野征之、早川敏男も調査員として参加するが国鉄のストライキが心配である。

三月二八日(月)

九時作業開始。午前中三名で標高移動にかかる。古墳裾部まで一〇ヶ所に標高移動して、五四七・四九メートルとなった。あまり移動地点が多いのでもう一度移動しなおすことにする。

ストで心配していた後続の小野、早川の両名到着。午後からは手がそろうので古墳のマウンドの測量開始する。

作業分担　測量班　小野　上川名玲子と私の三名。標高移動班　早川　山本の二名。

測量班は小野が平板係、上川名玲子がトランシットでコンターよみ、私がスタッフ持ち、標高移動が完了した後は早川・山本の両名メジャー係、午後からは中川村片桐中学校教諭本田秀明も手伝いに参加。

マウンドの測量はわりと早く八分通り完成、作業修了は五時三〇分。

作業終了後公民館で作業の打ち合せ、調査員と林支所長、文化財係の新井氏、本田秀明。マウンドに露出してくずれている巨大な天井石をとりはずすには調査員では不可能なので専門の石屋にたのむ

こととし、すぐに石屋に連絡。巨石のとりはずしが出来ることになった。

明日の作業は墳丘の測量が終了後、出来るだけ地形測量をすることにする。午後からは巨石のとりはずし作業を予定。

三月二九日㈫晴

七時三〇分起床、八時三〇分作業開始

本日の作業午前中より宮下建設会社によって天井石のくずれているのをチェーンブロックでとり除く作業をすることにしたので古墳の測量作業を中止し、標高移動を往復する作業をし、往復の誤差二センチ、三センチ以内であるため、標高から移動したものが五四七・三一メートル、古墳の裾部から標高まで五四七・三三メートルとなり、前者をとって古墳の東側裾部に杭を打ち標高とする。

古墳の周湟を見るため、東西南北に幅一×長さ二メートルのトレンチを設定し発掘を開始。東側のトレンチは果樹園のため相当掘りかえされ周湟の確認は不可能であった。

南側のトレンチは墳丘裾部にかかっており、葺石がしかれ、その先端部には落ち込みがあるようだ。明日以後先端部の調査をする予定。午後から羨道部の巨石がとりのぞかれたので羨道部の調査、天井石が墳丘のゆるみで大きく傾斜し、保存するには側石の修理も必要であろう。羨道部前方の土砂を排土し、石室内の調査をしやすくする。羨道部天井石の封土中より大形の常滑の破片出土、直接古墳に関係あるものとは思えない。作業終了後は開放された羨道部をシートでふさぐ。本日城北高校教諭今井正司到着。

三月三〇日㈪雨

ついに心配していた雨になって、古墳の測量は不可能な状態となった。

以前に古墳から出土した直刀二振、金環、また公民館に所蔵されている土器、土偶の実測図作製にかかる。本日で早川帰京、実測に六時までかかる。

明日は少しぐらいの雨でも測量調査を実施することにする。

三月三一日㈫雨

午前中雨の中を現場にいき、平板ポイントを墳頂部より梨畑におろし、古墳附近の地形測量にかかる。ずぶぬれで午前中三本のコンターをとる。本日で小野・今井の二名帰京、明日より最初の先発隊の三名になる。

明日の作業、墳丘裾部に入れたトレンチ内の葺石の実測をする予定。

四月一日㈬晴天なれど風強し

作業開始九時、古墳の西南側の墓地附近のとりのこした箇所の測量。南トレンチの延長した箇所、すなわち墓地の東側にいくらか空地があるので第二次調査のときにトレンチをのばしてこの箇所で周湟の確認させてもらうことにする。地主とも了解ずみ。

午後一時、教育長・教育委員長・支所長、古墳に集合。今後の処置について現状を見ながら相談会を開く。

くずれかかっている天井石を修複せねばならず、これはわれわれの手では出来ず専門家にたのむ。またマウンドが大変いたんでいるので土盛をすることも必要、また石室内の土砂排土作業と実測に相当費用のかかることも説明する。県の文化財係に連絡して一度見て

もらうことをすすめた。

午後の作業、墳丘裾部の葺石の測量、三時頃、中川村の女子高校生数人見学。聞くところによると中学時代時々玄室内に入って掘りかえしたとのこと。

作業終了三時三〇分、明日の作業、葺石のセクションと墳丘と石室内の撮影にかかる予定。

四月二日(土)晴

六時三〇分起床、七時朝食、作業開始八時。雨と天井石とりはずしの作業のため、作業が三日ほど遅れてしまったので少し無理することにした。玄室内の写真撮影のため、近くの茶和屋商店から電源をとり古墳までコードを引き電燈をつける。一〇時頃、助役・議員の見学あり。昼頃伊那市の小池・田畑の両君見学。議員の松田氏の家の近くに石を積んだところがあるので是非一度見てほしいとのことで中食前にいく。場所は片桐中央にあり、以前に尼寺があったとのことである。墳丘は殆んど切りくずされ、天井石が露出していた。古墳の石室に間違いなく天井石の規模から片桐一号墳ぐらいの円墳であることを確認する。天井石の周囲には石仏が並んでいる。片桐天伯古墳と命名。

午後作業開始一時。三時三〇分頃中川村の古墳の紹介者である林茂樹見学。宮田小学校に転任で多忙であったとのこと。午後から人夫が二名出てくれたので、東トレンチ、南トレンチと羨道部を一時埋めることにした。

作業終了五時。

四月三日(月)晴風が強いが春風

午前中古墳の北東部の梨畑の測量。本日本田秀明手伝いに来てくれた。一一時頃までに殆んど測量完了。一二時に公民館にもどり器材の清掃。本日で第一次調査を終了。上川名玲子帰京。村の大島智久治氏昭和三五年二月に牧ヶ原の開拓の時出土した土師器の坏を持って来てくれた。後期の土師器で、個人で持っていてもしかたがないので公民館に寄贈していただくことにした。

四月四日(火)晴

午前一〇時に中川村の議員の見学、一応古墳についての説明をする。夕方帰京。

第二次調査（内部構造の調査）

七月一九日(火)晴

新宿駅に亜細亜大学の室伏輝男、小杉秀一、角伸二の三名と中川村へ。

五時頃西公民館で教育委員長、支所長と片桐古墳の調査の手順についてミーテング。

七月二〇日(水)晴非常に暑し

七時起床、八時三〇分作業開始、朝から非常に暑い。古墳に器材を運ぶ、学生三名はじめて片桐古墳に来たので説明をする。

本日の作業、夏草が墳丘上を覆っているので草刈作業をする。午前中かかって墳丘上の草刈終了。

一一時三〇分午前中の作業終了。本古墳は朝から太陽をまともに受け、灼熱の暑さ。三月の第一次調査とは異なり、朝早くから作業

を開始して日中休まぬと調査員がたおれてしまうだろう。

午後の作業二時に開始、第一次調査の時と同じく宿舎は西公民館で、昼食は一度公民館にもどってとることにしている。

午前中刈りとった夏草を果樹園に敷きつめ、三時頃よりいよいよ玄室内の清掃にかかる。第一次調査のときと同様、茶和屋商店より電源をとり、玄室内に工事用の電燈をつけての作業である。

本来ならば、天井石をすべてとりはずして調査すべきであったが、予算の関係でそれもできず、苦しい調査であった。

玄室内を奥壁の西側から一区から六区とし、一区は南北九五・東西八一センチ・二区は南北九一・東西九〇センチ、三区は南北九〇・東西八五センチ、四区は南北九〇・東西九〇センチ、五区は北南九一・東西九〇センチ、六区は九一・東西七五センチで玄室の側石に凹凸があるので不規則な方形になってしまった。一区と二区は室伏、三区と四区を角、五区と六区を小杉が担当して、丁寧に堆積土の排土作業にかかる。排土された土砂はすべて薬袋に入れて、公民館まで運び、後で水洗いすることにした。

一〇センチほど排土作業をしたとき玄室の三区の西側より人骨片が出土、床より四〇センチも上部である。写真撮影してとりあげる。何度も玄室内堆積土は掘りかえされているので人骨の小破片が玄室内に散乱しているようだ。とにかく玉類や金環等の小さなものはわからなくなってしまうので細心の注意をはらって作業をすることにした。工事用電燈一個をつけての作業であり、玄室内は非常に暗く、作業は思うようにはかどらない。排土した堆積土は薬袋三一個になった。本古墳の玄室内より出土した人骨は墳頂部に建てられている「大乗妙典供養塔」との関係も考えねばならず、被葬者の人骨かどうかはなはだ疑問である。

六時作業終了。九時よりミーティング、明日の作業、玄室内の床に近い直接古墳に関係のある人骨や、副葬品を確認すること。暗い所での作業であるから一層細心の注意をはらって調査をすることを調査員に徹底させる。八時三〇分頃八王子市の佐々木蔵之助より電話あり、二三日の朝八時三〇分に飯島駅につくとのこと、応援ができて心強い。

七月二一日(水)晴今日も暑し

八時三〇分作業開始、昨日あまり暑く作業がきつかったので調査員少しつかれぎみ。本日は小休止を多くとることにする。玄室内に虫類が多いので本日は作業前にキンチョールで虫を追い出すことにした。玄室内が、少しおさまってから作業をすることにし、その前に農道より古墳に入る通路がせまいので両サイドの藪を切り払う作業をする。午前中の作業一一時三〇分終了。

午後から昨日につづき玄室内の排土作業、区画した一区～六区を同一レベルで排土作業をする。玄室の奥壁より玄室内を東西に二分し、羨道部にむかって水糸を張る。人骨が出土しているので警察にとどける。四名ほどの警察官が来て事件に関係のない人骨であることをたしかめる。本日の作業分担、一区・二区は小杉、三区・四区角、五区・六区は室伏、一区の排土作業は上から三〇センチほど完了したが、まだ三〇センチほど土砂が堆積している。中央近く人頭大の石が床に密着して発見された。この石を動かさないように排土作業をする。土砂はわりとやわらかい。

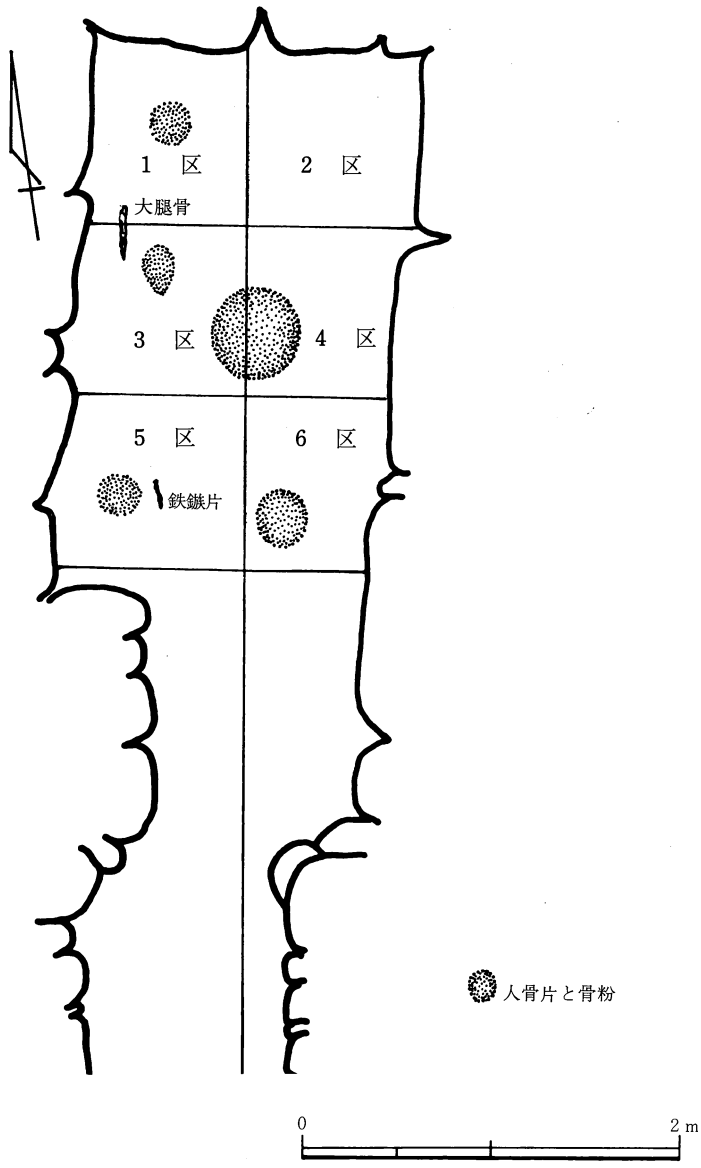


Fig. 2　横穴式石室区分図

二区からは人頭大の石が四個、長さ四〇センチほどの長方形の石が東壁にそって出土、骨片が出土しているがいずれも土砂の中に混在している。

一区から三区にかけて長さ三七センチの大腿骨一検出、堆積土の上面から二六センチほどの箇所である。早速写真撮影をする。石室の床よりは大部上部に位置している。

四区は中央線近く長軸三〇センチ、短軸二〇センチほどの楕円形の範囲に骨片と骨粉が集中して検出される。しかし床よりは大分上の方である。

五区は本日はじめて排土作業を開始した区で、上から三〇センチほど排土する。三区との境い近く歯が二点検出される。

玄室内の作業も竹ベラによる作業で非常に時間を要する。作業終了六時。八時三〇分よりミーティング、持ち場の分担が決まったので分担者が発表する。

七月二二日㈮本日も暑し

玄室内出土の人骨及び骨片等は、墳頂に建てられている大乗妙典供養塔の碑との関係もあり、床の相当上の部分から出土している点から考えて本古墳と直接関係ある人骨としてははなはだ疑わしい。

今日もギラギラと照りつける太陽が容赦なく墳丘にふりそそぎ、作業は午後三時過ぎないと日陰ができず、苦しい調査である。

午前中宮崎村長の見学あり。午前一一時三〇分に午前中の作業終了。

一区・二区とも堆積土を四〇センチほどの厚さに排土、あと二〇センチほどで床に達する。堆積土の下の方は少し堅められている様子。

三区・四区とも一区・二区と同じレベルまで排土作業が出来た。四区は昨日まで骨粉が多く見られたが、本日は出土がみられなかった。五区は、中央に比較的大きな石の存在が見られ、その附近に骨粉の出土が多い。六区は北側に比較的な大きな石と偏平な石が発見された。

明日の作業は床の探査に全力をつくすことが出来そうである。

午後四時過ぎに老人クラブの委員の見学があった。作業終了五時三〇分。

七月二三日㈯毎日猛暑がつづきひと雨ほしい。

六時起床、九時に佐々木蔵之助到着。

八時三〇分作業開始、本日の作業まず奥壁と東西壁の実測にかかる。一区と三区にわたって発見された人骨を取り除くことにした。この大腿骨をとりあげた二〇センチ下から、色あざやかな緑青の中に金色に輝く金銅装の柄頭の一部が検出された。すぐに金銅装の全貌を検出する。刀身は途中でなくなっているが、柄には唐草模様のくずれたものが打ち込まれている。ちょうど此の頃、城北高校教諭小野征之到着、佐々木・小野と調査員の手も出来たので、調査にも活気が出てきた。しかしこれだけ盗掘の盛んに行われた古墳にしてはよく金銅装の柄頭が残存していたものだ。すぐ教育長に連絡する。午前中の作業終了は一一時三〇分。

午後一時より作業開始、小野征之は金銅装柄頭の実測にかかる。

この金銅装の柄頭の下部は三センチ程の比較的厚く堅められた土が敷かれており、これは本古墳と直接関係のある副葬品と考えて間

違いなかろう。また本古墳の時期を決定する確実な資料ということが出来る。

作業終了五時三〇分、金銅装の柄頭の実測完了。明日は出土状態を撮影するため、柄頭をそのままにして厳重にかこいをして宿舎にもどる。夕食後九時よりミーティング、調査員の手もふえたことでもあり、明日からはさらにどんな副装品が発見されるかわからないので、細心の注意をはらって調査することも一同の一層の奮起をうながした。疲労の重なった調査であったが思わぬ副葬品の発見により調査員にもよろこびの色がみえる。

七月二四日(日)晴、本日も暑さきびしい

中日新聞に金銅装の柄頭の出土が報ぜられている。本日は日曜日でもあり見学者が多勢くることだろう。

八時三〇分作業開始、調査員一同心をはずませて古墳にいく。本日本田秀明中学生六名を連れて手伝いに来てくれた。本田には中学生と一緒に公民館で玄室内の堆積土をフルイにかけ水洗いしてもらうことにした。

金銅装の柄頭は小野征之が中心になって実物大に実測。

六区の北側より銅環一出土、原位置からはずいぶん移動しているようだ。

さらに羨道に近い玄門の下近くで、金環一発見、床より六〇センチも上部の位置である。奥壁と東西両壁の実測は一時中止して、玄室内の床検出に全力をあげることにした。

奥室の床が顔を出した。河原石の平担な面を同一レベルに敷きつめてある。堆積土がつまっていた時は腰をかがめなければ石室内には入れなかったが、床から天井石までは一・七四メートルもあり、立って充分に歩ける状態になった。柄頭・金環・銅環の写真撮影、羨道部から比較的大きな石が顔を出し、上から落ち込んだものらしい。この附近より、須恵器片と土師器の油坏片が出土している。

本田班は堆積土をフルイにかけて、金環一と多量の人骨片と鉄類の鉄片が検出されている。また盗掘に使用されたと思われるローソクまでが検出されるしまつである。

午前中の作業一一時三〇分終了。

午後の作業はまず柄頭のとりあげ作業。これは責任者である上川名があたる。そのため割切りにした竹筒を用意する。ナイフで金銅装の柄頭の下側を切りはなし、くずれないように竹筒に納めてホット一安心。羨道部近くから鉄片二点、玄室内の四区の東壁の下から土師器の坏一点が検出された。本日の作業終了六時四〇分、夕食後ミーティング。

七月二五日(月)連日猛暑がつづく山国の中川村では珍らしいとのこと。

作業開始八時三〇分、本日より地元の高校生中塚和司、宮崎千里、桃沢貴美、斎藤五月の四君調査に参加。

玄室奥より清掃にかかる。奥壁西側隅部よりたばねられた鉄鏃発見。奥室に堆積していた土砂は厚い所で六〇センチ、薄いところでも五〇センチあった。

玄室から羨道部にかけて清掃中に須恵器の小形壺、また羨道部に落ち込んだ石の下から須恵器が発見されたが、本日は全貌を検出するまでに至らなかった。

天井石の玄門近くの先端部がくずれて斜めになっているので、これを専門の石屋が補修してくれないと作業が出来ないので、明日には必ずきてくれるよう申し入れる。

羨道部前にトレンチを設定し、室伏・角・中塚・桃沢・斎藤の五名で排土作業、このトレンチ内より金環一が発見された。盗掘者が落していったものであろう。五時三〇分本日の作業終了。九時よりミーティング、羨道部前のトレンチ内よりも金環が発見されているので、トレンチ内の調査も細心の注意をはらって作業をすることを厳命。また羨道部の東壁よりに須恵器が重さなって出土しはじめたので、土器を動かさず全貌を明らかにすることに全力をあげることにする。

七月二六日㈫晴夕方雷雨あり

朝早く友野良一氏と伊那市の飯塚君見学に来る。本日より石屋が来て作業をするので、玄室内の作業は不可能となる。それでも玄室の奥壁より発見された鉄鏃の実測を天井石の補修の合間を見ながら実施する。

午後友野良一氏現在調査している遺跡に参加している人たちをつれて再度見学に来る。

羨道部前のトレンチより須恵器片が多量に出土、天井石を補修するため天井石の上部の盛土の一部を排除作業、その結果天井石と天井石の隙間には人頭大の石とその間に拳大の石でふさいであったことが明らかにされた。天井石をとりのぞく作業に非常に時間がかかり六時を過ぎてしまった。補修するにも一度とりはずさねば出来ないとのことであった。予算があれば、天井石を全部とりはずしてもらいたかったがそれも出来ず、玄室内の作業は手さぐりでやるしまつであった。

七月二七日㈬本日も暑し

本日も天井石補修のため玄室内の調査は出来ず、墳頂部の一部が天井石に平行してけずられているのでセクションをとる。セクションは二層しか認められなかった。第一層は黒褐色で木や草の根の多い層で、第二層は茶褐色で比較的かためられていた。その下にすぐ天井石が位置している。さらに墳丘を一部けずりとったついでに壁部に用いられた石組について観察すると、玄室内に顔を出している面の石は、非常に長い石で殆んどが墳丘にさしこまれお送り出しに積まれていたのを確認した。数トンもある天井石を支えるにはなるほどかかる積み方をしたのかと感心した次第である。羨道部の西側に落ち込んでいた長方形の石は、天井石を支えていた側石であったことを確認することが出来た。

本日午前中県の丸山指導主事が来村し、西公民館で、区画整理をする西ケ原遺跡についての相談会を開催していた。前から同席してほしいとの連絡があったので筆者も会議に参加する。

そのついでに中川村と松川町の境い近くにある通称富士塚を指導主事と一緒に見学をし、古墳であることを確認してもらう。その後天伯古墳も見学、相当時間をとられ、いそいで古墳にもどる。四時頃飯田女子短大教授大沢和夫氏の見学あり。

羨道部前のトレンチより、須恵の高坏の脚部と、径一〇センチの須恵器の蓋の完形品が出土。しかし羨道部前の墳丘部より、須恵器の発見がなされているのは盗掘者が落していったものか、あるいは墓

前祭が行われたのであろうか。

天井石補修のため玄室内が小石や土砂が落下し、玄室内の清掃をまたやりなおさねばならない。手順がくるってしまうと作業の進度が遅れてしまう。

七月二八日㈭晴、本日も暑し。中川村でこの暑さ、東京ではさぞかしむし暑いことであろう。

一〇時次長が来たので古墳の説明後、公民館にて今後のあり方、予算について打ち合わせたいことなどをつげる。二時三〇分頃信毎の記者記事をとりにくる。

四時少しまわった頃、宮崎村長が見学に来られた。古墳の説明をし、公民館にもどり金銅装の柄頭・金環等今回の副葬品を見ていただき予算がオーバーしていることを認めていただく。

暑さのため調査員の疲労もはげしいので本日は五時作業を終了とする。本日発見された副葬品、玄門部近い西壁近くから轡。

七月二九日㈮連日の猛暑、筆者も少しへばってきた。

暑さのため調査員の疲れがひどいので起床を三〇分遅らせて、七時三〇分とする。

本日の作業、西側の壁を補修が完了したので天井石をもとにもどす作業。天井石のすきまをもと通りに拳大と人頭大の石でふさぎ、墳丘の盛土をもとにもどす。午前中いっぱいかかってしまった。

午後は補強した盛土をかためる作業のため玄室内での調査は出来ず、全員羨道前のトレンチ作業にかかることにした。幅二・長さ五メートルのトレンチ内をソフトロームまで掘り下げる。

本日はさらに南側に幅一×長さ二メートルの拡張部を設定して周溝を確認するつもりで作業を進めたが出来なかった。

昼食頃林繁樹氏見学。

午後トレンチ内は深い所で封土より七〇センチ、浅いところで五〇センチまで掘り下げることが出来た。トレンチ内からは須恵器・土師器片の出土がみられた。玄室内の調査は石屋の作業状態を見てやらねばならず相当遅れてしまった。六時三〇分作業終了。夕食後、金銅装の柄頭の修理について、大阪の末永雅雄先生宅に電話をして御指導いただく。予算のない村のことであまり費用がつくれないことを申し上げると、先生は文化財研究所に連絡し相談してみることが良いでしょうとおっしゃられた。当方に持って来ても良いのですが君が関東の出身だから、と気をつかって下さった。もしそれでだめならまた連絡しなさいと適切な御指示をいただいた。早速八王子市の佐々木蔵之助にたのんで文化財研究所に連絡してもらうことにした。

七月三〇日㈯本日も暑し

午前中教育長・教育委員長の見学あり。遺物整理と金銅装の柄頭の修理と保存について今後の処理について相談。また昨夕末永雅雄先生の御指示をいただき、見学者が来るたび調査責任者の筆者が説明していたのでは、ますます調査が遅れてしまうことと、さらに金銅装の柄頭をそのつど取り出して見せていたのでは破損はまぬがれないので、今後は誰れが来ても柄頭を見せないことにする旨を伝える。本日の作業出土した副葬品の整理と、古墳の調査をするものと二班に分ける。

副葬品の整理班は、室伏を主任に高校生の桃沢・斎藤・北島・水

野の四名、土器の水洗いと遺物台帳の整理、遺物の梱包をする。

古墳には筆者と小杉・角の三名が石屋の手伝いにいく。午前中で天井石の補修工事も八部通り終了。午後は玄室内に落ち込んだ土砂の排土作業と清掃、玄室の西側の袖の近くから留金具と鉄片発見。

午後中川村文教委員の見学あり、作業終了五時。夕食後、佐々木蔵之助より連絡あり、金銅装の修理について日本文化財研究所江本部長に連絡してくれたが、非常に仕事がたまっているのでいつできるかわからないとのことであった。

早速申し訳けないが、末永雅雄先生に御指導をいただくことにした。先生は、それでは平城京跡調査部に連絡してみるとおっしやって下さった。

七月三一日(日)寒暖計は三七度を越え、非常に暑し

本日本田秀明中学生二名を連れて手伝いに来てくれた。玄室内の堆積土をフルイにかける作業をしてもらう。

古墳では天井石の最後的な修複作業、数トンもある巨大な石を一度つりあげて固定した。側石の上にのせる作業に一日かかってしまった。

トレンチ内の清掃、留金具と鉄製品の出土状態を写真撮影、周湟の確認は今回の調査では無理なことがわかった。玄門部近く須恵器の壺と蓋を発見、今日はそのままに埋めて、明日写真撮影と実測図作製にかかることにする。

明日の作業、天井石の作業が完了したので玄室内の清掃を再度やることにした。

八月一日(月)猛暑がつづく

本日の作業、平板・トランシットを据え天井石の実測と写真撮影といっても羨道部に近い天井石だけで全部を測量することは出来なかった。

また玄室内にとり残してあった副葬品の写真撮影。その後玄室内の清掃にかかる。

午後から桃沢・宮崎の両君参加。玄室内の清掃は奥室からはじまって⅔ほど完了、玄門近くと東壁近く新らしい土器類が発見される。この副葬品は、本古墳の副葬品として原位置におかれたものと思われるので細心の注意をはらって全貌の検出にかかる。羨道部は人頭大の石が階段状につまれているが、落ち込んでそうなったものか、意識的につくられたものか確認することはできなかった。

本日の午後松川町の松下拡氏見学。富士塚が周湟をもつ片桐古墳より一まわり大きい円墳であることを説明し、これ以上破壊されぬ前に墳丘の測量をしておくことをすすめる。

八月二日(火)連日の暑さで一同疲れはててきた。

羨道部近い東壁下に発見された須恵器は二重・三重にかさなっていることを確認、全貌を明らかにし、実測にかかる。また奥室の西壁隅部に発見されていた鉄鏃のたばねられているのもやっと実測にかかる。

残っていた羨道部の排土作業、また天井石の墳丘に土を入れて整備にかかる。羨道部前のトレンチもローム面まで掘り下げセクションをとる。作業終了六時。

夕食後も地元の高校生の手伝いで土器の水洗いと副葬品の整理にあたった。

八月三日㈬今日も相変らず暑い一日だった。

午前中の作業、副葬品の実測と写真撮影。羨道部近くより卵形の鐔が発見され、その下に直刀があるようなので検出にいそぐ。奥室に発見された鉄鏃の実測完了。写真をとり、とりあげる。この鉄鏃は床面上に三センチほどの厚さに黒土が敷かれ、その上に置かれていた、奥壁の実測開始。

羨道部の西側袖近く、人頭大の石の下から須恵器の蓋が一発見された。

午後は作業を二班に分ける。

一班は、玄室内に堆積していた土砂のフルイ作業。

二班は古墳の副葬品、奥壁の実測にかかる。フルイ作業で鏃および鉄製の破片を多量に発見。羨道部近くから発見された鐔とその下の直刀を検出し、実測にかかり完成。奥壁の実測もあと少し、羨道部近く発見された直刀の上に人頭大の石が二個のっていたので盗掘をまぬがれたのであろう。しかし直刀の埋置された位置とすれば大部ずれているようである。

八月四日㈭連日猛暑が続き作業困難。

本日の作業分担、玄室内の実測とフルイ作業、トレンチの整備、さらに天井石の補強のため石屋がコンクリートでかため、その上にロームを運んで土盛作業を本格的に開始。

午後は実測に全力をあげ、七時までかかる。明日から亜細亜大学の三名が帰京するので、地元の高校生の力をかりねば、調査は出来なくなる。

現在までに発見された副葬品は、坏一一・碗一・小壺二・鏃・刀子および多数の鉄製の破片、またフルイ作業の後、水洗い作業をした結果、ガラス玉二、鋲五が検出された。

明日は石室の実測と副葬品の実測、さらに直刀と轡の写真撮影。

八月五日㈮本日も猛暑

大学生が帰京したため、作業人員手不足。

副葬品は写真撮影後とりあげる。羨道部前のトレンチを1/20に測量開始、また夕食後、本田秀明が宮崎千里・中塚和司の高校生の援助で玄室の実測をするという、あまり無理しないように伝える。桃沢貴美と私は公民館で土器の水洗い作業、玄室内の測量あまり無理なので中止するよう伝える。夜一〇時過ぎまで古墳の玄室内の作業はこのましくない。

明日の作業、高校生の手伝いで、玄室内の測量を午前中できるだけやり、午後は器材のかたずけをして、第三次調査に残った実測をすることに決定。また墳丘の整備も石屋にやってもらわねばならない。

本日の昼休みに末永雅雄先生の御配慮で、平城京調査部と電話連絡がとれ、森郁夫氏に電話で金銅装の柄頭の修理についてお願いすることにし、調査終了後持参することにした。これでやっとひと安心。

八月六日㈯やや暑さが峠を越しやわらぐ

本日は本田秀明が、地元の高校生の手伝いを得て朝四時三〇分から玄室内の実測をするといって公民館に集合。猛暑の中連日作業をしていて補助調査員の高校生も大部疲労がはげしいので中止するよう伝えたが、強行することになった。玄室の測量にかかるが、墳丘

部はまだ暗く測量が不可能なので明るくなるまで出土した副葬品の整理にあたる。六時三〇分に古墳にいき測量開始。七時三〇分まで仕事をし、全員公民館にもどり朝食。今回の調査では本当に高校生の補助調査員の尽力がなければ不可能であったろう。特に中塚・宮崎・桃沢・斎藤の四名には頭がさがる。感謝でいっぱいである。朝食後斎藤五月も参加、九時に古墳にいき残された仕事を続ける。一二時まで作業、本日の午後の作業は疲労度がはげしいので三時開始にする。五時まで玄室内の床の測量をやるも完成せず、一応作業を中止し、入口をふさぎ器材をかたずけることにした。補助調査員の諸君にはまだフルイ作業と水洗いの残っている玄室内の土砂を休み中にお願いし、厚く礼を述べて帰ってもらう。

第三次調査

地元の高校生、中塚和司・宮崎千里・桃沢貴美・斎藤五月四名によって玄室内の堆積土のフルイ作業と水洗い作業である。

八月十日㈬晴後曇

土器片と鉄片が多量に検出された。また第一次調査の八月四日に採集した堆積土の中からガラス玉が三発見されたので同じ日付の袋から堆積土をフルイにかけると青色（コバルト）のガラス玉が一、あい色の玉一発見することが出来た。

八月四日の堆土採集は羨道部近くのものであり、玉類も相当原位置から離れた箇所のものである。本日はガラス玉五発見された。

参加者、中塚和司・宮崎千里・斎藤五月の三名。

八月一一日㈭朝のうちくもり後小雨

本日三五袋の土砂を水洗いしてコバルトのガラス玉三、あい色の玉二検出。また金銅装の小破片と人骨片が発見されている。あい色の玉は非常にもろいものであった。

参加者、中塚和司・桃沢貴美・斎藤五月。

八月一二日㈮曇り時々晴

昨日と同様、フルイにかけた堆積土の水洗い作業、一日かかって五五袋は完了した。

コバルト色の玉一二と金銅装の破片検出、玄室内での調査は電燈のあかりであったもので発見出来なかったが、水洗い作業によって発見出来たことは考えていた通りであった。補助調査員の高校生も筆者がいった通りの結果が出たので大変よろこんでくれた。彼等もはじめての経験であったが、いかに古墳の調査が大変であるか知ったことであろう。中塚和司・桃沢貴美・斎藤五月参加。

八月一三日㈯曇一時雨

本日は残った三九袋分全部水洗い完了。検出した遺物は土器破片・人骨片、鉄片があり、すべて水洗い作業完了。

参加者、中塚和司・桃沢貴美・斎藤五月・池場広明の四名。

第四次調査

九月二二日㈭曇

小野征之と筆者の二名で中川村にむかう。一休みした後、古墳にいき現状を見学する。またもっと能率よく調査ができるように相談

をする。

九月二三日(金)晴

今回は専門家だけの調査であり、夜も作業をすることにしている。器材を運び、電燈の配線に時間をとられてしまった。九時に伊那大島駅に佐々木が到着するので申し訳けないが林支所長にむかえにいっていただく。

顔なじみの中塚和司・桃沢貴美・宮崎千里の三名手伝いに来てくれた。夏休みの作業によって玉類を検出してくれた礼を述べ、今回もひまがあったら手伝ってくれるようお願いする。その後本田秀明も参加。午前中の作業、羨道部分の清掃と石室の床の平面図の残りの実測を続ける。トレンチより留金具出土。

本日の作業終了は午後六時、夏の調査と違って作業が非常にやりやすい。

夕食の後、佐々木・小野と筆者の三名で夜業。玄室の奥壁と西側の袖部の実測を行う。一〇時四〇分頃作業をやめて公民館にもどる。

九月二四日(土)

九時作業開始、午前中玄室の東壁の実測をするため水糸張り作業、午前中で殆んど出来上る。一一時三〇分に作業終了。昼頃、公民館に荒井教育委員長来られる。一時三〇分頃宮崎村長公民館に来られた。今後の仕事のやり方と、金銅装の柄頭についての経過を説明する。

午後から中塚和司・宮崎千里の両君手伝いに来てくれた。午後は手がそろったのでトレンチの平板測量をする。五時少し前に玄室の東壁の実測完了。五時三〇分作業終了。

六時に夕食をとり、七時三〇分に夜業に入る。西壁の実測開始一一時頃までに中ほどまで完成。本日の作業を終了して公民館にもどる。

九月二五日(日)晴後小雨

作業開始九時、午前中で玄室の西壁の実測完了。日曜日なので中塚・宮崎・桃沢の三名参加してくれた。小野征之は本日で帰京。

午後小雨になったが玄室内の仕事なので、作業を続行する。羨道部の西壁の実測完了。雨足がはげしくなってきたので本日四時に作業を中止して公民館にもどる。夕食後佐々木と二人で明日以後の作業の打ち合せ。

九月二六日(月)曇り後雨

本日は佐々木と二名での実測の完成をめざす。羨道部前の東壁の実測、殆んどが補修のため積み重ねた新しいものであるが基盤の石は動いていないので、記録にとどめることにした。また羨道部の床も実測を完了。玄室内の写真撮影、午前中の作業一一時終了。

本日佐々木帰京し、午後は筆者一人となる。玄室内に入ると静寂そのものである石組の補強にセメントを流し込んだものが、玄室内に流れ出しているのでこれをおとす作業、一人での作業で大部手間がかかってしまった。

本日教育委員会の次長に公民館に来てもらい一応これで調査の目鼻もついたので今後の整理について相談。またわれわれが中川村に来たのでは、費用がかかるのでこれからは筆者の自宅ですることを伝え、それにしても費用がかかるので整理費を筆者が帰京するまでに用意してくれるよう伝える。

午後はまた玄室内の清掃と整理、六時頃までやっと終了。今夜

からたった一人、夕食をすませて整理をはじめる。

九月二七日(火)晴やや風強し

本日はワイヤーブラッシュで、昨日までおとせなかったセメントの流れついたのをおとす作業。午前中いっぱいかかって殆んどかたずいた。午後はけずりとったセメントや石等についていた土が床に落ちたので、床の清掃、思ったよりも手間がかかる。やっと三時頃までに完了。

今夜は十五夜、疲れてしまい月も見ずに床につく。

九月二八日(水)朝夕ややひえこむ

本日で古墳の作業は終了。写真をとるだけとなった。午前中いままで出土している遺物の整理。古墳にいきマウンド及び玄室内の撮影開始。中塚和司・宮崎千里の両君手伝いに来てくれた。三時に県から関指導主事が来て、また西ケ原遺跡の相談会をするという。前からのいきさつもあるので、中塚・宮崎の両君に後をたのんで会議に出席する。

九月二九日(木)朝どしゃぶり

昼夜作業を実施したが、一週間かかってしまった。しかし一日の作業時間は平均して午前中四時間・午後四時間・夜間六時間と合計一四時間にも及び、二週間分以上は調査をしたことになる。西公民館の竹村さんに厚く御礼をのべ、また林支所長に車で駅まで送っていただく。

実測図作製日誌

九月一日(木)残暑きびしい

直刀・鉄鏃・刀子の実測二〇点やっと完了。午前九時より四時までかかる。

九月二日(金)

午前中鉄鏃一四点、錆ついていて実測に手間がかかった。

九月五日(月)

夜分鉄鏃片の実測、視力がおとろえてきたので夜業はつらい。

九月六日(火)

午後より鉄片の実測、一〇点完了。

九月七日(水)

轡・鉸具五点ほど完了。轡は二面とる。本日で六五点ほど鉄製品の原図完成。

九月八日(木)

留金具・鋲の実測・轡はトレス、トレスは原図作製より時間がかかる。

九月一一日(日)

菱形の留金具の一点は、さびをおとしてから実測、大変時間をとられた。

九月一二日(月)

石室内出土の直刀のトレス開始、錆がはげしいので相当時間がかかりそう。

九月一四日(水)
鉄製品は少し錆を落しながら原図をつくり、本日で一七六点の原図が完成。
九月一五日(木)
轡は、副葬品の配置図に使用するため、1/20に縮図する。まる一日かかる。
九月一七日(土)
敬老の日。本日鐔の実測とトレス、午前中かかる。
九月一八日(日)
本日新宿のローザで、小野・佐々木の両君と会合し整理についての打ち合せと、第四次調査の石室内の実測についての相談会、なかなか三人が会う機会がなく、やっと打ち合せが出来た。実測は上川名がやるほかなし。
十月六日(木)
本日より原図のトレスにかかる。鉄鏃のトレス五点完了。
十月八日(土)
本日も鏃のトレスと鉄片、トレスは非常に時間がかかる。
十月九日(日)
鉄製片のトレス、非常に両眼がつかれる。
十月十日(月)体育の日
一日トレスで過ごす。鉄製品のトレスは錆があるので手間がかかる。
十月一一日(火)
夜分トレス、視力が衰えたので時間を要す、小野・佐々木が少し手伝ってくれれば良いのだが時間がないので無理だろう。
十月一二日(水)
新宿に出て写真をたのみにいく。いつまで待っていても整理費が出ず、自費でやる以外なし、記憶のあるうちに整理しておかぬと、とても報告書はつくることは不可能になる。
十月一五日(土)
一日トレス、まだ半分も出来ていない。
十月一六日(日)
本日も一日つぶしてトレス、相当今日は量的にトレスすることができた。
十月一七日(月)
夜分トレス、残りあと一〇点ほどになった。
十月一九日(水)
夜分トレス、一日も早くトレスを完了したい。
十月二〇日(木)
本日で原図の出来上った実測図のトレス殆んど完了。相当量トレスにかかったのでロットリングはいたんでしまった。
十月二一日(金)
夜分遺物の入っていた箱の中からまだ原図の出来上っていない鉄片を発見する。
十月二二日(土)
昨夜発見した鉄片の原図作りとトレス。
十月二三日(日)
本日で鉄製品のトレス完了。

十月二六日(水)
トレスの完了した実測図、三〇枚を渋谷の桜印刷にもっていき黒焼してもらう。
十月二八日(金)
午後、渋谷にいきトレスの黒焼をとってくる。
十月三一日(日)
トレスが完了したので円頭・方頭・圭頭・環頭大刀の全国的な集成にかかる。
十一月一日(火)
夜分に柄頭の集成をつづけ、朝五時頃までかかって一応四国・九州をのぞいて完了。
十一月二日(水)
夜分、柄頭の集成一応完了。
十一月三日(木)文化の日
本日より伊那谷の古墳をマッピングする為、その準備にかかる。
十一月五日(土)
下伊那の古墳より開始したが、大変な量である。しかし、内部構造、副葬品まで明確に出来る古墳は数少くなく、もうすでに消滅してしまって、名称だけの古墳がいくつか見られる。
十一月八日(火)
午後六時頃よりかかって朝の五時までやっと、下伊那と上伊那の古墳の一覧表完成。
十一月一〇日(木)
本日より副葬品の原位置を保っている出土状態の石室内の配置図を作製・1/1に実測したものを1/10に縮図する。一一日・一二日と三日間で完成。
十一月一三日(日)
片桐古墳の地理的・歴史的環境についてまとめをはじめる。
十一月一四日(月)
夜分、地理的環境一応完了。
十一月一六日(水)
歴史的環境に入る。ついでに序文にかかる。
十二月八日(木)
須恵器・土師器の複原作業開始、石膏を使用せねばならず相当時間をついやすことになるだろう。夜分だけだが、九日・一二日・一四日・一五日・一六日と五日間かかってやっと完成。玉類と須恵器・土師器の実測は、日本大学大学院の学生三浦和信にたのむことにした。

第二章　古墳の構造と副葬品

第一節　遺跡

墳丘

片桐は伊那谷の竜西地区にあり、扇状地がエプロン状に西側に張り出し、果樹園と墓地にはさまれた箇所に円墳の片桐一号墳がある。墳丘の裾部は永年の果樹園作業によって、削りとられ方形を呈する状態にあり、墳丘は保存のため村有地となっている。墳頂部には江戸時代の末に建てられた大乗妙典供養塔がある。墳丘部も相当盛土がくずれ、ボーリングをさすと三〇センチほどで天井石にぶつかる。裾部には葺石が露出しているが、原形はとどめておらず、後世無造作に積みかさねられた状態である。

石室の羨道部は南にむき、天井石がくずれて人一人が出入り出来る隙間が出来ていた。古墳の北側から東側にかけては果樹園で、西南部は林となっており、大正時代頃につくられた墓地となっている。

測量図をもとにして墳丘の原形を観察すると裾部は殆んど削平され、比較的原形をとどめている西側を基準にして図上復原をしてみることにすると次の如くである。

墳丘の径（東西）　現存部一四メートル

墳丘の高さ　三メートル

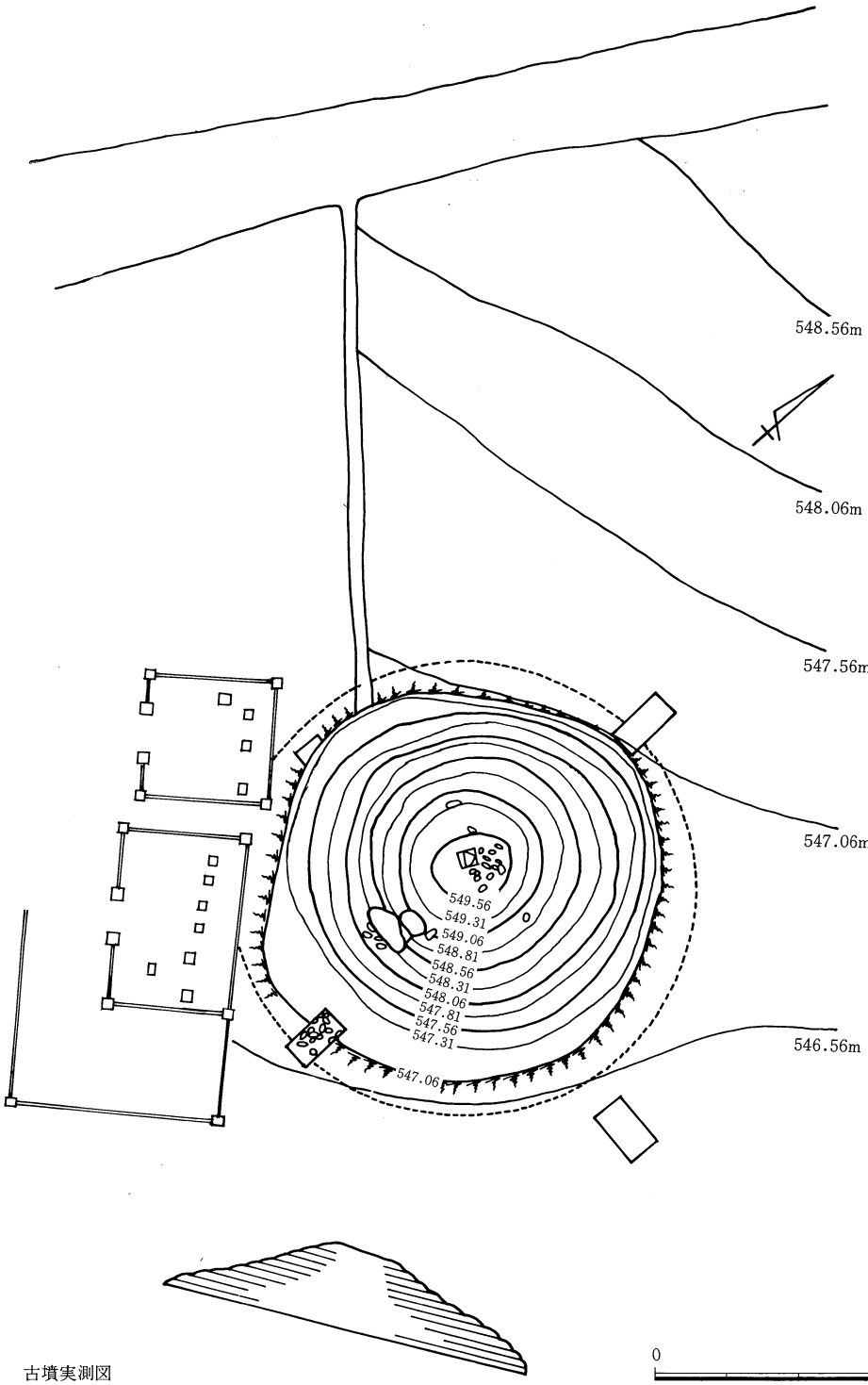

548.56m
548.06m
547.56m
547.06m
546.56m
549.56
549.31
549.06
548.81
548.56
548.31
548.06
547.81
547.56
547.31
547.06
0
10m

Fig. 3　古墳実測図

これは実測値であるが、いずれの古墳でも完全に原形をとどめているのはなく、本古墳においても同様である。墳丘の南側に設定したトレンチ内に発見された葺石の最南端を基準にして円をえがくと、径一六メートルとなる。もっとも葺石であるので動かなかったという確証はないが推定複原するにはこの方法しかないであろう。

また墳頂部は、大乗妙典供養塔を建立したさい、相当削平されたことは明らかである。高さを推定する基準とすべきものはないが、現在の墳頂部より五〇センチほどの高さがあったと推定できる。

推定複原径　一六メートル
複原高　三・五メートル

以上の如く原存径より複原径は二メートルほど大きく、高さも実測値よりは五〇センチほど高かったと考えられる。もし周湟の発見が出来れば、古墳の領域はもっと大きくなることは確実である。

内部構造

当古墳の主体部、すなわち遺骨を埋葬した設備は墳丘のほぼ中央部にあり、玄室の奥壁を北に、南に開口する羨道を有する単室の片袖の横穴式石室で、主軸の方向はN10°Eである。

直接に遺体を埋葬した石棺の発見はなかったが、石室内の堆積土の水洗い作業によって木棺片らしきものが二点ほど検出され、玄室内に木棺が置かれていたと考えられる。石室はすべて自然石を使用し、玄室天井石は数トンもある楕円形・長楕円形・長方形をなす巨石が用いられ羨道部にいくにしたがって小さくなっている。天井石と天井石の境には人頭大の石によって、さらに、その隙間は小石によってふさがれていた。奥側壁の積み方は最下段に比較的大きな根石を用い、上にいくにしたがって小さな石を積み上げている。

天井石がくずれていたのを補修するために羨道部西側のマウンドを一部削り取った時、玄室内に顔を出している

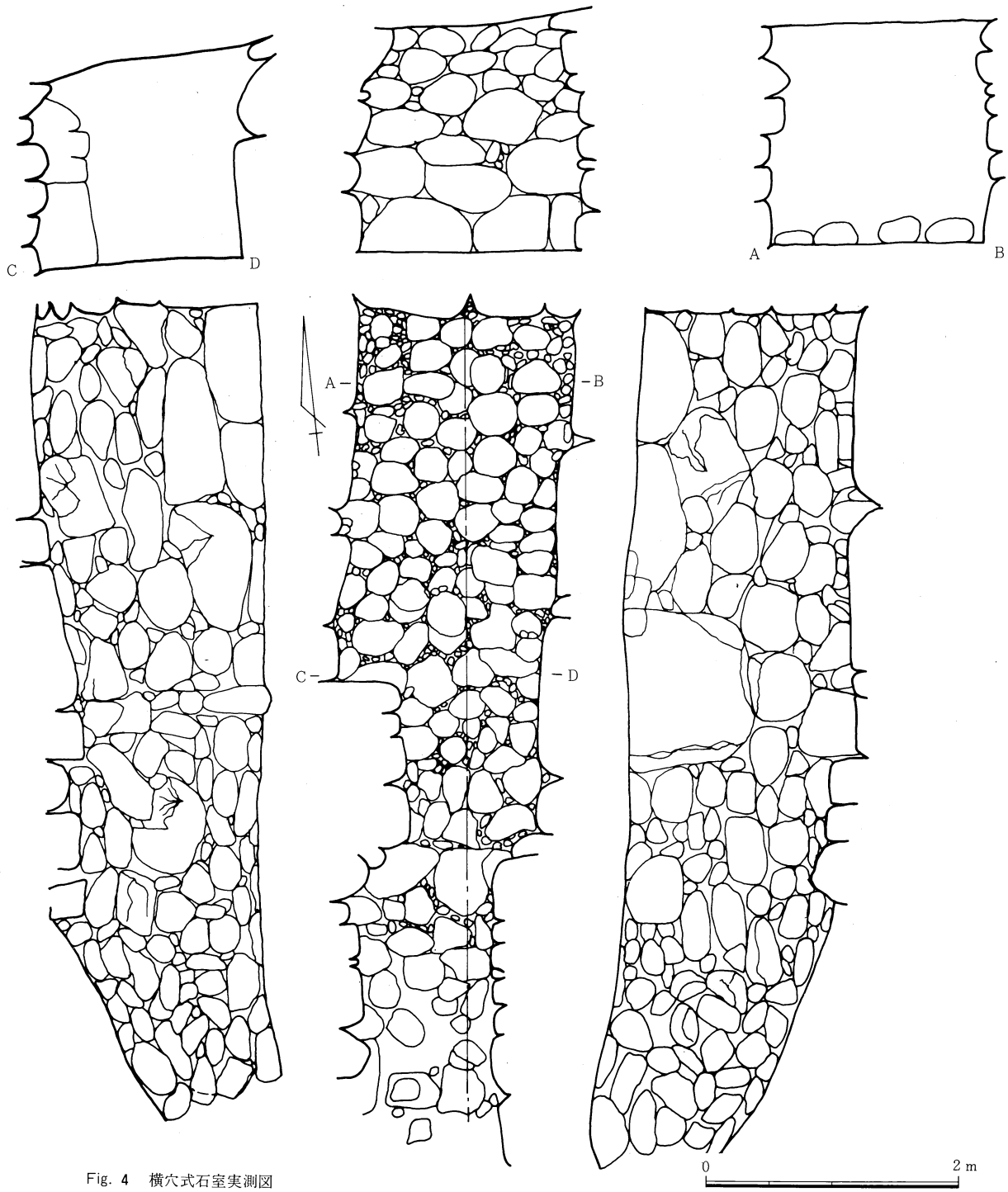


Fig. 4　横穴式石室実測図

側石面はほんのわずかで、大半は墳丘部に埋められた非常に長い石であったことを確認した。これでなければ数トンもある巨大な天井石を支えることは出来なかったであろう。側石の隙間は小さな石でふさいでいるが、すべて自然石で割石の使用は殆んど見られなかった。

玄室は長さ三メートル、羨道の長さ三・四メートル、全長六・四メートルの横穴式石室である。幅は奥壁で一・八メートル、中央部でも一・八メートル、玄門部で一・六五メートルである。高さは奥壁で一・八五メートル、東壁で一・七メートル、西壁で一・八五メートルである。中央部は東壁一・八メートル、西壁でも一・八メートル、玄門部では東で一・八メートル、西壁で一・五メートルを測る。玄室の最奥部は奥壁から五〇センチ幅に人頭大の石四個で仕切りをしてあった。

床は、河原石の平坦な面を同一レベルに敷きつめたものである。石室内部には排水設備は認められなかった。また玄門部と羨道部の境に中扉があったとしてもその痕跡はなく、閉塞状態を知ることは出来なかったが石室の玄門部近く人頭大の石五個が床上に置かれていた。これは閉塞石の一部が動かされたものであろうか。

羨道部は三・四メートル、幅は玄門部で一・一メートル、中央部で一メートルを測る。高さは玄門部で一・八メートル、中央部で一・五メートルである。羨道部の天井石は西側の裾部の先端部までその先にはない。また裾部の先端からは東壁が内側に張り出し、西壁が西側にさがりながらねじれ、類例を見ない羨道部となっている。なおこの羨道部の中央部すなわち袖の先端部附近には、第二次調査終了までは人頭大の石が積み重なっており羨門部の閉塞箇所と考えていた（調査団帰京後、石屋が仕事に入り第四次調査の時に確認するつもりであったが、連絡不充分なため全部取りのぞかれてしまった）。第四次調査中に羨道部の先端を検出したのであるが、平面プランはややねじれた形状を呈していることを発見したので、ここの先端部までを羨道として考えたわけである。あるいは羨道部は袖の先端部までで、そのねじれた先端を墓道と考えることも可能かもしれない。前述の如く、袖部の先端部には天

井石はないのである。とにかく同類の羨道部を持つ横穴式石室の例がなく比較出来ない。これに近いものとして飯田市松尾字上溝六号墳（姫塚）の羨道部が似てるといえば似てるかもしれない。

最後に天井石について述べることにする。本来ならば石室上部の墳丘にはトレンチを設定して、天井上を全部検出し、測量すべきであったが、今回の調査ではそれが出来なかった。しかし石室の補修のため玄門近くの墳丘をほんのわずかではあるが切り取ったので、それをもとにして考えてみることにする。玄室の天井石は奥室のものが一番巨大で、ついで中央部、玄門部となり、四トンから二トンほどの石を四個使用している。なお天井石と天井石の境目は人頭大の石で縦にふさぎ、さらに小間隙部を拳大の石でふさぎ、上に土盛していることがわかった。天井石の石材は中川村の片桐附近では認められず、その他の石はすべて天竜川の河原石を使用したものと思われる。

玄室最奥部の天井石は、約長さ二六メートル、幅一五メートルの楕円形をなす一番巨大な石で、玄室の中央部は長さ二五メートル、幅九メートルの長楕円形、玄門部上部の天井石は長さ二〇メートル、幅七メートルの長方形、羨道部上部は長さ一五メートル、幅三メートル長方形の石を使用している。

玄室内の最下段には比較的大きな石を据え、その上に陵をうまく組合せて積み重ね、間隙部には人頭大から拳大の礫を挿入している。天井上部にいくにしたがって小形の石を使用している。

奥室の正面には通常大きな鏡石を据えるが、本古墳ではそれが認められなかった。東壁の玄門近くに、比較的大きな石を用いているのが特徴的である。

側石は、玄室内に顔を出している面はほんのわずかで、その三倍から四倍ほどの長いものが墳丘に挿入されていることを、天井石の補強作業のため墳丘を削ったとき確認できた。

石室の底面上には五〇～六〇センチほどの土砂が堆積しており、盗掘者の侵入によって踏みかためられ平坦になっていたため、床を検出するのに時間が非常にかかった。石室内の床は地表面と同一レベルで、河原石の平らな面

を平坦に敷きつめ、間隙には小礫を挿入している。

そして、玄室の奥壁は五〇センチほどの間隔で石を四個据え、最奥室部に仕切を設けた状態であった。あるいは枕石の代りとしたものであろうか。しかしこの石はただの人頭大の河原石である。なお玄室の玄門近くにも不規則ではあるが、床に河原石が据えられていた。

玄門部と羨門部には間仕切石は見られなかった。もっとも盗掘が盛んであったのですでに取り除かれてしまったのかもしれない。

第二節 副葬品

石室内副葬品の出土状態

前述のように盗掘のはげしい古墳であったため石室内副葬品の散乱がはげしく、調査前にも直刀二、金環一が出土していた。玉類はすべて堆積土に混じっており、水洗い作業によって検出されたもので出土位置を確認することは出来なかった。

さらに人骨の散乱がはげしく、堆積土の排土作業にかかったはじめから出土し、それも玄室の床の上部から発見され、本古墳に直接関係ある人骨と確認出来るものは調査中には検出できなかった。

副葬品のうち原位置を保っていると考えられるのは、玄室最奥部より発見された鉄鏃、さらに金銅装の柄頭、玄門近くの西壁下から発見された轡、東壁の玄門近くから発見された須恵器と土師器だけである。

金環や銅環等も位置が正常でないことから、盗掘者によって攪乱され浮き上って位置を変えてしまったと考えられる。

玄室の床上には、厚さ二～三センチに黒褐土が敷かれており、副葬品はその上に置れていたようである。玄室の最奥部の西側隅部からたばねられた鉄鏃が検出され、間仕切をしていた箇所からは副葬品としてはこれだけであった。この鉄鏃が検出された箇所の黒褐色土上部から円頭柄頭を奥壁にむけた金銅装の柄頭が発見されている。奥壁から八〇センチ、西壁から一五センチの位置である。

金銅装の柄頭は長さ三〇センチ、幅四センチ、刀身は途中で折れてしまっていた。この金銅装の一〇センチほど上部から比較的人骨が多く検出された。この柄頭より玄門部にむかって一・一メートル、袖部より五五センチほど中に入った箇所から轡が一発見され、その近くより鉸具、鞍が検出された。

羨道部の西側の袖の下に須恵器蓋の破片坏、壺と鉄製品が見られた。また羨道部の東側の下から須恵器の坏・蓋・土師器の小壺が折り重なって検出され、この下から喰が一発見された。

以上の副葬品は原位置を比較的保っていたと考えられる。

このほか奥壁より一・八メートル、東壁より四〇センチの箇所から銅環一、奥壁より三・二五メートル、東壁より四〇センチの位置から金環一、羨道部の東側から剣先を玄室にむけて直刀一と鐔が検出された。直刀の上部には比較的大きな河原石が二個のっていた。副葬された位置としては現位置とは考えられず、盗掘者が持ち出しなんらかの理由で置きざりにしたのであろう。羨道部の西壁の下からは須恵器坏の破片が出土している。

以上が石室内から発見された副葬品のすべてである。なお堆積土の水洗いによって金環一、小玉二五と鉄片、人骨片が発見されている。

さて本古墳に直接関係のある人骨をと思い細心の注意をはらって調査をしたのであったが、これを確認することは出来なかった。人骨片・骨片は玄室内の堆積土の中に広く散乱し、原位置を保っていると考えられる副葬品と同一レベルからは発見することが出来ずに終ってしまった。また盗掘者によって掘りちらかされてしまったのかもし

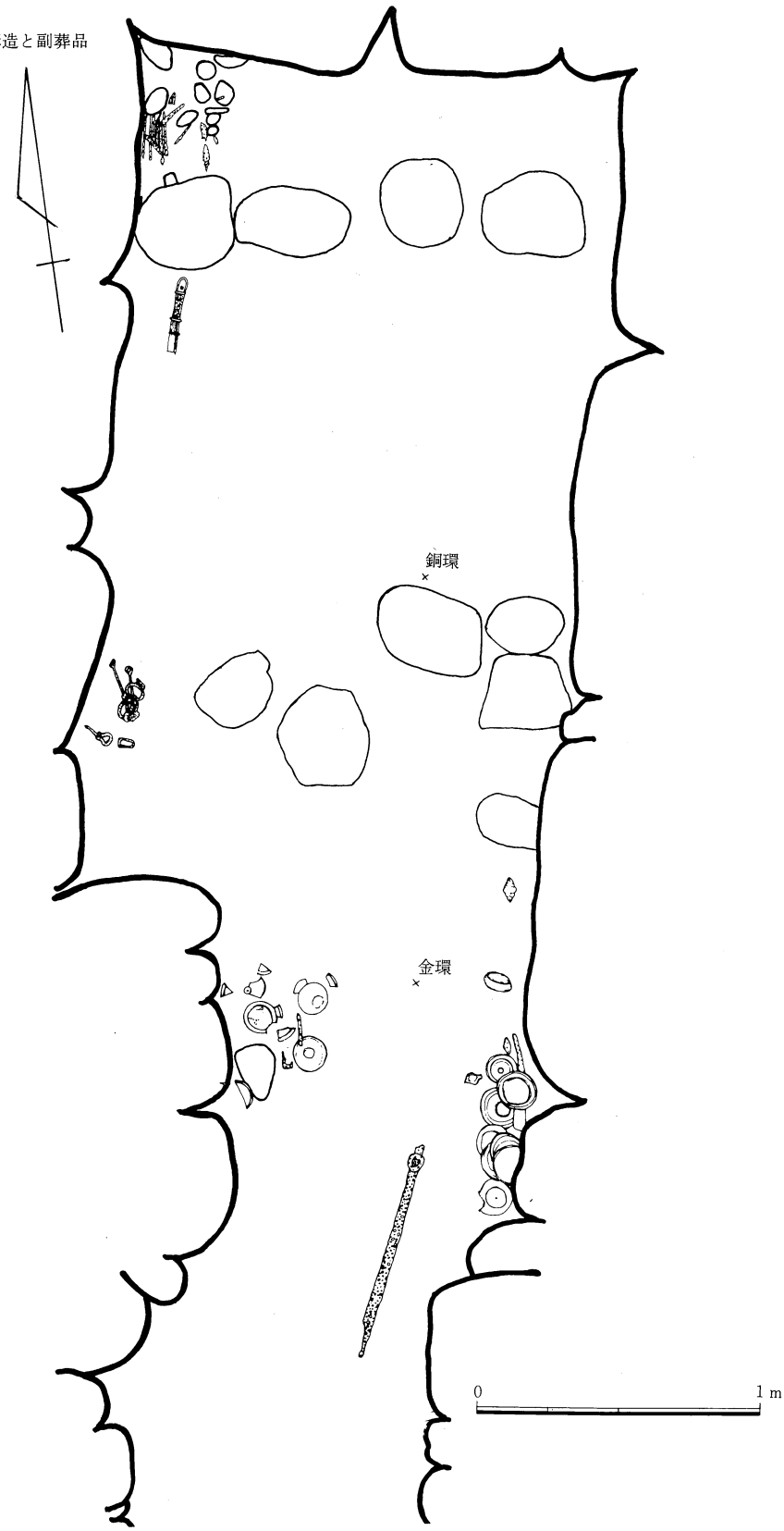


Fig. 5 副葬品出土状態図

れないが、墳頂部にたてられている「大乗妙典供養塔」の時期のものと考えたい。

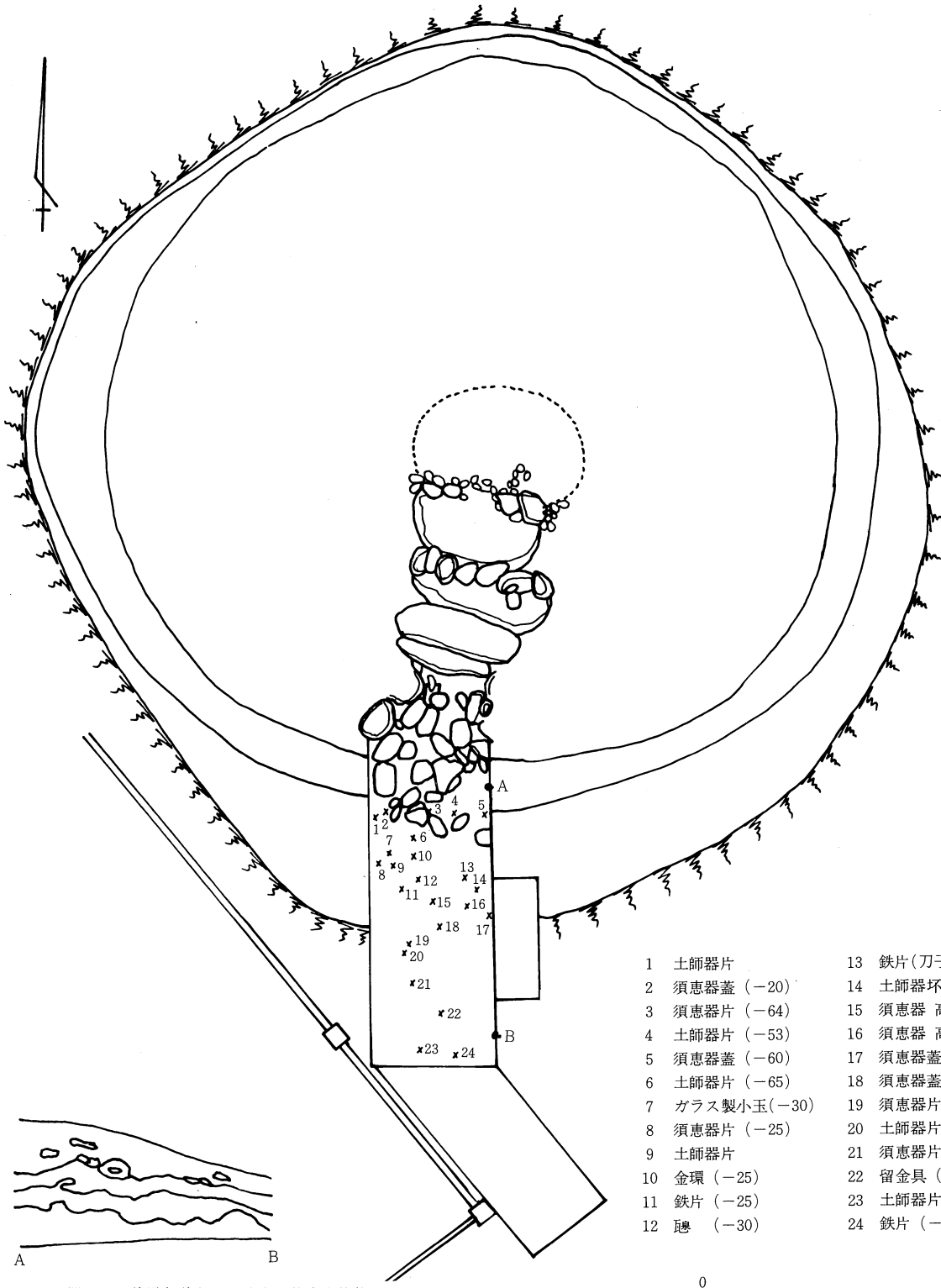
石室外出土の遺物

羨道部前に幅二メートル、長さ五メートルのトレンチを設定し発掘を行った。このトレンチは、石室の補強作業のため玄室内の調査が出来なくなったのと、墳丘の南端がやや凹み、周湟を確認するために設定したのである。

羨道の先端には河原石がうず高く積まれており、発掘作業に時間をとられてしまった。墳丘下四〇センチほど掘り下げると須恵器片・土師器片を検出しはじめ、さらに掘り下げるとトレンチの西壁に接して須恵器の蓋が二縦にささって発見された。トレンチの中央部近く、深さ七〇センチの箇所から一・三メートル、幅六〇センチの偏平な石が出土した。この石はあるいは羨道部に使用されたのであろう。今日に至ってはどこに用いられた石か確認出来なかった。なおトレンチ中央近くで金環一が検出され、副葬品の金環の中で一番大きく保存状態も良好であった。この金環の近くから、須恵器の瑙が破壊された状態で検出された。トレンチの東壁に接して土師器の油坏破片と鉸具が一、なおその南から須恵器の高坏の脚部が一出土した。この高坏の坏部は石室内から発見され、整理調査によって復原し、完全な高坏となったものである。中央部から発見された大石の西側から鉄鏃一、また南側から小玉一と菱形の留金具が一発見されている。

このトレンチ内からかかる副葬品が発見されたのは盗掘者が落していったためであろうか。中には追葬に使用されたと思われる須恵器と土師器も見られるが、中には大分時期の新らしいものもあり墓前葬に使用された追葬とは考え難い。

トレンチのセクションをすべてとりたかったのであるが、天井石を補修するために組んだ三脚で羨道部近くは非常にいたんでしまい、一番ノーマルな東壁の長さ四メートルのセクションをとることにした（このトレンチは七月



1 土師器片
2 須恵器蓋（－20）
3 須恵器片（－64）
4 土師器片（－53）
5 須恵器蓋（－60）
6 土師器片（－65）
7 ガラス製小玉(－30)
8 須恵器片（－25）
9 土師器片
10 金環（－25）
11 鉄片（－25）
12 瑪瑙（－30）
13 鉄片(刀子片)(－35)
14 土師器坏（－60）
15 須恵器 高坏脚部(－77)
16 須恵器 高坏脚片
17 須恵器蓋（－65）
18 須恵器蓋（－56）
19 須恵器片（－55）
20 土師器片（－55）
21 須恵器片（－70）
22 留金具（－60）
23 土師器片（－52）
24 鉄片（－60）

0 4 m

Fig. 6 羨道部前トレンチ内遺物出土状態図

の第二次調査中に設定したもので、本調査期間中には先端部まで手がまわらず、九月の第三次調査まで周湟の確認をとのばして来たのであったが、第三次調査を行ったときトレンチの先端部東側に墓地が拡張され境目に塀がつくられ周湟の確認が出来なくなってしまった。さらに東側に設けたトレンチを調査したが、果樹園のため土層は攪乱されてしまい周湟の確認は不可能であった)。

三月の第一次調査のときに墳丘の南側に幅一メートル、長さ二メートルのトレンチを設定して調査を実施し、茸石を検出しただけのものである。

副葬品

直刀　Fig. 7－1～3

1　今回の調査で羨道部で発見された完形品である。全長八〇センチ、刀身は六八・八センチ、茎の長さ一一・二センチ、刀身の幅は四センチである。茎には三ミリの目釘孔がある。忍孔は径二ミリで平棟平造で鰺切先である。

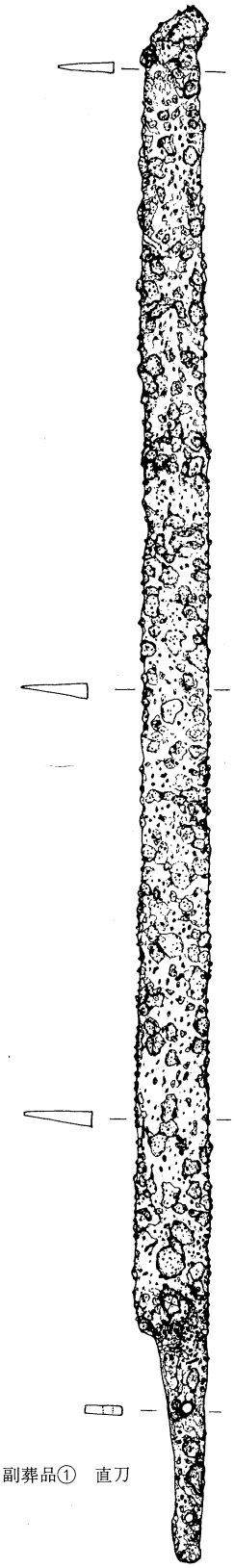
2　全長六五センチ、刀身は五六センチ、茎の長さ九センチで丸尻で目釘孔は不明である。茎の断面は長方形をなし、鋒はふくらついている。刀身幅は三センチで平棟造である。

3　長さ四七センチで茎は欠損している。刀身幅は三センチで鋒は鰺切先で平棟平造である。錆がはげしく保存状態も不良である。二箇所で折れている。切先近くと棟関には木質らしい附着物が見られる。

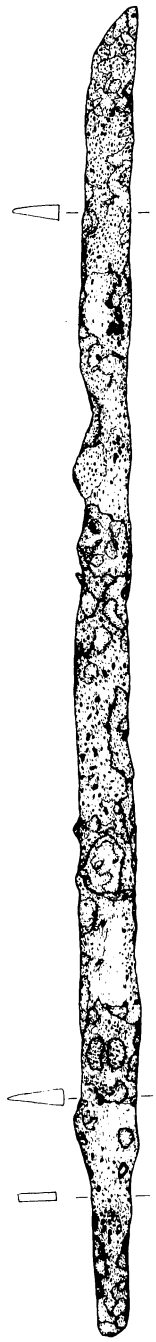
2と3は調査前に出土しているので、正確な位置は不明である。

金銅装円頭形柄頭大刀　Fig. 8－3

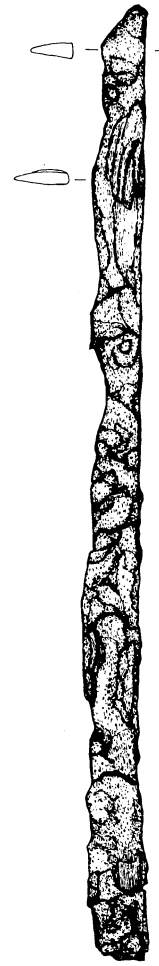
現存部の長さ三一センチ、柄頭は長さ四・八センチ、幅三・五センチの楕円形をなし、中央に径五ミリの懸緒孔が見られる。銅の上に金箔をはった線文が施されている。



1



2



3

0 20cm

Fig. 7 副葬品① 直刀

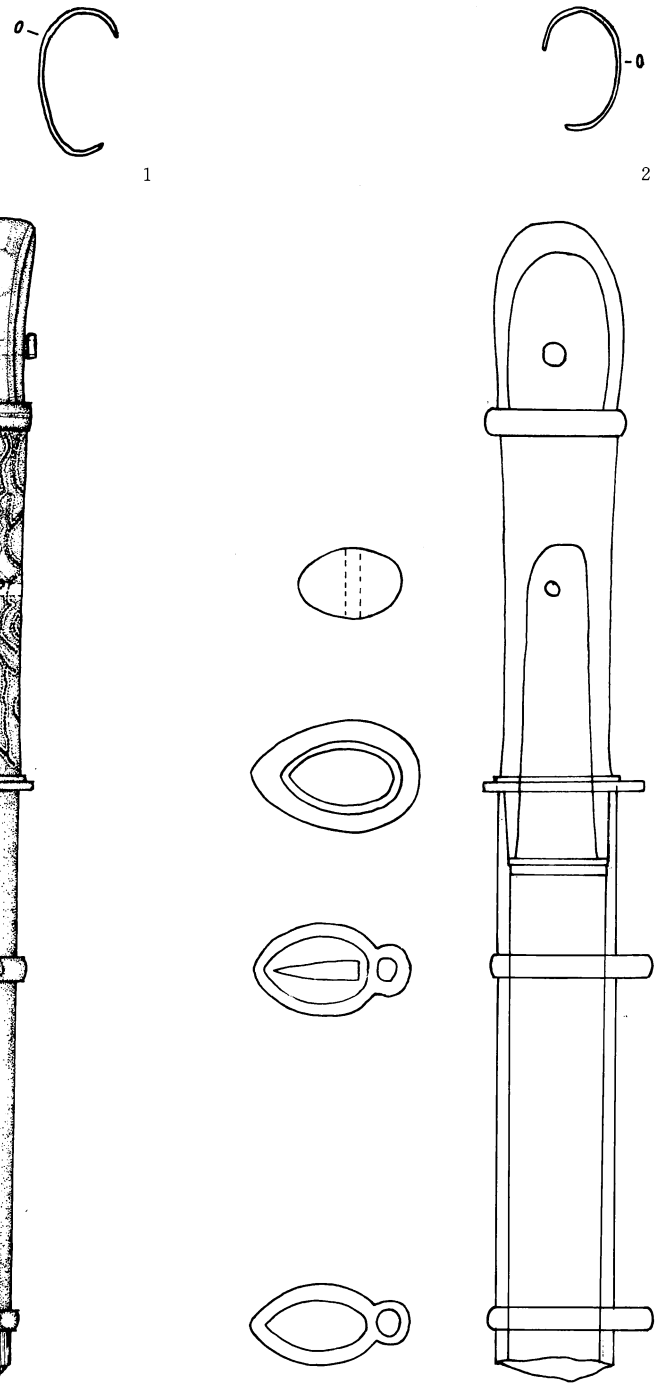


Fig. 8　副葬品②　鞘金具・金銅装円頭大刀

柄間は長さ一〇・一センチ、副二・九センチで断面は楕円形をなし、上部は金銅装でその上に丸タガネで唐草文様状のものを打ち込んでいる。その中央に径三ミリの目釘孔をあけ、鉄製の目釘がつけられている。

鐔は長径四・二センチ、最大幅二・七センチの卵形の素文で厚さ二ミリである。

鞘は長さ一五・五センチ、幅五・三センチで鞘口から四・四センチと一四センチのところに足金具をつける。鞘口に近い足金具は長さ四・二センチ、最大幅二・三センチの卵形で上部は縦七ミリ、横一センチの円形につくり、その中に径四ミリの緒を通す孔がある。二番目の足金具は長さ四・一センチ、最大副二・三センチで卵形をなし、上部は縦七ミリ、横一センチの円形を呈し、その中央に四ミリの孔があけられている。

鞘は破損がはげしく、もとは金銅装で覆われていたのかもしれない。欠損した箇所からは鞘の木目が見られる(本品の修理は末永雅雄博士の御指導をいただき、平城宮調査部で完成したものである)。

刀身の現存部の長さは鞘の長さと同じ一五・五センチで刀身幅は二・五センチほどである。

本品の全長は不明であるが、欠損部の長さを推定すれば、二五センチほどで、刀身は長さ四〇センチ、全長五六センチぐらいではなかろうか。

刀子　Fig. 9－26～35

刀子と明確に判定できるのは26・27・32・33で、28・29・31・34は茎だけと考えられる。この中で出土地点が明確なのは27で、他は堆積土の水洗いで発見されたものである。

26　切先の破片で現存部の長さ三・八センチ、身幅一・三センチ。鋒はふくらついている。

27　トレンチ出土のもので、現存部の長さ六センチ、身幅一・二センチである。

32　切先の欠損する、長さ六・二センチ、身幅一センチである。

33　長さ五・五センチ、身幅一・三センチで鋒はふくらついている。

鐔　Fig. 11－1

外径の長径七・四センチ、短径六センチ、内径の長径三・五センチ、短径二・五センチで、卵形をなし、厚さ一センチ。鉄製の無透の鐔である。

鞘金具　Fig. 8－1・2

1　金銅製で長径四センチ、短径約二・五センチ、厚さ二～三ミリ、卵形をなしている。

2　これも金銅製で、長径三・三センチ、短径二・二センチ、厚さ二～三ミリ、楕円形をなしている。

どちらも堆積土の水洗作業中に発見したものである。

鉄鏃　Fig. 9－1～25

確実に鉄鏃と判明できるのは1～20で、すべて玄室の奥壁西側隅部よりたばになって出土した。

平根五、うち一点は飛燕形、尖根一六である。この他に茎と思われるものが四〇ほど見られる。

1　全長九・五センチ、身の長さ六センチ、幅二・三センチ、茎は長さ三・五センチの平根で一部欠損している。

2　全長一〇・八センチ、身の長さ二・八センチ、身幅一・二センチ、茎の長さ八センチ。たばねてあったので茎に他の鏃の茎が錆びついて附着している。

3　全長八・八センチ、錆がはげしく身の長さ不明であるが身幅は一センチ。尖根である。

4　全長八・三センチ、身の長さ二・五センチ、身幅一・四センチの尖根である。

5　錆がひどく鏃身と茎の区別もつかないが、さらに他の鏃の茎が附着している。全長八・五センチ、身幅一センチ、身の長さ二センチほどの尖根である。

6　全長六・六センチ、身の長さ三センチ、身幅一・三センチ、茎の長さ三・六センチの尖根である。錆がひどい。

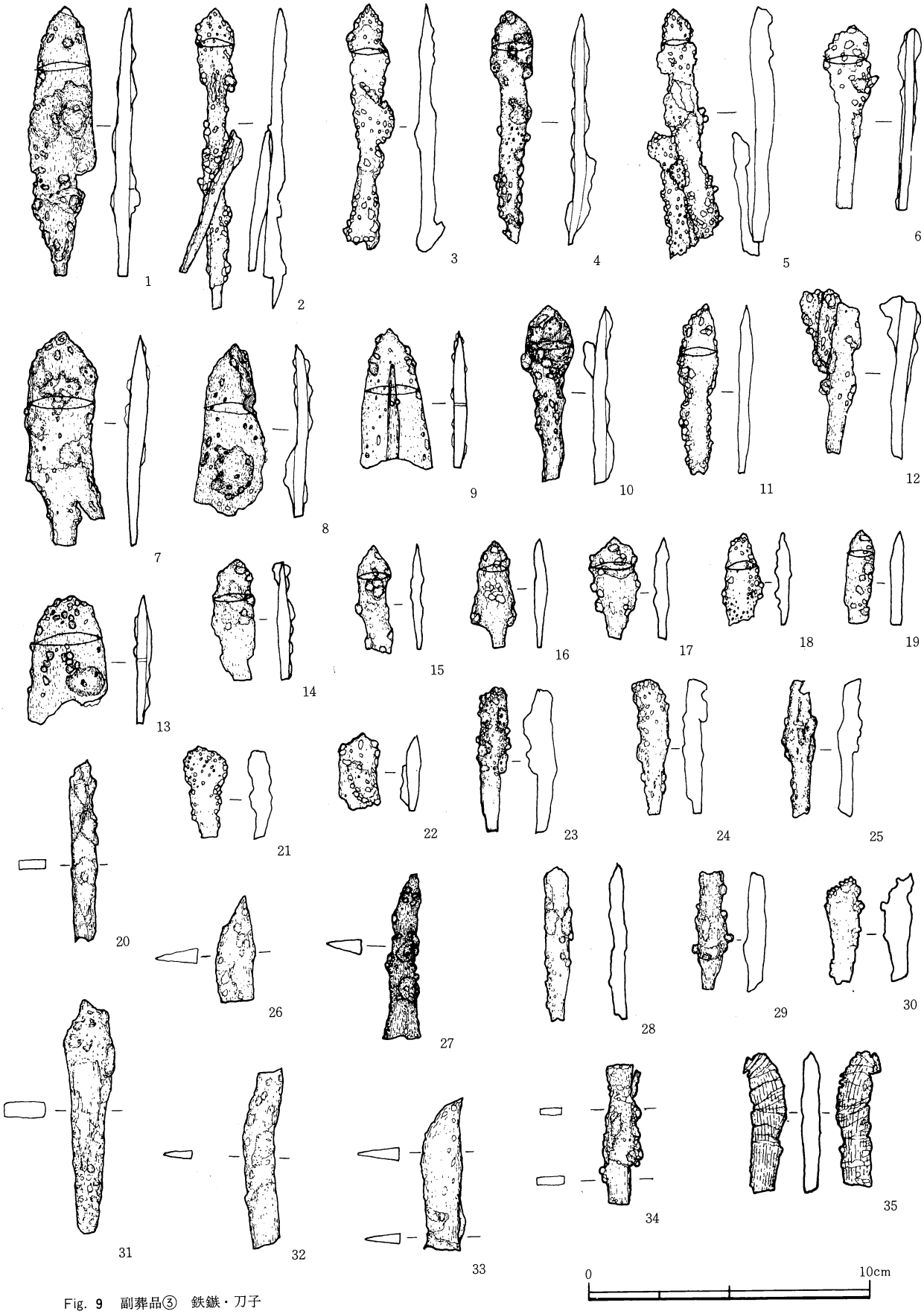


Fig. 9　副葬品③　鉄鏃・刀子

7　広鋒両丸造の三角式で全長七・六センチ、身の長さ六・七センチ、身幅二・八センチ、厚さ四ミリで、左右に逆刺がつけられているが、右側は欠損し、左側も先端は欠けている。飛燕形である。

8　広鋒の鏃で茎は欠損し、身の長さ六・一センチ、身幅二・三センチ、厚さ三ミリである。

9　身の長さ五センチ、身幅二センチ、厚さ二ミリで中央に長さ三・三センチ、幅三ミリの溝がつけられ、溝の中央に径一ミリの小孔が二個あけられている。鏃元はえぐりがつけられている。

10　全長六・三センチ、身の長さ二・四センチ、身幅一・三センチの尖根である。

11　全長六センチ、身の長さ三・三センチの柳葉状をなし、幅一・二センチ、厚さ五ミリの尖根である。

12　鏃身の殆んどが欠損し、現存の長さ五・九センチ、上に他の鏃の茎の破片が附着している。

13　広鋒で鏃元はえぐりがつけられ、長さ四・六センチ、幅二・五センチ、厚さ三ミリで、中央に二ミリの小孔がついている。

14　尖根の鏃身だけで現存の長さ四・四センチ、身の長さ二・八センチ、幅一・三ミリ、厚さ三・五ミリである。

15　これも尖根の鏃身だけで、長さ三・九センチ、幅一センチ、厚さ四ミリである。

16　全長三・八センチ、身の長さ三・一センチの尖根で、幅一・一センチ、茎は七ミリほどで欠損している。

17　尖根の鏃身のみで長さ三・六センチ、幅一・五センチ、厚さ四ミリである。

18　尖根の鏃身だけで長さ三・二センチ、幅一・三センチ、厚さ三ミリである。

19　鏃身と茎の一部で全長三・四センチ、身の長さ二・七センチ、幅九ミリ、厚さ四ミリである。

20　茎だけで現存の長さ六・四センチ、幅九ミリ、断面は長方形をなしている。

21　鏃身だけで現存の長さ一二・三センチ、幅一センチ、厚さ五ミリである。

22　鏃身だけで長さ五・五センチ、幅一・三センチ、厚さ四ミリである。

23・24・25も鍬の一部と考えられるが、省略する。

金環 Fig. 10－29～32

29　堆積土の水洗い作業によって発見したものである。環の径一・五センチ、身部の径四ミリの銅環に金箔をかぶせたものである。材の両端は一ミリほどの隙間があり、金箔のはがれた箇所には緑青がふき出している。

30　石室内発見の唯一のものである。外径一・九センチ、内径八ミリで断面の径五～四ミリの楕円形をなしている。材の両端は二ミリの隙間が見られる。

31　調査前に出土していたもので、外径一・九センチ、内径八ミリで、一部金箔がめくれている。材の両端に一ミリの隙間ができている。

32　羨道部前のトレンチ内より出土したもので、本古墳出土の金環の中で一番大きくしっかりしている。外径二・八センチ、内径一・四センチの銅環に金箔をはり、材の両端は三ミリの隙間が見られる。金箔の保存状態良好である。

銅環 Fig. 10－33

全面緑青におおわれている。外径二・八センチ、内径一・八センチのやや楕円形につくられている。断面は四～六ミリの楕円形をなし、玄室内出土である。

玉類 Fig. 10－1～27

○ガラス製青色小玉（二一）　1～18・22～23・27

コバルト色のガラス製の小玉は径四ミリ、紐通しの孔は一ミリ、厚さ二ミリのものが一般的であるが、22・23は厚くつくられている。7は羨道部前のトレンチよりの出土である。

○滑石製玉（五）　19～21・24・26

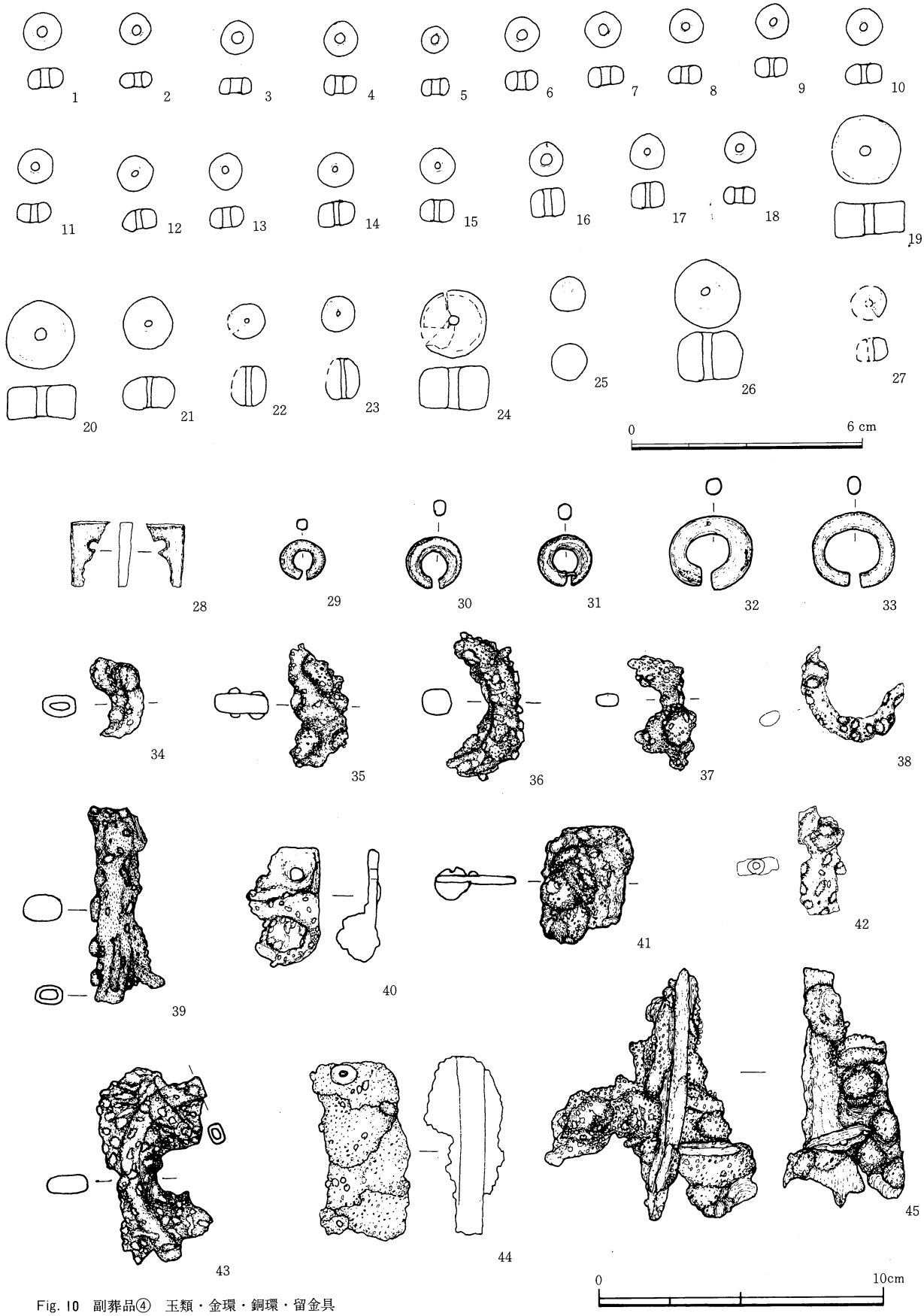


Fig. 10 副葬品④ 玉類・金環・銅環・留金具

ガラス製小玉より大きくつくられ、断面は長方形で非常にもろい。

○赤色玉（一）　25

出土した時は非常に色鮮かであったが、その後はくすんだ色になってしまった。孔はなく、金銅装の飾にでもつけられていたのであろうか。

轡　Fig. II－13

二節からなる衝と引手は共に棒状をなし、それぞれの先端の環によって短形の造り出をつけた楕円形の輪に連結されている。轡として一般的な形式である。

喰　P.L. 12

引手とは錆で密着してしまっている。

鉄地金張留金具　Fig. II－2～4

表1　玉類一覧

	径（㎜）	孔（㎜）	厚さ（㎜）	備　考
1	5	1	2	
2	4	1	2	
3	4	1	2	
4	4	1	2	
5	3	1	2	
6	4	1.5	2	
7	4	1	2	
8	3.5	1	2	
9	4	1	2	
10	4	1	2.5	
11	4	1	2	
12	4	1	2	
13	3×4	1.5	2	長楕円
14	4	1	2.1	
15	4	1	2	
16	4	2	3.2	
17	4	1	3	
18	4	1	2	
19	8	1.5	3.5	灰褐色（滑石）
20	8	1.5	3	灰褐色（〃）
21	5.5	1	3	灰褐色（〃）
22	4.2	0.8	4.2	
23	4	0.8	5	
24	8	1.5	4	灰褐色（滑石）
25	4.7		5	
26	7.5	1.5	5.5	灰褐色（滑石）
27	4	1	2.1	破損している

2　石室の東壁近く須恵器の出土したところから発見され、長さ五センチ、幅四・二センチの菱形をなし、三角状の箇所には半球状の頭部をもつ鋲がつけられている。

3　トレンチ内より出土。長さ五センチ、幅四センチの菱形をなし、四個の半球状の鋲がつけられている。

4　玄室内より出土。長さ八・五センチ、幅四センチの長方形の大形で、鉄地に金銅をはってある。鉄錆の中に金箔と緑青が見られる。半球状の頭部を持つ四個の鋲がつけられ、この鋲の頭には金箔が多く残っている。

鉸具　Fig. II－6・7

6　長さ六センチ、幅三・四センチの鉄製鉸具である。四～六ミリの長方形の断面をなしている。

7　長さ六センチ、幅三三センチで断面は長方形をなしている。

鞍　Fig. II－5

鉄製で長さ六・五センチ、幅四・七センチで鞍にとめるための釘が五・八センチの長さで残っている。

鉄製鋲　Fig. I2－1～10・14

1　長さ二センチ、頭部は球状をなしている。

2　長さ二・一センチ、頭部は径一・一センチ、厚さ六ミリの半球状をなしている。

3　長さ一・五センチ、頭部は径一センチ、厚さ五ミリの半球状をなし、先端は折れまがっている。

4　長さ八ミリ、頭部は径一センチ、厚さ二・五センチで楕円形の傘がつけられている。

5　長さ一・三センチ、頭部の径九ミリ、厚さ六ミリの半球状を呈している。

6　長さ一・四センチで錆が強く、頭部は明確でないが径は一センチである。

7　長さ一・二センチ、幅七ミリで錆がひどく明確に形をつかむことができない。

8　長さ二・三センチ、頭部の径七ミリで、その下に径二センチ、厚さ五ミリの傘がつけられている。

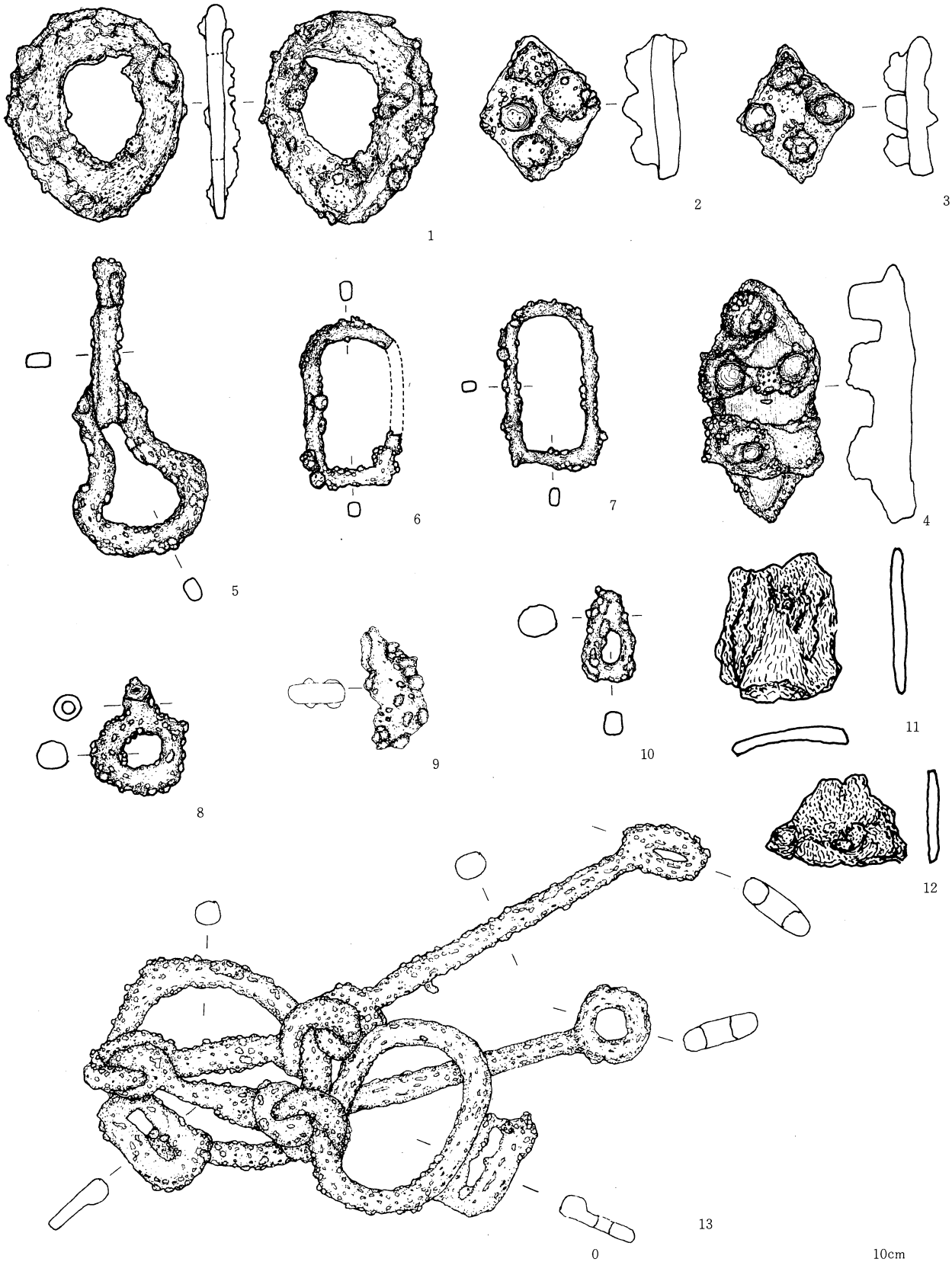


Fig. 11　副葬品⑤　鐔・留金具・鉸具・轡・木片・馬具片（11・12は実大）

9　長さ一・二センチ、頭部の径四ミリ、その下に径二・五センチ、厚さ三ミリの円形の傘をつけている。

10　長さ一・四センチ、頭部の径九ミリ、厚さ五ミリの楕円形をなし、頂点に一部金箔が見られる。

14　長さ一・四センチ、頭部は錆で複雑である。頭部の幅は一センチ、長さ一センチである。

これらの鋲はいずれも堆積土の水洗いで検出したものである。

方形留金具　Fig. 12－11～13

11　長さ一・二センチ、幅八ミリ、厚さ二ミリの長方形の板の上に径五ミリ、高さ二ミリの半球状の頭部がついている。

12　長さ九ミリ、幅七ミリ、厚さ二ミリの板の上に径四ミリ、高さ二ミリの半球状の頭部がついている。

13　長さ一センチ、幅七ミリ、厚さ二ミリの板の上に、径四ミリ、高さ三ミリの半球状の頭部をつけている。

いずれも堆積土の水洗いで検出されたものである。

鉄釘　Fig. 12－15～28・33～37・44・49・51

15　長さ二・七センチ、径四ミリ、先端部は欠損し、頭部は錆で複雑なもり上がりを見せている。

16　長さ二・五センチ、径四ミリで頭部は欠損し、先端は尖っている。

17　長さ二・七センチ、断面は長方形をなし、長径五ミリ、短径二ミリである。

18　長さ二・三センチ、径三ミリで断面は楕円形を呈している。

19　長さ二・一センチ、断面は長径三ミリ、短径二ミリである。

20　長さ一・一センチ、径二ミリで断面は円形をなしている。

21　長さ四・二センチ、径三ミリである。

22　長さ三・二センチ、径四ミリである。

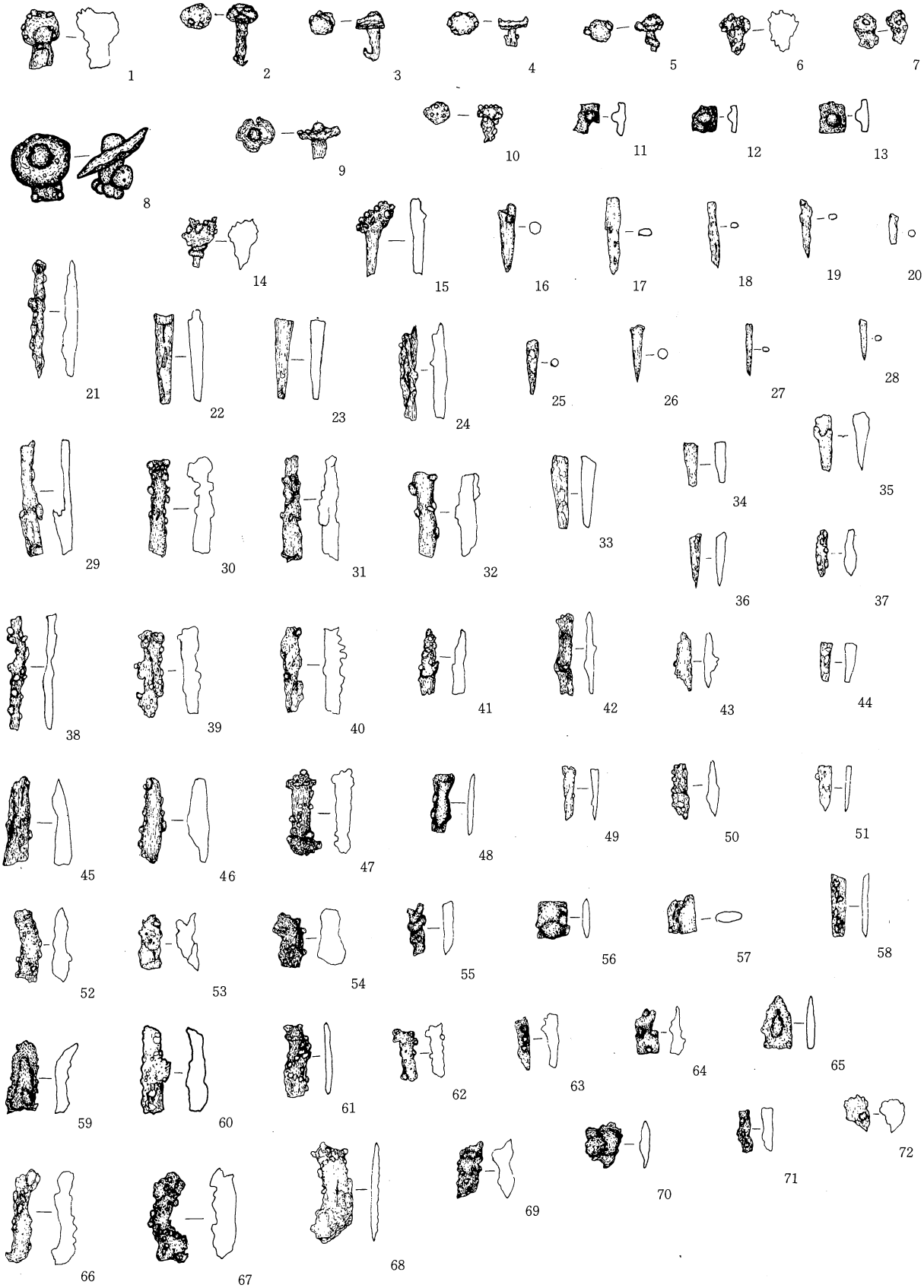


Fig. 12 副葬品⑥ 鉄製鋲・鋲釘・鉄片

23　長さ二・八センチ、径三ミリである。
24　長さ三・三センチ、径四ミリである。
25　長さ二センチ、径二ミリ。頭部は欠損し断面は円形をなす。
26　長さ二センチ、径三ミリで、断面は円形を呈している。
27　長さ一・八センチ、径二ミリで、断面は楕円形をなしている。
28　長さ一・五センチ、径二ミリで、断面は楕円形である。
33　長さ二・六センチ、径三・五センチである。
34　長さ一・五センチ、径三・五センチで両先端は欠損している。
35　長さ二センチ、径三・五センチである。
36　長さ二センチ、径三ミリで、断面は円形を呈している。
37　長さ一・八センチ、径三ミリである。
44　長さ一・四センチ、径三・五センチの円形断面を呈している。
49　長さ二センチ、径二ミリの円形断面をなしている。
51　長さ一・六センチ、長径四ミリ、短径二ミリの長方形の断面をなしている。

以上は釘として判断できたもののみを記した。

木片　Fig. II－11・12

11　長さ二・五センチ、幅二センチの方形をなし、弧状を呈し、厚さ二ミリで黒色をなしている。
12　横幅二・五センチ、高さ一・五センチの小破片で黒色をなしている。厚さ二ミリである。

この二片は堆積土の水洗いで発見されたものである。

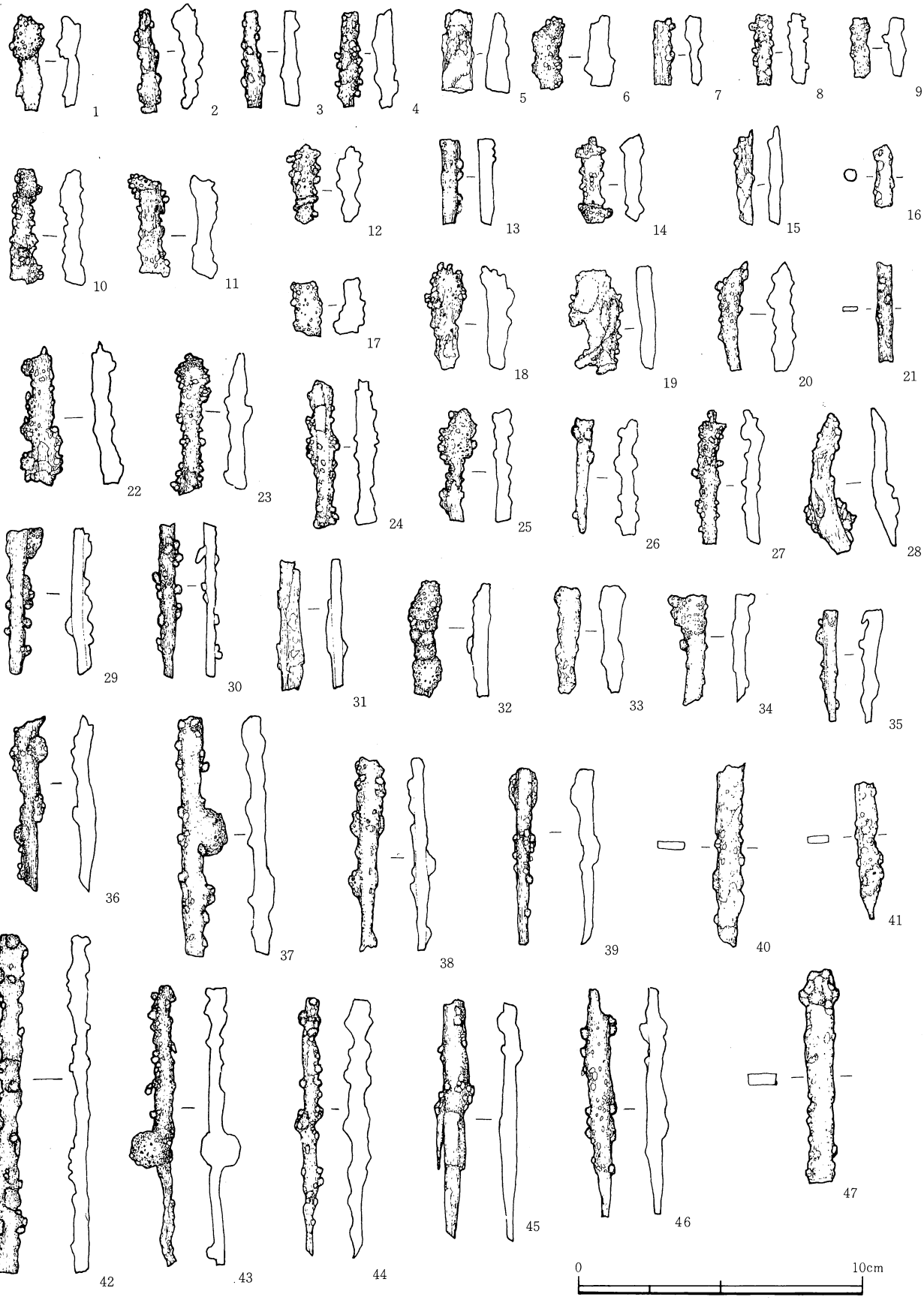

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
10cm

Fig. 14 副葬品⑧ 鉄片

その他鉄片

Fig. 10 - 34～45は留金具の破片か、馬具の破片と考えられる。Fig. 10 - 28は小形の留金具か、飾金具であろう。Fig. 11 - 8は轡の環状の部分である。Fig. 13 - 1～47は釘又は鏃の柄の破片と考えられる。

須恵器

坏（蓋 身） Fig. 15 - 1～4

1 蓋部は径一四・二センチ、器高四・六センチで、肩部に一条の稜をつくり、一本の沈線をめぐらしている。口唇部はやや外反し、その先端には斜めの刻文を連続させている。

坏部は口径一二・二センチ、蓋受までの径は一四・五センチで、立ち上がりは一・五センチ、器は五・一センチである。色調はどちらも灰褐色で焼成良好である。

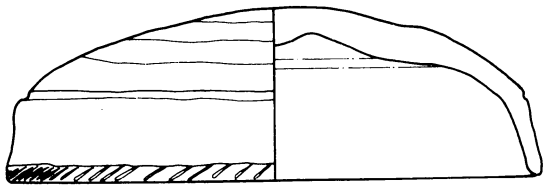
2 蓋の径は一四・六センチ、高さ四・六センチで肩部に稜をつくり、一条の沈線がめぐらされている。口唇部には斜めの刻文を連続させている。

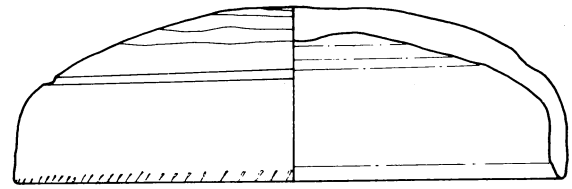
坏部は口径一二・六センチで蓋受の径一五センチ、立ち上がりは一・五センチ。色調は灰褐色で焼成良好である。

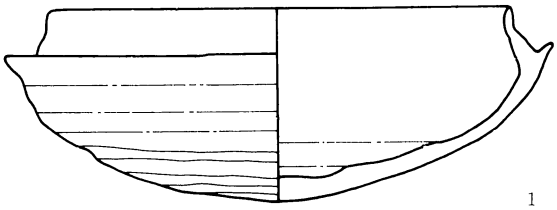
3 蓋は径一四・五センチ、器高四・七センチで、口唇部は垂直に近い。肩部にゆるい稜をつくり、さらに口唇部より一・五センチの上部にもゆるい稜をつけている。

坏部は口径一二・八センチ、蓋受までの径は一五センチ、立ち上がりは一・九センチで、器高は四・八センチである。灰褐色で焼成良好である。

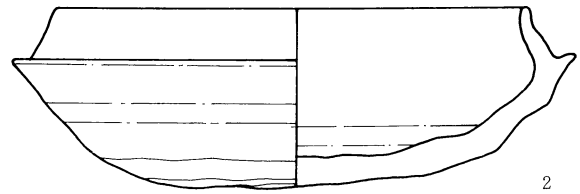
4 蓋部は径一四・五センチ、高さ四・五センチで、肩部に強い稜がつくられている。その稜の下部に一条の沈線をめぐらしている。



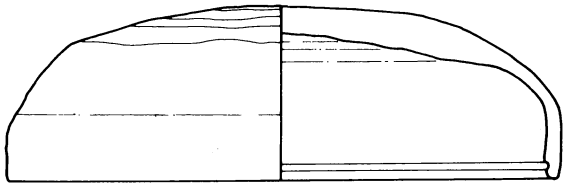




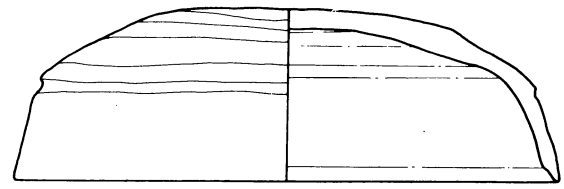
1



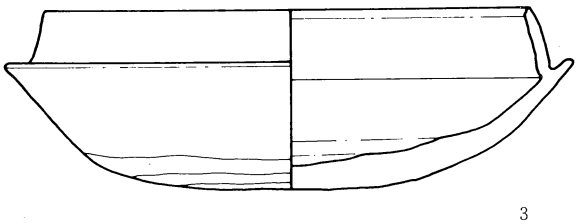
2



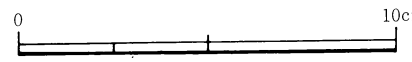
3

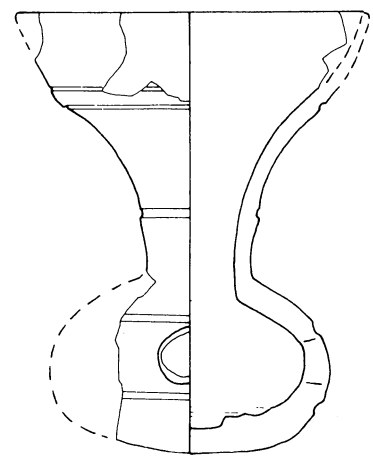


4



5





6

Fig. 15 副葬品⑨ 土器類

坏部は口径一二センチ、蓋受の径一五センチ、立ち上がりは一・七センチで、器高は五センチである。焼成良好で灰褐色を呈し、いずれも第Ⅲ形式の蓋坏である。

聽 Fig. 15 - 5・6

5 口径一二・三センチ、胴部径九・六センチ、器高一五・五センチで、頸部は六・五センチである。口縁部には一条の沈線を施している。頸部の中央には二条の深い沈線をめぐらし、頸部の上部には篦状工具で斜線列を連続させている。胴部の中央には二・四センチの間隔をおいて沈線がめぐらされ、その間には斜線の沈線列を施している。この斜線列に径一・四センチの円孔があけられている。

色調は灰褐色を呈し、焼成良好で、第Ⅲ形式である。

6 トレンチ内出土で、破損していたのを複原したものである。

口径九・四センチ、胴部の径七・四センチ、器高一一・六センチで、頸部上部に二条、頸部中央部に一条の沈線を施している。胴部は偏球状をなし、中央部には二・二センチの間隔をおいて上下に一条ずつの沈線をめぐらし、その中に径一・五センチの円孔があけられている。

外面は灰褐色、口縁部の内面と胴部の肩部は黝黒色を呈している。

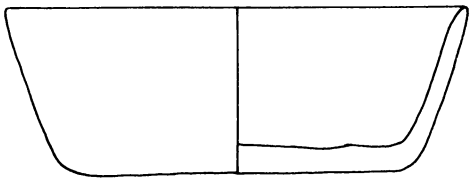
坏 Fig. 16 - 1

1 口径一二センチ、底径九センチで底部は篦削りで平坦に整形している。色調は淡黄褐色で焼成良好である。

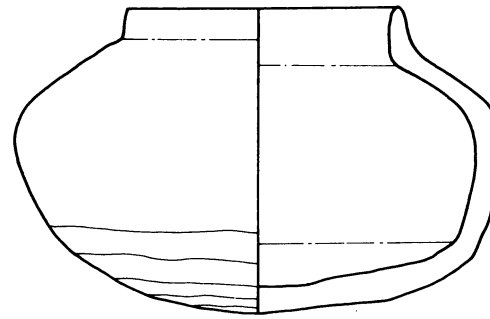
埦 Fig. 16 - 3

羨道部出土。口縁部は欠損し、推定口径一一センチ、底部は丸底である。淡黄褐色でもろく、焼成はあまり良好でない。

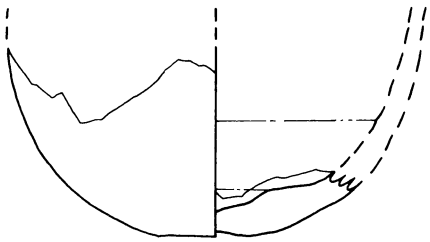
短頸坩 Fig. 16 - 2



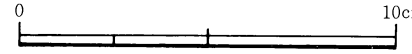
1

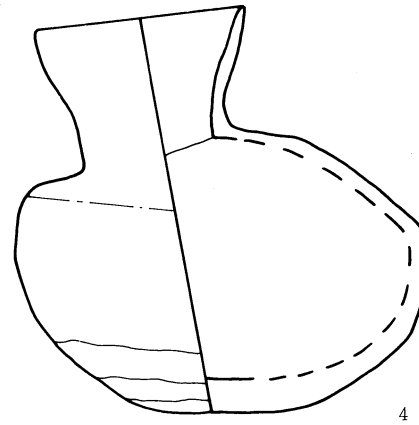


2

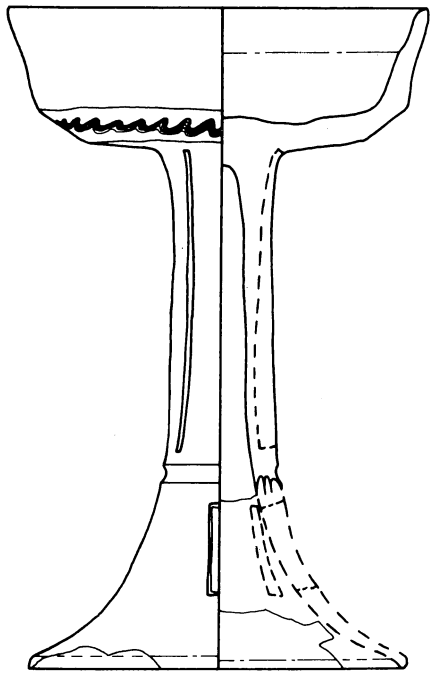


3

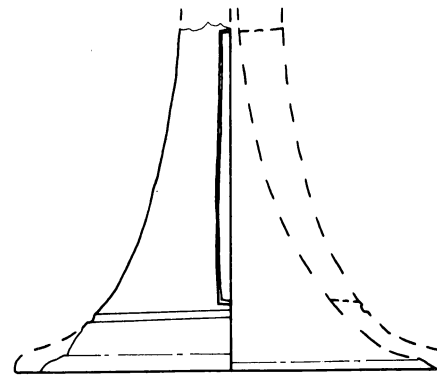




4



5



6

Fig. 16　副葬品⑩　土器類

口径七・五センチ、器高八・一センチで、胴部最大幅は一三センチで偏球状をなしている。頸部は一センチの高さで立ち上がっている。底部は篦削りで整形している。灰褐色で焼成良好である。

平瓶　Fig. 16 - 4

器高一〇・四センチ、口径六・五センチ、頸部は高さ三センチで、口縁部はやや開いている。胴部の高さ七・五センチ、最大幅一一センチで肩部の張った偏球状をなしている。

高坏　Fig. 16 - 5

坏部は玄室より出土し、脚部はトレンチ内より出土し、整理作業で複原したものである。器高一七・五センチ、坏部の口径一一・三センチ、坏部の高さ四センチ、脚部の高さ一三・八センチ、脚部の底径一〇センチである。坏部は底部を篦で斜めにそいでおり、その上に波状文を施している。脚部には透しをつけ、上部のは縦に細長く、下部のは長方形を呈している。上と下の透しの境には幅が広く深い沈線を一条めぐらしている。灰褐色を呈し、焼成良好である。

高坏脚部破片　Fig. 16 - 6

トレンチ出土のもので現存高九・一センチ、底径一一・五センチで細長い透しをつけている。淡青灰褐色をなし、焼成良好である。

提瓶頸部　Fig. 17・12

口径一二・四センチ、頸部の高さ五・三センチで扇部以下は欠損している。口唇部は篦状工具で斜めに削り、「く」の字形をなしている。黝黒色をなし、釉がかけられ光沢がある。トレンチ内出土。

蓋　Fig. 17 - 8～11・13・14

8　径一六・五センチ、頂部に円形のつまみがつけられていたが欠損している。淡黄褐色で焼成良好である。1/3

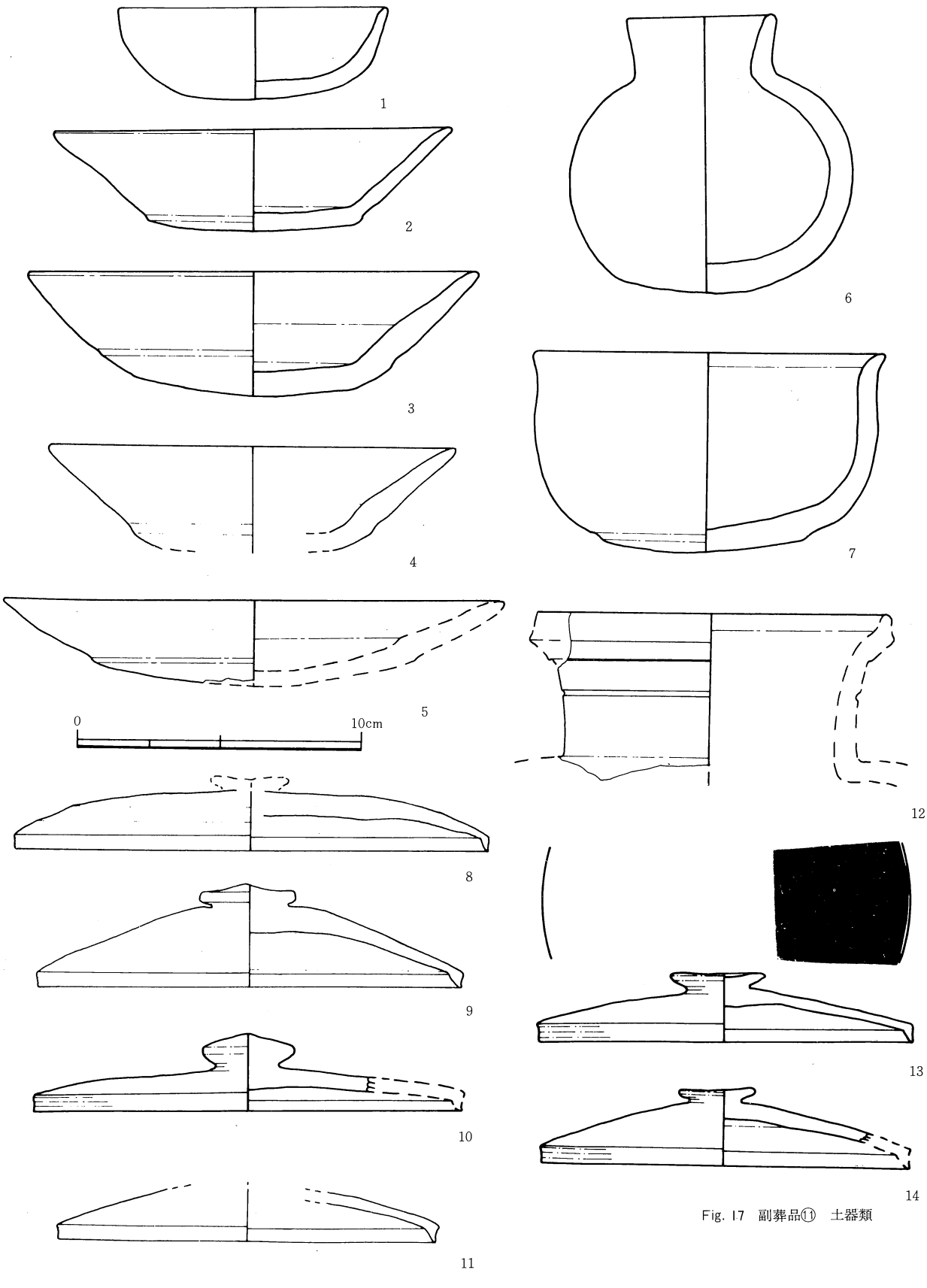


Fig. 17　副葬品⑪　土器類

ほどの破片を複原実測したものである。

9　径一四・九センチ、頂部口径三・五センチ、高さ六ミリの擬宝珠状のつまみがつけられている。轆轤の痕跡が顕著である。トレンチ内出土。

10　径一五・二センチ、頂部に径三・三センチ、高さ一・二センチの擬宝珠状のつまみがつけられている。灰褐色で淡緑色の自然釉がふき出している。焼成良好である。トレンチ内出土。

11　1/3ほどの破片を複原したものである。複原径一三・三センチ、頂部は欠損して不明。灰褐色で淡緑色の自然釉がついている。トレンチ内出土である。

13　径一三・五センチ、頂部に径三・五センチの上部の平坦につくられたつまみをつけている。灰褐色で焼成良好である。トレンチ内出土である。

14　これも1/3ほど欠損しているものを複原実測したものである。径一三・二センチ、頂部に径二・八センチの上部が平坦なつまみをつけている。灰褐色で焼成良好である。トレンチ内出土。

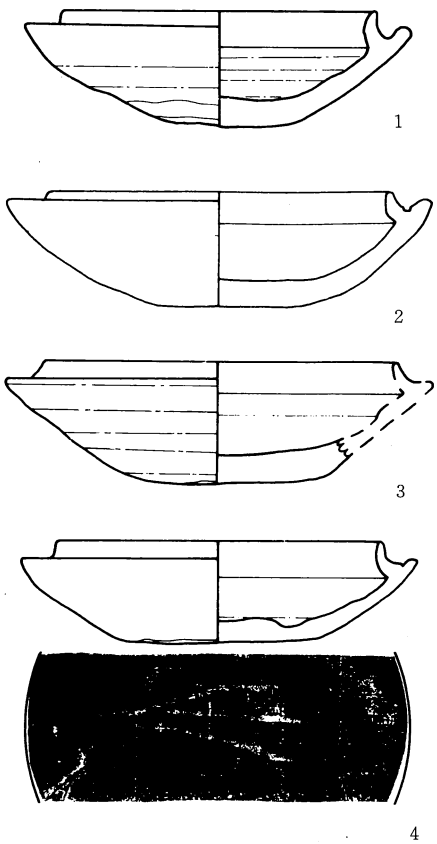
Fig. 18 - 5・6

5　径一〇・五センチ、頂部に高さ八ミリ、径二・一センチの擬宝珠状のつまみをつけている。縁受をつけた灰褐色で焼成良好である。トレンチ内出土。

6　5と同じく口縁部に折りかけしの縁受をつけている。径一〇・六センチで頂部に高さ一・三センチ、径二・五センチの擬宝珠状のつまみをつけている。色調は灰褐色で焼成良好である。トレンチ内出土。Fig. 18 - 7の坏と対をなすものと思われる。

坏　Fig. 18 - 1～4・7

1　口径八・二センチ、器高三センチ、蓋受までの径一〇センチで立ち上がりは八ミリ、淡黄褐色で底部は削り



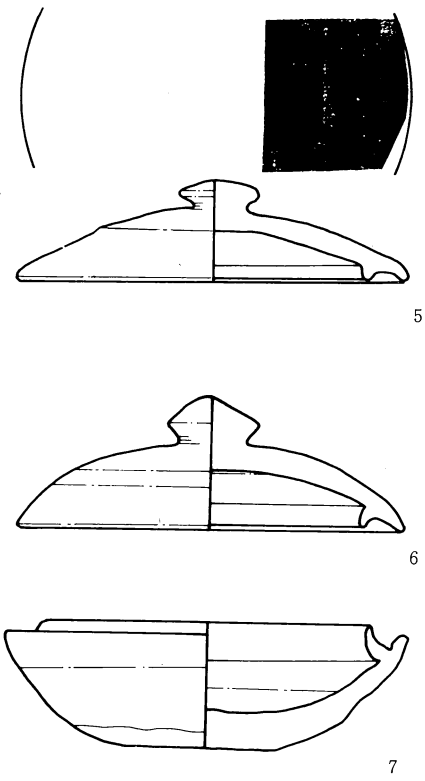


Fig. 18　副葬品⑫　土器類

0　10cm

で整形している。焼成良好である。トレンチ内出土。

2 口径九・一センチ、蓋受までの径一〇・二センチ、器高三センチで蓋受の立ち上がりは二ミリである。灰褐色で焼成良好である。トレンチ内出土。

3 1/3ほど欠けていたものを実測複原したものである。口径九・四センチ、蓋受までの径一〇・二センチ、器高三・三センチ、蓋受の立ち上がりは六ミリである。灰褐色で底部近くは淡緑色の自然釉がみられる。トレンチ内出土。

4 羨道部に近いトレンチ内より出土。口径八・二センチ、蓋受までの径一〇・五センチ、器高は二・七センチで蓋受の立ち上がりは五ミリ。濃灰褐色で底部に三条の記号と思われる刻文をつけている。

7 口径八・七センチ、蓋受まで一〇・七センチ、器高は三・二センチ、蓋受の立ち上がりは三ミリである。淡灰褐色の小破片でトレンチ内出土。

Fig. 18-5・6の蓋とFig. 18-1～4・7の坏は小形であり、時期的にはやや降るもので、片桐古墳との関係では追葬に使用されたものではないかと考えられる。しかし、トレンチ内出土で、出土状態から見ると追葬ともきめつけるわけにもいかない点もある。

土師器 Fig. 17-1～7

1 小形埦 口径九・五センチ、高さ三・二センチ、底部は箆削りで整形している。やや丸味をおびた底部である。灰茶褐色を呈し焼成良好である。

2 坏 口径九センチ、高さ三・六センチで胴部と底部の境に稜をつくり、底部は丸味を及びている。内面は黒光りをしており、外面は茶褐色をなし、焼成良好である。羨道部出土。

3　坏　口径一五・八センチ、高さ四・三センチで胴部と底部の境に稜をつけている。底部は丸味を持ち、坏の内面は黒色、外側は茶褐色を呈している。焼成良好で、羨道部西壁下から出土した完形品である。

4　坏　口径九・三センチ、高さ約四センチで胴部と底部の境に稜をつくり、底部は丸味をもつ。内面は黒色をなし、外側は口縁部近くは淡黒色、底面は茶褐色をなしている。焼成は良好である。トレンチ内出土。

5　坏　トレンチ内出土で、小破片であったが複原実測したものである。口径約一七・五センチ、高さ約三センチで、胴部と底部の境には稜をつくっている。底部は丸味をもち、内面は黒色を呈し、外側は口縁部近くは淡黄色、下部は茶褐色である。

6　短頸坩　口径五・一センチ、高さ九・七センチ、頸部の高さ二センチ。胴部の最大幅一〇センチで楕円の球状をなしている。器肉は比較的厚く八ミリである。羨道部の東壁下より須恵器の坏と一緒に出土。色調は赤褐色で、胎土に少量雲母を含み焼成良好である。

7　埦　口径一二・五センチ、高さ七センチで底部は丸味をもっている。茶褐色を呈し、胎土に雲母を含み、底部に煤がついている。羨道部東壁の須恵器群と伴出している。

第三章　信濃の古墳文化

第一節　伊那谷とその周辺

片桐古墳の考察に入る前に信濃国の古墳文化の大勢を知る必要があるであろう。まず伊那谷の古墳文化から見ていくことにする。

上伊那郡の古墳一六四基、下伊那郡の古墳六一五基を一覧表にし、墳形、規模、副葬品の明確なものをあげてみた(表1)。

中には消滅してしまい、名前だけが残っているものが二〇二基にも及び、われわれ研究者の心を暗くしている。また名称だけで詳細のわからぬものが上伊那郡で一四四基、下伊那郡では八〇基となっている。上伊那郡の総数一六四基をあげたのであるがそのうち一四四基が詳細不明であることは残念でならない。

伊那谷の古墳

さて伊那谷の古墳の密集地帯は下伊那郡の飯田盆地である。盆地の西南部の阿智村には古代東山道の要路である神坂峠をひかえ、早くからこの通路が開かれていたことは附近より発見される考古学的資料によっても推測される。

縄文時代より奈良時代以前においても、相当盛んに往来されたことが推測できる。古墳時代に、大和国より東国に出るには必ずこの道路が使用されたであろうことは、東国鎮撫の帰途に日本武尊が通過したと記紀にあることか

らも知れよう。中央文化が信濃国に入るには必ずこの道路を経たであろうし、信濃国への入口になっていたろうことは想像に難くない。

神坂峠を越えると広々とした大地が開ける。信濃国飯田盆地である。この地に古墳文化がまず根をおろし、伊那谷最初の古墳文化圏を築き上げたのであろう。

最初に築造された古墳は飯田市桐村にある兼清塚古墳ではなかろうか。それは、この古墳から出土した径一五・四センチの二神二獣鏡の存在である。この鏡は円座乳によって四等分された区画内に相対する侍人を有する神像を配し、その主神と思われるものには翼をつけている。外側は、銘帯と櫛歯文帯があり、外区は三角縁に近い縁となっている。

この銘帯には

吾作明竟　幽凍三商　衆徳玄道　配像萬疆　曾年益壽　子孫蕃昌

とある。

吾明鏡を作る　三商(1)を幽凍し　衆徳は玄道により、像を萬疆に配す　年を増し寿を益し　子孫蕃昌する

とよむことが出来る。

（1）商は羊（祥）章とされる場合もあり、商は漢書律暦志に「商堅剛也」と述べている。後漢の班固の白虎通五行に「金在西方」とあり、「商者強也」とのべている。これによると商は強い堅いの意あり、同時に金をも表わしている。よって三種の金属、三つの強いもの錬治する意と思われる。鏡は銅、錫、鉛の三種の金属が合金されていることを表現したものと思われる。

この銘文を有する同形式の二神二獣鏡を出土している古墳には、大和国北葛城郡佐味田古墳、和泉国泉北郡黄金塚、遠江国磐田郡松林山古墳があり、いずれも前期に属する古墳である。

よって兼清塚は下伊那郡の最古式のものと考えることができよう。もっとも正式な調査の行われた古墳ではない

ので二神二獣鏡だけで時期を決定するには危険性があるかもしれないが、四世紀末か遅く見ても五世紀はじめに築造されたと考えて間違いなかろう。

この兼清塚をはじめとしてこれにつづく古墳として、飯田市上川路の西一号（御猿堂）、座光寺の高岡一号、水佐代一号、桐林の塚原一号、磐龍鏡を出土した中村の大畑古墳がこれにつづくであろう。

後期に至ると伊那谷の北部にまで進出する。代表的なものをあげると、箕輪町箕輪松島の王墓、伊那市富県の如来堂、菖蒲平古墳、そして駒ヶ根市東伊那の柏原古墳、高森町下市田武陵地一号墳、二号墳、三号墳、喬木村阿島の里原一号、伊久間の井ノ上古墳、飯田市竜江の宮ノ平二号、座光寺では畦地一号、二号、三号、平地一号、新井原七号、八号、一二号、島屋場一号がある。松尾では上溝六号、駄科の神道塚、権現堂一号、張原丸塚、上川路の権現三号、伊豆木の石原田古墳、山本の金堀塚古墳、川路の殿村一号の一七基が飯田市内に存在している。また上郷村別府のドドメキ二号、飯村の天神塚古墳も後期古墳の代表的なものであろう。特に箕輪町の王墓古墳は墳丘を見ても前方部が張り出し、後円部より前方部の方が高い典型的な後期の前方後円墳ということができる。

七世紀から八世紀に属する古墳を筆者は末期古墳[3]と分類しているが、これに属するものとして中川村の片桐古墳と高森町下市田の武陵地一号墳をあげることができる。

（3）「後期古墳文化の一様相としての装飾付恵須器」
前記古墳――四世紀～五世紀初期
中期古墳――五世紀中頃～六世紀初期
後期古墳――六世紀中頃～七世紀初期
末期古墳――七世紀中頃～歴史時代初期
『研究年報第一〇号』日本大学第三高等学校職員研究部

片桐古墳は副葬品の金銅装円頭形柄頭等により、七世紀に入って築造されたと考えられる。また武陵地一号墳か

表2　伊那谷の古墳

I　上伊那の古墳

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
1	御社宮司	辰野町平出	円		横穴石室	頭椎大刀・刀・馬具・玉類・金環・須恵器		
2	御陵塚	辰野町平出字趣戸	円	径17　高さ2.3			あり	
3	北の原上	箕輪町箕輪字下古田	円					
4	北の原中	同上	円					
5	北の原下	同上						
6	王墓	箕輪町箕輪字松島	前方後円	全長60　後円部径30　高さ10.6　前方部幅45　高さ11				人物・馬形・靱・円筒
7	桜塚	箕輪町福与	円					
8	大塚	同上	円		横穴石室	金環・鉄鏃・轡・尾錠・直刀・鐔・刀子・須恵器・土師器		
9	高室	箕輪町中箕輪	円					
10	上の平	箕輪町東箕輪字小河内	円					
11	北垣外	箕輪町東箕輪字長岡						
12	春奈	同上	円	径11　高さ1.2	横穴石室	直刀・馬具		
13	大門	同上	円					
14	寺原	同上						
15	源波	同上						
16	羽場森1号	同上	円	径13　高さ2.4				
17	羽場森2号	同上	円	径17　高さ1.9	横穴石室	直刀・轡・切子玉・雲珠・土師器・須恵器		
18	羽場森3号	同上	円					
19	角畑	箕輪町中箕輪角畑						
20	久保畑	箕輪町中箕輪久保畑	円		横穴石室	馬具・須恵器		
21	戸沢	箕輪町東箕輪荒井						
22	白沢東塚	伊那市木裏原字白沢	円		横穴石室	直刀・鉄鏃・槍・勾玉・管玉・切子玉・土師器・須恵器		
23	白沢西塚	同上	円	径17　高さ2		直刀・刀子・鉄鏃・管玉・小玉・轡		

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
24	唐木	伊那市唐木	円					
25	狐塚南	伊那市伊那字小沢南原	円					
26	狐塚西	同上	円					
27	月見松1号	同上	円					
28	八人塚	伊那市伊那字小沢	円	径17 高さ2	横穴石室	直刀・刀子・鉄鏃・丸玉・管玉・須恵器	あり	
29	福島29号	伊那市福島	円					
30	福島33号	同上	円					
31	福島34号	同上	円					
32	福島35号	同上	円					
33	福島36号	同上	円					
34	福島37号	同上	円					
35	福島38号	同上	円					
36	福島39号	同上	円					
37	野底10号	伊那市伊那部字野底	円					
38	野底11	同上	円					
39	野底12	同上	円					
40	野底13	同上	円					
41	野底14	同上	円					
42	野底15	同上	円					
43	野底16号	同上	円					
44	野底17号	同上	円					
45	野底18号	同上	円					
46	野底19号	同上	円					
47	野底20号	同上	円					
48	野底21号	同上	円					
49	野底22号	同上	円					
50	野底23号	同上	円					
51	野底24号	同上	円					
52	野底25号	同上	円					
53	野底26号	同上	円					
54	野底27号	同上	円					
55	上牧6号	伊那市伊那部字上牧	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
56	上牧7号	伊那市伊那部字上牧	円					
57	上牧8号	同上	円					
58	上牧9号	同上	円					
59	古町1号	伊那市伊那部字古町	円					
60	古町2号	同上	円					
61	古町3号	同上	円					
62	古町4号	同上	円					
63	古町5号	同上	円					
64	大塚	伊那市富県字桜井	円					
65	根木屋1号	伊那市富県字北福地	円					
66	根木屋2号	同上	円					
67	根木屋3号	同上	円					
68	丸塚	同上	円					
69	駒合	同上	方	東西16.8　高さ1.5		土師器・朱塗坩	あり	
70	テマテ	伊那市富県字南福地	円		竪穴石室	直刀・鉄鏃・勾玉・小玉・管玉・須恵器		
71	テマテドウゼキ	同上						
72	如来堂	同上	円			桂甲・小札・直刀・鉄鏃・尾錠・座金・轡・鏡板・鉄斧・鉸具・鎌・鎹		
73	菖蒲平	同上				直刀・刀子・鉄鏃・鑪・銅環・鉄環・須恵器・玉類		
74	阿原1号	伊那市富原字駒ヶ原阿原	円					
75	阿原2号	同上	円					
76	阿原3号	同上	円					
77	阿原4号	同上	円					
78	阿原5号	同上	円					
79	阿原6号	同上	円					
80	天神山	伊那市美篶字笠原	円		横穴石室石棺	直刀・鑪・金環・勾玉・土師器・須恵器		
81	天塚	伊那市手良野口字登宮	円					
82	山伏塚	伊那市手良野口字丸山	円			直刀・須恵器		

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
83	手良1号	伊那市手良沢岡字八つ手	円					
84	手良2号	同上	円					
85	手良3号	伊那市手良沢岡字六つ塚	円					
86	手良4号	同上	円					
87	手良5号	同上	円					
88	手良6号	同上	円					
89	老松場1号	伊那市東春近字中殿島老松場	円					
90	老松場2号	同上	円					
91	老松場3号	同上	円					
92	老松場4号	同上	円					
93	老松場5号	同上	円					
94	老松場6号	同上	円					
95	老松場7号	同上	円					
96	宮場間様25号	伊那市東春近中殿島宮場間様						
97	宮場間様26号	同上						
98	宮場間様27号	同上						
99	宮場間様28号	同上						
100	本城1号	伊那市東春近字中殿島本城						
101	本城2号	同上						
102	本城3号	同上	円					
104	本城5号	同上	円					
105	本城6号	同上	円					
106	本城7号	同上	円					
107	本城8号	同上	円					
108	火沢1号	伊那市東春近中殿島火沢	円					
109	火沢2号	同上	円					
110	火沢3号	同上	円					
111	火沢4号	同上	円					
112	古寺1号	伊那市東春近字下殿島古寺	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
113	古寺2号	伊那市東春近字下殿島古寺	円					
114	古寺3号	同上	円					
115	古寺4号	同上	円					
116	古寺5号	同上	円					
117	古寺6号	同上	円					
118	田原寺坂1号	伊那市東春近字田原寺坂	円					
119	田原寺坂2号	同上	円					
120	田原寺坂3号	同上	円					
121	田原寺坂4号	同上	円					
122	田原寺坂5号	同上	円					
123	宮の上1号	伊那市東春近字田原宮の上	円					
124	宮の上2号	同上	円					
125	宮の上3号	同上	円					
126	宮の上4号	同上	円					
127	宮の上5号	同上	円					
128	宮の上6号	同上	円					
129	宮の上7号	同上	円					
130	宮の上8号	同上	円					
131	宮の上9号	同上	円					
132	宮の上10号	同上	円					
133	宮の上11号	同上	円					
134	宮の上12号	同上	円					
135	社宮司	伊那市東春近字田原社宮司	円					
136	男塚	同上	円					
137	瀬戸1号	伊那市東春近字田原瀬戸	円					
138	瀬戸2号	同上	円					
139	洞1号	伊那市東春近字田原洞	円					
140	洞2号	同上	円					
141	洞3号	同上	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
142	柏原	駒ヶ根市東伊那字栗林	円	径6 高さ2.6		青・土師器・須恵器		
143	桃山	同上	円					
144	稲荷山	駒ヶ根市東伊那字伊那耕地	円					
145	原垣外1号	駒ヶ根市赤穂字市場割	円					
146	原垣外2号	同上	円					
147	原垣外2号	同上	円					
148	小町谷丸塚	駒ヶ根市赤穂字小町谷	円					
149	小鍛冶原1号	駒ヶ根市下平字小鍛冶	円					
150	小鍛冶原2号	同上	円					
151	小鍛冶原3号	同上	円	径18 高さ2		直刀・土師器・須恵器		
152	小鍛冶原4号	同上	円					
153	小鍛冶原5号	同上	円					
154	小鍛冶原刀の古墳	同上	円					
155	三つ塚西	上伊那郡宮田村南割	円	積石塚 径7.5 高さ1.2	粘土	刀子・鉄鏃・鹿角・土師器・須恵器		
156	三つ塚中	同上	円					
157	三つ塚東	同上	円	径12 高さ2.4 積石塚		直刀・管玉・須恵器		
158	からす林1号	同上	円					
159	からす林2号	同上						
160	からす林3号	同上	円					
161	片桐1号	中川村片桐字六万部	円	径14 高さ3	横穴石室	直刀・円頭形柄頭・鉄鏃・馬具・刀子・金環・銅環・須恵器・土師器	あり	
162	片桐2号	同上	円					
163	天伯	中川村字中央	円					
164	南田島	中川村南田島	円			直刀・勾玉・切子玉		

II　下伊那の古墳

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
1	富士塚	松川町上片桐	円	周湟あり				
2	塚屋	松川町上片桐字鶴部						
3	塚越	松川町生田字塚越	円	径9.9　高さ1.2		勾玉・須恵器		
4	山伏１号	同上	円消滅					
5	山伏２号	同上	円消滅					
6	古屋敷１号	同上	円					
7	古屋敷２号	同上	円消滅					
8	北林２号	高森町下市田北林	円	径12　高さ3.6	横穴石室	刀子・鉄鏃・金環・切子玉・丸玉小玉・須恵器		
9	北林３号	同上	円	径10.4　高さ3.8				
10	北林４号	同上	円					
11	荒神の森	高森町下市田字大庭	円					
12	中谷	高森町下市田字中谷	円					
13	羽根	高森町下立田字羽根	円	径7.4　高さ0.8		須恵器・土師器		
14	法界塚	高森町下市田字道寿	円					
15	大門	高森町下市田字大庭	円					
16	大庭	高森町下市田字大庭	円			須恵の坏		
17	丸山	高森町下市田字市ノ坪	円					
18	平塚	同上	円			直刀・須恵の坩・脚付盌・坏		
19	南田	高森町下市田字東代地	円	径72　高さ1.2		銅令・須恵器		
20	塚田１号	高森町下市田字荒神前						
21	塚田２号	同上	円	径10.5　高さ1.4				
22	武陵地１号	高森町下市田字武陵地	円	径16.9　高さ４	横穴石室	直刀・鉄鏃・杏葉・鐙・鞍・鉸具・金環鈴・雲珠・銅盌・丸玉・小玉臼玉・石製品		
23	武陵地２号	同上	円		横穴石室	珠文鏡・切子玉・須恵器		

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
24	武陵地3号	高森町下市田字武陵地	円			直刀・鉾・鐔・金環銀環・雲珠片・須恵器		
25	武陵地4号	同上	円			直刀・須恵器片		
26	武陵地5号	同上	円		横穴石室	直刀		
27	上洞1号	高森町下市田字上洞	円					
28	上洞2号	同上	円					
29	上洞3号	同上	円			剣・轡		
30	坂巻社	高森町下市田字新井原	円	径10 高さ2.5		直刀・鉾		
31	東養寺1号	豊丘村神稲字田村東養寺	円		横穴石室	環頭大刀・玉類・金環・須恵器		
32	東養寺2号	同上	円消滅			金環・雲珠・管玉・釘・土師器・須恵器・石製品		
33	東養寺3号(矢塚)	同上	円消滅			金環・勾玉		
34	山伏	同上	円消滅			金環・銀環・鉄環・勾玉・管玉・切子玉・ソロバン玉・丸玉・小玉・臼玉・多稜形玉・須恵器		
35	塚越	豊丘村神稲字田村塚越	円消滅					
36	境なし	豊丘村神稲字田村境なし	円	径9 高さ2.8		直刀		
37	平畑	豊丘村神稲字林平畑	円					
38	中村	豊丘村神稲字林中村	円消滅			直刀・須恵器		
39	藤塚	豊丘村神稲字伴野・藤家	円	径34.5 高さ2.6				
40	物見塚	豊丘村神稲字伴野・物見塚	円	径24.4 高さ3.2				
41	小野山1号	豊丘村神稲字小園・小野山	円	径24.5 高さ1.7				
42	小野山2号	同上	円	径17.4 高さ2.7				
43	高越	豊丘村神稲字小園・高越	円消滅					
44	大宮	豊丘村河野字中部	円	径9.3 高さ2.1				
45	大宮前	豊丘村河野字中部・大宮前	円	径7 高さ2.8		勾玉・管玉・土師器・須恵器		
46	大宮南	豊丘村河野字中部・大宮南	円消滅			鉄鏃・馬具・杏葉・須恵器		円筒

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
47	大宮横	豊丘村河野字中部・大宮横	円 消滅					
48	大塚上1号	豊丘村河野字中芝・大塚上	円 消滅					
49	大塚上2号	同上	円 消滅			金環・管玉		
50	大塚上3号	同上	円 消滅			金環・勾玉・管玉・小玉		
51	家の上	豊丘村河野字家の上	円	径15.8　高さ3.9				
52	森下	豊丘村河野字森下	円 消滅					
53	田中前	豊丘村河野字田中前	円 消滅			直刀・土師器		
54	梅の森	豊丘村河野字梅の森	円			須恵器		
55	城原1号	喬木村阿島字城原	円 消滅			直刀・鉾・土師器		
56	城原2号	同上	円 消滅					
57	郭1号	喬木村阿島字郭	前方 後円	全長38.2 後内部径27.3 高さ7.3				
58	郭2号	同上	円 消滅			直刀・刀子・馬具・杏葉・雲珠・金環・鉸具・土師器・須恵器		
59	郭3号	同上	円	径8.2　高さ2.5				
60	郭4号	同上	円					
61	里原1号	喬木村阿島字里原	円			四神四獣鏡・直刀・トンボ玉・砥石・須恵器		
62	里原2号	同上	円 半壊					
63	里原3号	同上	円			直刀		円筒
64	熊野	喬木村阿島字熊野	円	径30　高さ1.6		直刀・土師器		
65	宮沢	喬木村阿島字宮沢	円	径15　高さ2.8				
66	中原1号	喬木村阿島字中原	円	径13　高さ1.4				
67	中原2号	同上	円 消滅					
68	狐塚	喬木村阿島字唐沢	円 消滅					
69	町弁天	喬木村阿島字花立	円	径14.5　高さ1.8	横穴石室			

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
70	杉立	喬木村阿島字杉立	円	径10.6　高さ2.4				
71	七人塚	喬木村小川字サギノス	円消滅					
72	山伏塚	喬木村小川字塚側	円消滅					
73	宮の前	喬木村小川字宮の前	円	径18.2　高さ2.4				
74	小仏林	喬木村小川字小仏林	円消滅			剣・刀子・土師器		
75	狐塚	喬木村小川字家の上	円消滅					
76	正覚塚	喬木村小川字正覚塚	円	径８　高さ0.5				
77	塚穴	喬木村小川字塚脇	円	径17.1　高さ4.6	横穴石室			
78	藤塚	喬木村小川字藤塚	円	径15.3　高さ３				
79	城の上	喬木村伊久間字城の上	円	径5.5　高さ1.7				
80	奴山１号	喬木村伊久間字長坂頭	円	径9.1　高さ1.8		土師器・須恵器		
81	奴山２号	同上	円	径9.3　高さ0.6				
82	奴山３号	同上	円	径14.5　高さ1.3				
83	奴山４号	同上	円	径15.4　高さ３				
84	奴山５号	同上	円	径14.1　高さ1.4				
85	奴山６号	同上	円	径11　高さ6.15				
86	赤坂	喬木村伊久間字赤坂	円	径10.5　高さ1.9		管玉		
87	狐島	喬木村伊久間字狐島	円	径13.7　高さ2.3				
88	井ノ上	喬木村伊久間字井ノ上	円消滅		横穴石室	青・鉄鏃・金環・轡・切子玉		
89	船渡上	喬木村伊久間字船渡上	円消滅					
90	地神	喬木村富田字地神	円	径11		土師器・須恵器		
91	馬場	喬木村富田字馬場	円消滅	径10		直刀・須恵器		
92	小平１号	喬木村富田字小平	円	径11.8　高さ2.4				
93	小平２号	同上	円	径９　高さ1.5				
94	小平３号	同上	円消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
95	市場	喬木村富田字市場	円	径8.2　高さ2.6		須恵器・土師器		
96	丸山	喬木村富田字丸山	円消滅			直刀		
97	大屋敷	飯田市千栄字大屋敷	円					
98	石原	飯田市竜江字石原	円					
99	ハンバ	飯田市竜江字ハンバ	円	径6.4　高さ1.5				
100	法花堂	飯田市竜江字法花堂	円消滅					
101	宮ノ平1号	飯田市竜江字宮ノ平	円消滅			直刀・鉄鏃・斧		
102	宮ノ平2号	同上	円消滅			内行花文鏡・乳文鏡・剣・直刀・鉄鏃・勾玉・須恵器		
103	福沢	飯田市竜江字福沢	円	径33				
104	羽生田原	飯田市竜江字羽生田原	円	径9.8　高さ2.3				
105	白根ヶ沢	飯田市竜江字白根ヶ沢	円消滅					
106	中原	飯田市竜江字中原	円消滅			直刀・鉄鏃・斧・勾玉・管玉・小玉		
107	芦ノ口	飯田市竜江字芦ノ口	円消滅					
108	宮ノ原	飯田市上久堅字宮ノ原	円消滅					
109	上宮原	飯田市上久堅字上原字	円消滅			直刀・刀子・金環・轡・管玉・土師器・須恵器		
110	塚穴	飯田市上久堅字塚穴	円					
111	正永寺原1号	飯田市上飯田字羽場正永寺原	円	径4　高さ1.5				
112	正永寺原2号	同上	円			直刀・鉄鏃		
113	高田	飯田市上飯田字高田	円	径13　高さ2				
114	鐘鋳原	飯田市上飯田字鐘鋳原	円	径4		直刀・土師器		
115	木戸脇	飯田市上飯田字木戸脇	円					
116	杵が塚	飯田市上飯田字チマイ	円	径20　高さ0.8				

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
117	畦地1号	飯田市座光寺字畦地	円	径19.8 高さ5.5	横穴石室	剣・直刀・刀子・鉄鏃・金環・桂甲・鏡板・雲珠・鉸具・鎖・銅板・耳飾・勾玉・管玉・トンボ玉・切子玉・ソロバン玉・丸玉・小玉・土師器・須恵器	あり	
118	畦地2号	同上	円			金環・雲珠・金具・馬具・小玉・臼玉・土師器・須恵器		
119	畦地3号	同上	円			変形四神四獣鏡・刀子・管玉・丸玉・土師器・須恵器		
120	畦地4号	同上	円			金環・須恵器		
121	畦地5号	同上	円					
122	平地1号	飯田市座光寺字平地	円			変形神獣鏡・金環・環頭柄頭・切子玉・須恵器		
123	平地2号	同上	円	径10.75 高さ1.75		金環・管玉・須恵器		
124	平地3号	同上	円消滅					
125	平地4号	同上	円消滅					
126	平地5号	同上	円消滅					
127	平地6号	同上	円	径11 高さ2.4				
128	平地7号	同上	円消滅			金環		
129	平地8号	同上	円		横穴石室	金環・勾玉・臼玉・小玉・須恵器		
130	平地9号	同上	円			金環・鉄鏃・馬具・須恵器		
131	平地10号	同上	円		横穴石室	剣・直刀・刀子・鉄鏃・金環・鎖・留金具・釘・雲珠・須恵器		
132	平地11号	同上	円			直刀・鉄鏃・金環・勾玉・鉸具		
133	平地12号	同上	円消滅					
134	大塚	飯田市座光寺字大塚	円	径16		須恵器		
135	新井原1号	飯田市座光寺字新井原	円					
136	新井原2号	同上	円		竪穴石室	冑・短甲・馬具・直刀・鉄鏃・鉾		
139	新井原3号	同上	円			須恵器		

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
140	新井原4号	飯田市座光寺字新井原	円					
141	新井原5号	同上	円			直刀・馬具・玉類		
142	新井原6号	同上	円			珠文鏡		
143	新井原7号	同上	円			乳文鏡・直刀・勾玉・切子玉・丸玉・小玉・金環・銀環・短甲・鉸具・鉄鏃		
144	新井原8号	同上	円			三角縁三神三獣鏡・直刀・鉄鏃		
145	新井原9号	同上	円			剣・鉄鏃・直刀・鈴・金環・雲珠・杏葉・土師器・須恵器		
146	新井原10号	同上	円			金環		
147	新井原11号	同上	円	径15　高さ2		鉄鏃・馬具		
148	新井原12号	同上	円	径28　高さ5.5		直刀・短甲・鉄鏃・須恵器・土師器		あり
149	半崎	飯田市座光寺字半崎						
150	高岡1号	飯田市座光寺字高岡	前方後円	全長　72 後内部径41.9 高さ　5.5	横穴石室	金環・杏葉・鎖・鉸具・管玉・切子玉・勾玉・小玉・辻金具		人物形象円筒
151	高岡2号	同上	円					
152	高岡3号	同上	円	径12				
153	高岡4号	同上	円	径16				
154	高岡5号	同上	円	径18				
155	石行1号	飯田市座光寺字石行	円	径12		直刀・剣・鉸具・須恵器		
156	石行2号	同上	円	径18.7　高さ2.9	横穴石室	直刀・鉄鏃・轡・辻金具・金環・須恵器		
157	上野	飯田市座光寺字上野	円		横穴石室	切子玉・馬具・直刀・勾玉		
158	島屋場1号	飯田市座光寺字島屋場	円			変形四獣鏡・直刀・勾玉・管玉		
159	島場屋2号	同上	円 消滅			直刀・勾玉・切子玉・馬具		
160	島屋場3号	同上	円 消滅					
161	古市場1号	飯田市座光寺字古市場	前方後円	後円部径9.6 前方部痕跡なし		金銅丸玉・雲珠・辻金具・土師器・須恵器		
162	古市場2号	同上	円			直刀・勾玉・丸玉・金環		
163	畦地下	飯田市座光寺字畦地下	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
164	壱丈籔1号	飯田市座光寺字壱大籔	円	径7 高さ0.7		土師器・須恵器		
165	壱丈籔2号	同上	円消滅			直刀・須恵器		
166	壱丈籔3号	同上	円消滅					
167	並木	飯田市座光寺字並木	円消滅					
168	市場	飯田市座光寺字市場	円消滅					
169	石塚1号	飯田市座光寺字石塚	円	径21.8 高さ3.3	横穴石室袖なし			
170	石塚2号	同上	円	径32.7 高さ5.4	横穴石室袖なし			
171	石塚3号	同上	円					
172	浅間	同上	円	径13.2 高さ1.9		直刀		
173	ナギジリ1号	飯田市座光寺字ナジギリ	円	径9.1 高さ1.8				
174	ナジギリ2号	同上	円消滅			須恵器		
175	ナジギリ3号	同上	円消滅			土師器		
176	石原	飯田市座光寺字石原	円消滅					
177	石原田	飯田市座光寺字石原田	円消滅					
178	白山	飯田市座光寺字白山	円	径15.5 高さ12.3				
179	最見塚	飯田市座光寺字最見塚	円	径22 高さ4.5				
180	田中畑	飯田市座光寺字田中畑	円	径4 高さ1		土師器		
181	矢野1号	飯田市座光寺字矢野	円	径14.3 高さ2				
182	矢野2号	同上	円	径21.3 高さ1		土師器		
183	中羽場	飯田市座光寺字中羽場	円	径8.7 高さ1	横穴石室			
184	井下横	同上	円	径18 高さ2.1	横穴石室	金環・銀環・直刀・馬具・土師器・須恵器		
185	上溝1号	飯田市松尾字上溝	前方後円	全長 50 後円部径14.5 高さ 62 前方部高さ3.9	横穴石室両袖			
186	上溝2号	同上	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
187	上溝3号	飯田市松尾字上溝	円			勾玉・丸玉・金環・鋲・鉄鏃・雲珠・鋼具・土師器・須恵器		
188	上溝4号	同上	円	径9.8　高さ3.7				
189	上溝5号	同上	前方後円	全長40 後円部径21.8 高さ7.9	横穴石室 袖なし			
190	上溝6号（姫塚）	同上	前方後円	全長40 前方部幅23.6 高さ5.2 後円部の高5.4		七鈴鏡		
191	上溝7号	同上	円					
192	上溝8号	同上	円					
193	上溝9号	同上	円					
194	上溝10号	同上	円					
195	上溝11号	同上	円					
196	上溝12号	同上	円					
197	上溝13号	同上	円					
198	上溝14号	同上	円	径12.7				
199	妙前1号	飯田市松尾字妙前	円	径10.4　高さ1.3				
200	妙前2号	同上	円	径15.4　高さ2.2				
201	妙前3号（大塚）	同上	円	径30.3　高さ4.9				
202	妙前4号（坊主塚）	同上	円	径3.1　高さ2.4				
203	妙前5号	同上	円	径21.8　高さ4		須恵器		
204	妙前6号	同上	円	径11.7　高さ2.9				
205	妙前7号	同上	円	径11　高さ1.8		土師器・須恵器		
206	妙前8号（丸山）	同上	円	径13.9　高さ2.5				
207	妙前9号（庚申塚）	同上	円			直刀		
208	妙前10号	同上	円	径12.7　高さ0.9				
209	妙前11号	同上	円消滅					
210	妙前12号（法申塚）	同上	円消滅					
211	妙前13号	同上	円			土師器・須恵器		
212	妙前14号	飯田市松尾字妙前	円	径16.3　高さ0.7				
213	妙前15号	同上	円消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
214	大菩薩	飯田市松尾字明	円			勾玉・管玉・切子玉・棗玉		
215	御射山獅子塚	飯田市松尾字御射山	前方後円					
216	代田1号	飯田市松尾字代田	前方後円	全長63.6 前方部幅32.3 高さ3.7 後円部径40 高さ8.5		直刀・鈴・玉類・土師器・須恵器		
217	代田2号	同上	円	径14.5 高さ8.7				
218	代田3号	同上	円					
219	代田4号	同上	前方後円					
220	上毛賀1号	飯田市毛賀字上毛賀	円	径20.88 高さ5.7				
221	上毛賀2号	同上	円					
222	下毛賀1号	飯田市毛賀字下毛賀	円 消滅			土師器		
223	下毛賀2号	同上	消滅			土師器・須恵器		
224	下毛賀2号(大塚)	同上	円			勾玉・臼玉		
225	下毛賀4号(石田塚)	同上	円			管玉		
226	下毛賀5号	同上	円			直刀・勾玉		
227	下毛賀6号	同上	円			須恵器		
228	下毛賀7号	同上	円			直刀・勾玉・金環		
229	古城	飯田市松尾字八幡山	円					
230	茶柄山1号	飯田市松尾字茶柄山	円	径15.2 高さ0.9				
231	茶柄山2号	同上	円	径14.2 高さ1.5				
232	茶柄山3号	同上	円	径22.6 高さ1.7		剣・直刀		
233	茶柄山4号	同上	円	径12.7 高さ3.6				
234	茶柄山5号	同上	円	径15.1 高さ1.2				
235	北原	飯田市松尾字北ノ原	円	径15 高さ0.7		土師器		
236	妙見山	飯田市松尾字八幡原	円	径16 高さ1.6				
237	八幡山	飯田市松尾字八幡山	円	径23.7 高さ3.3		直刀		
238	大石1号	飯田市松尾字大石	円			直刀		
239	大石2号	同上	円	径5.2 高さ2		土師器・須恵器		

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
240	水佐代1号	飯田市松尾字水佐代	前方後円	全長54.2 後円部径27.4 高さ4 前方部幅21.4 高さ4		須恵器		
241	水佐代2号	同上	円	径10.9　高さ1.8				
242	水佐代3号（羽場下）	同上	円	径9.1　高さ1.2				
243	水佐代4号（狐の森）	同上	円	径6　高さ0.75		土師器・須恵器		
244	清見寺	飯田市松尾字城	円					
245	下の宮1号	飯田市松尾字下の宮				須恵器		
246	下の宮2号	同上	円					
247	降松（穴八幡）	飯田市松尾字降松	円					
248	塚越1号	飯田市駄科字塚越	前方後円					
249	塚越2号	同上	円					
250	安宅	飯田市駄科	円					
251	神道塚	飯田市駄科字神道塚	円			六鈴鏡・須恵器		
252	権現堂1号	飯田市駄科字権現堂	前方後円	全長60.8 後円部径28.2 高さ7.4 前方部幅26.2 高さ4.6		冑・直刀・土師器・須恵器		円筒
253	権現堂2号	同上	円			直刀・管玉・小玉		
254	前林	飯田市駄科字前林	円	径21　高さ2.6		須恵器		
255	境界山	飯田市駄科字境界山	円	径5.5　高さ0.6				
256	松ヶ崎	飯田市駄科字松ヶ崎	円消滅			土師器、須恵器		
257	寺前	飯田市駄科字寺前	円	径16.6　高さ1		丸玉・小玉・土師器・須恵器		
258	引廻	飯田市駄科字引廻	円			直刀・轡・管玉・丸玉・須恵器		円筒
259	日影山平	飯田市駄科字日影山平	円消滅			管玉・須恵器		
260	御所山	飯田市駄科字御所山	円	径14.9　高さ3.2		勾玉・管玉・切子玉・銀環・紡垂車・石製品・土師器・須恵器		
261	念地山1号	飯田市駄科字念地山	円消滅					
262	念地山2号	同上	円消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
263	平塚	飯田市駄科字平塚	円	径8.2　高さ4		直刀		
264	池田	飯田市駄科字池田	円					
265	塚田	飯田市駄科字塚田	円 消滅					
266	井間	飯田市駄科字井間	円 消滅					
267	番匠塚	飯田市駄科字番匠塚	円	径38.4　高さ4				
268	ヒエ田	飯田市駄科字井添	円 消滅					
269	丸畝町	飯田市駄科字丸畝町	円					
270	張原丸塚	飯田市駄科字張原	円	径12　高さ1.5		鈴鏡・直刀・勾玉・管玉		
271	樋ノ口	飯田市駄科字樋ノ口	円 消滅					
272	トヤ田	飯田市駄科字トヤ田	円 消滅					
273	井添1号	飯田市駄科字井添	円					
274	井添2号	同上	円					
275	原	飯田市駄科字原	円 消滅					
276	ゲンチャウナギ1号	飯田市駄科字ゲンチャウナギ	円	径11.8　高さ3.6				
277	ゲンチャウナギ2号	同上	円 消滅					
278	北羽場1号	飯田市駄科字北羽場	円 消滅					
279	西原	飯田市長野原字西原	消滅					
280	御殿塚	飯田市長野原字塚	円 消滅	径1.1　高さ6.5				
281	中井田西	飯田市長野原字中井田町	円	径12				
282	中井田1号	同上	円	径18.2　高さ1.2		直刀・轡・勾玉・管玉・小玉・鏡		
283	中井田2号	飯田市長野原字中井田	円	径19.9　高さ3.6				
284	西羽場	同上	円 消滅			環頭柄頭・剣・直刀		
285	三ツ塚1号	飯田市長野原字一ツ塚	円	径27.6　高さ1.9				
286	二ツ塚2号	同上	円	径15.9　高さ3				

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
287	金山	飯田市長野原字金山						
288	藤塚1号	飯田市長野原字藤塚	円 消滅					
289	藤塚2号	同上	消滅					
290	福宮	飯田市長野原字福宮	円 消滅					
291	大座1号	飯田市時文字大座	円	径10.9　高さ3.5				
292	大座2号	同上	円	径5.4　高さ0.9				
293	持田	飯田市時又字持田	消滅					
294	横前	飯田市時又字横前	円					
295	安城垣外	飯田市時又字安城垣外	円					
296	前の原1号	飯田市桐林字長溝谷	円 消滅					
297	前の原2号	飯田市桐林字前の原	円 消滅					
298	前の原3号	同上	円 消滅					
299	前の原4号	同上	円 消滅					
300	前の原5号	同上	円 消滅					
301	前の原6号	同上	円	径16　高さ2.2		金環・轡・丸玉・土師器・須恵器		
302	高見	飯田市桐林字高見				土師器・須恵器		
303	久保尻1号	飯田市桐林字久保尻	円 消滅					
304	久保尻2号	同上	円 消滅					
305	久保尻幸神	同上	円 消滅					
306	殿垣外1号	飯田市桐林字殿垣外	円 消滅					
307	殿垣外2号	同上	円 消滅					
308	殿垣外3号	同上	円 消滅			直刀・鉄鏃		
309	殿垣外4号	同上	円 消滅			珠文鏡・鉾・丸玉		
310	殿垣外5号	同上	円 消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
311	塚原1号（二子塚）	飯田市桐林字塚原	前方後円	全長72 後円部径41.4 高さ6 前方部幅44.6 高さ6.5	竪穴石室	土師器・須恵器		形象
312	塚原2号（内山塚）	飯田市桐林字塚原	円	径31.3　高さ2.8	横穴石室	剣・刀子・鉄鏃		
313	塚原3号	同上	円	径26.1　高さ4.4				
314	塚原4号	同上	円	径30.5　高さ5.7				
315	塚原5号	同上	円	径5.8　高さ3.8	竪穴石室	四獣鏡・短甲・馬鐸・直刀		
316	塚原6号	同上	円消滅					
317	塚原7号	同上	円	径22　高さ0.4				
318	塚原8号	同上	円消滅					
319	塚原9号	同上	円消滅					
320	塚原10号	同上	円	径20.1　高さ3.5		内行花文鏡		
321	塚原11号	同上	円	径18.2				
322	塚原12号	同上	円消滅					
323	塚原13号	同上	円消滅					
324	塚原14号	同上	円消滅			金環・土師器・須恵器		円筒
325	塚原15号	同上	円消滅					
326	塚原16号	同上	円消滅					
327	丸山	飯田市桐林字丸山	前方後円					
328	中屋1号	飯田市桐林字中屋	円消滅					
329	中屋2号	同上	円消滅					
330	坊主新田1号	飯田市桐林字坊主新田	円消滅					
331	坊主新田2号	同上	円消滅					
332	泥抜	飯田市桐林字泥抜	円	径20		直刀		
333	塚田	飯田市桐林字塚田	円消滅					
334	北羽場1号	飯田市桐林字北羽田	消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
335	北羽場2号	飯田市桐林字北羽場	円 消滅					
336	久保在家1号	飯田市桐林字久保在家	円 消滅					
337	久保在家2号	同上	円					
338	田中	飯田市桐林字田中	円 消滅					
339	公文新	飯田市桐林字公文所	円 消滅					
340	尾畑	飯田市桐林字尾畑	円	径15　高さ1				
341	中尾畑	飯田市桐林字中尾畑	円					
342	庵ノ塚1号	飯田市桐林字庵塚	円 消滅					
343	庵ノ塚2号	同上	円			直刀・鉄鏃・鈴・丸玉・切子玉・馬具		
344	梶垣外	飯田市桐林字梶垣外	円	径11.2　高さ1				
345	宝下	飯田市桐林字宝下	円 消滅					
346	大塚	飯田市桐林字大塚	前方後円	全長73 後円部径49 高さ9				水鳥
347	兼清塚	飯田市桐林字兼清塚	前方後円	全長63.6 後円部径28 高さ5		二神二獣鏡・四神四獣鏡・内行花文鏡・直刀・勾玉・丸玉・鉄鏃		
348	念仏塚	飯田市桐林字兼清塚	円	径9　高さ1.8				
349	塚	飯田市桐林字塚	円 消滅					
350	下原1号	飯田市桐林字下原	円	径11.9　高さ3.1				
351	下原2号	同上	円		横穴石室	直刀・金環・銀環・馬具・須恵器		
352	蒜田	飯田市桐林字蒜田	円	径16.8　高さ3.2				
353	中原1号	飯田市桐林字中原	円	径13　高さ2				
354	中原2号	同上	円			直刀・轡		
355	金山1号	飯田市上川路	前方後円	全長49.1 後円部径37.2 高さ7.9 前方部幅36.4 高さ6.1		環鈴・鈴・砥石・土師器		
356	金山2号	同上	円	径8.6　高さ1				

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
357	金山3号	同上	円 消滅	径8.6 高さ1				
358	金山4号	同上	円 消滅			金環・管玉		
359	金山5号		円 消滅					
360	金山6号	同上	円	径22.9 高さ5.2				
361	金山7号	同上	円 消滅					
362	金山8号	同上	円	径14.8 高さ3.9				
363	金山9号	同上	円	径10				
364	浅間塚	飯田市上川路字 大畑	円	径10.5 高さ21.9		須恵器		
365	伝平城	同上	円 消滅			剣・直刀		
366	天白	飯田市上川路字 天白	円 消滅			須恵器		円筒
367	宮ノ協1号	飯田市上川路字 宮ノ協	円 消滅					
368	宮ノ協2号	同上	前方 後円		マウンド 消滅 横穴石室 露出			
369	上ノ坊1号	飯田市上川路字 上ノ坊	前方 後円	全長46.4 後円部径19 高さ6 前方部幅20.8 高さ5				
370	上ノ坊2号	同上	円	径9.1 高さ5.5				
371	新屋敷	飯田市上川路字 新屋敷	円 消滅					
372	町並	飯田市上川路字 町普	前方 後円 消滅		横穴石室			
373	塚前	飯田市上川路字 塚前	円 消滅					
374	西1号 (御猿堂)	飯田市上川路字 西	前方 後円			四仏四獣鏡・剣・直刀 環頭柄頭・桂甲・ 小札・鉄鏃・轡・雲 珠・杏葉・土師器・ 須恵器・勾玉・切子玉		形象 円筒
375	西2号	同上	円 消滅			剣・玉類		
376	西3号	同上	円消 消滅					
377	権現1号	飯田市上川路字 権現	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
378	権現2号	飯田市上川路字権現	円消滅					
379	権現3号	同上	円	径18.5　高3.4		珠文鏡・直刀・短甲・鉄鏃・鈴付鏡板		
380	権現4号	飯田市上川路字権現	円消滅			轡・杏葉・雲珠・金箔		
381	下高野	飯田市上川路字下高野	円消滅			剣・直刀		
382	ギヲン田	同上	円消滅			鉄鏃		
383	中林1号	飯田市伊豆木字中林	円	径18　高さ3				
384	中林2号	同上	円	径13　高さ1.5				
385	中林3号	同上	円	径14　高さ4				
386	島垣外	飯田市伊豆木字垣外	円消滅			直刀		
387	石原田	飯田市伊豆木字青木	円	径9　高さ1.8		変形鏡・剣・直刀・刀子柄・冑・短甲・桂甲・小札・鉾		円筒
388	塚山	飯田市伊豆木字平塚山	円	径16.4　高さ3.9		金環・銀環・須恵器		
389	矢平1号	飯田市伊豆木字矢平	円消滅			直刀・剣・管玉・金環・鉄鏃・須恵器		
390	矢平2号	同上	円消滅					
391	唐沢1号	飯田市伊豆木字摩利支天	円	径5.5　高さ1.4				
392	唐沢2号	飯田市伊豆木字川上林	円	径8.3　高さ1				
393	狐塚	飯田市伊豆木字狐塚	円	径16.5　高さ2.2				
394	入道洞1号	飯田市伊豆木字入道洞	円	径21　高さ1				
395	入道洞2号	同上	円	径13　高さ0.5				
396	入道洞3号	同上	円	径14.6　高さ1.5				
397	別所原	飯田市下瀬字別所原	円					
398	高松1号	飯田市伊豆木字高松	円	径16　高さ2				
399	高松2号	同上	円	径12.7				
400	高松3号	同上	円		竪穴石室	直刀・冑・短甲・須恵器		円筒
401	高松4号	同上	円消滅			剣・直刀・短甲・鉾		
402	高松5号	同上	円	径8.3　高さ0.9				

	古墳名	出在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
403	高松6号	飯田市伊豆木字高松	円	径12.3 高さ1.2		直刀		
404	高松7号	同上	円	径18.2 高さ2.8		勾玉・管玉・五鈴鏡		
405	高松8号	同上	円	径25.5 高さ2.2		直刀		
406	山伏塚	飯田市伊豆木字山伏塚	円	径12.3 高さ1				
407	坊主塚洞1号	飯田市伊豆木字坊主塚ヶ洞	円消滅					
408	坊主塚洞2号	同上	円	径10 高さ3				
409	前田	飯田市伊豆木字前田	円消滅					
410	家ノ裏1号	飯田市伊豆木字家ノ裏	円	径13.6 高さ2.4		直刀・金環・銀環		
411	向田	飯田市伊豆木字向田	円消滅			管玉・杏葉・須恵器		
412	竹ノ上	飯田市伊豆木字竹ノ上	円	径17 高さ3		剣・勾玉・管玉・金管		
413	宮ずる様1号	飯田市伊豆木字宮ずる様	円	径18 高さ1.8		剣		
414	宮ずる様2号	同上	消滅					
415	宮ずる様3号	同上	円	径15.7 高さ2		直刀・勾玉・管玉・金環・銀環・馬具		
416	新道平1号	飯田市下瀬字新道平	円					
417	東照坊1号	飯田市立石字東照坊	円	径3.64 高さ1.8				
418	東照坊2号	同上	円	径2.72 高さ1				
419	山中	飯田市立石字山中	円	径12.7 高さ2.4		須恵器		
420	後畑	飯田市立石字後畑	円消滅					
421	甲賀塚	飯田市立石字城	円	径5.7 高さ2.4				
422	直慶地	飯田市立石字直慶地	円消滅					
423	北の原1号	飯田市立石字北の原			長持形石棺	直刀		
424	北の原2号	同上	円消滅					
425	北の原3号	同上	円消滅					
426	北の原4号	同上	円					
427	在京原1号	飯田市立石字原林	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
453	大塚	飯田市上殿岡字下大久保	円 消滅			直刀		
454	丸山1号	飯田市三日市場字丸山	円	径8.5　高さ2				
455	丸山2号	同上	円			直刀		
456	日陰前	飯田市三日市場字日蔭前	円 消滅					
457	大塚	飯田市中村字大場	円	径13.8　高さ0.5		直刀・土師器・須恵器		
458	寺畑	飯田市中村字寺畑	円					
459	権現原1号	飯田市中村字権現原	円			直刀		
460	権現原2号	同上	円	径18.6　高さ1.7				
461	権現原3号	同上	円	径18.3　高さ2.8				
462	塚本	飯田市中村字トヤバ	円 消滅			須恵器		
463	狐塚	飯田市中村字狐塚	円			直刀		
464	大名塚	飯田市中村字大名塚	円	径12.8　高さ1		直刀		
465	宮原1号	飯田市中村字宮原	円 消滅			直刀		
466	宮原2号	同上	円 消滅			直刀		
467	経塚原1号	飯田市中村字上ノ原	円	径8.9　高さ1.5				
468	経塚原2号	飯田市三日市場字経塚原	円	径5.5　高さ1.5				
469	一ツ塚	飯田市中村字一ツ塚	円	径26.1　高さ3.2				
470	大畑	飯田市中村字大畑	円	径29.8　高さ3.4		盤龍鏡		
471	よぎ原	飯田市中村字よじ原	円			勾玉・管玉		
472	蓬塚	飯田市中村字よもぎ塚	円 消滅					
473	上ノ原	飯田市中村字上ノ原	円	径3　高さ1				
474	金堀塚	飯田市山本字西平金堀塚	円 消滅			内行花文鏡・勾玉・環頭柄頭		
475	石子原	飯田市山本字南平厚原	円	径16.8　高さ0.8		勾玉・土師器		
476	大塚	飯田市竹佐字大塚	円	径34.8　高さ2.5				

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
428	在京原2号	飯田市立石字原林	円					
429	在京原3号	同上	円	径12 高さ1				
430	笛吹1号	飯田市立石字笛吹	円			直刀・須恵器		
431	笛吹2号	同上				須恵器		
432	笛吹3号	同上	円消滅					
433	笛吹4号	同上	円					
434	南方1号	飯田市立石字南方	円					
435	南方2号	飯田市立石字南方	円			直刀		
436	弥平塚	飯田市立石字位京原	円					
437	文吾林1号	飯田市立石字文吾林	円消滅					
438	文吾林2号	同上	円			直刀		
439	北の平	飯田市北方字北の平	円					
440	二ツ塚1号	飯田市北方字位京						
441	二ツ塚2号	飯田市北方字寂田	円					
442	梅ヶ久保	飯田市大瀬木字昭和	円	径8.6 高さ1.6				
443	西ノ原	飯田市大瀬木字西ノ原	円消滅					
444	茶釜塚	飯田市大瀬木字横旗	円消滅					
445	大塚	飯田市大瀬木字栃下	円	径6 高さ1.5				
446	浅間塚	飯田市大瀬木字富士塚	円	径15 高さ4.5				
447	富士塚	同上	円			勾玉		
448	市場屋敷	飯田市上殿岡字市場屋敷				直刀		
449	公文所前1号	飯田市上殿岡字公文所前	円					
450	公文所前2号	同上	円	径4.9 高さ1.4		直刀・須恵器		
451	北村	飯田市上殿岡字北村	円	径3.3 高さ0.5		土師器・須恵器		
452	狐塚	飯田市上殿岡字狐塚	円消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
477	狐塚	飯田市山本字狐塚	円	径11.2				
478	もりの塚	飯田市竹佐字もり	円	径15　高さ1.5				
479	塚ノコシ	飯田市竹佐字塚ノコシ	円 消滅					
480	大洞1号	飯田市箱川字大洞	円	径18.2　高さ1.6				
481	大洞2号	同上	円	径21.3　高さ1.4				
482	ミヤシタ	飯田市久米字ミヤシタ	円 消滅			刀子・須恵器		
483	塚本	飯田市久米字ミ本	円	径11.2　高さ0.5				
484	タカハシ	飯田市虎岩字タカハシ	円 消滅					
485	屋敷	飯田市虎岩字屋敷	円 消滅			刀子・鐔・馬具・轡・土師器・須恵器		
486	塚平	飯田市虎岩字塚平	円 半壊	径11.2　高さ1.7				
487	ハチマン	飯田市虎岩字ハチマン	円 消滅			直刀		
488	塚越	飯田市虎岩字塚越	円	径4.3　高さ1.4				
489	日向沢	飯田市虎岩字日向沢	円 消滅			須恵器		
490	中島	飯田市虎岩字中島	円 消滅					
491	赤坂	飯田市久堅字和久平赤坂	円 消滅		横穴石室			
492	塚穴洞	飯田市久堅字小林塚穴洞	円 消滅		横穴石室			
493	宮ノ背	飯田市久堅字柿ノ沢宮ノ背	円					
494	下ノ平	飯田市久堅字南原下ノ平	円	径7.4　高さ2.1				
495	蓼原	飯田市川路字蓼原	円					
496	花御所1号	飯田市川路字花御所	円	径8.8　高さ1.9		金環・銀環・雲珠・轡・勾玉・切子玉・鉄鏃・土師器・須恵器・辻金具		
497	花御所2号	同上	円 消滅					
498	花御所3号	同上	円	径4.6　高さ1				
499	花御所5号	同上	円 消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
500	花御所5号	飯田市川路字花御所	円消滅					
501	花御所6号	同上	円	径7.7 高さ1.0		土師器		
502	花御所7号	同上	円消滅					
503	花御所8号	同上	円	径7.6 高さ1.7				
504	花御所9号	同上	円消滅					
505	花御所10号	同上	円消滅					
506	花御所11号	同上	円消滅					
507	花御所12号	同上	円消滅			土師器・須恵器		
508	花御所13号	同上	円消滅					
509	今洞1号		円消滅					
510	今洞2号	同上	円	径20.2 高さ2.9				
511	今洞3号	同上	円	径14.5 高さ2.6		直刀		
512	今洞4号	同上	円消滅					
513	今洞5号	同上	円	径11 高さ1.5		斧・馬鍬・直刀・土師器・須恵器		
514	今洞6号	同上	円消滅					
515	久保田1号	飯田市川路字久保田	前方後円					
516	御射山原1号	飯田市川路字御射山原	円	径11.7 高さ2.2		直刀・金環・馬具・土師器・須恵器		
517	御射山原2号	同上	円消滅					
518	御射山原3号(下辻)	同上	円	径11.8 高さ4.3	横穴石室			
519	殿村1号	飯田市川路字殿村	円消滅			四獣鏡・素文鏡・管玉		
520	殿村2号	同上	円消滅					
521	月ノ木1号	飯田市川路字月ノ木	円	径10.5 高さ11		直刀		
522	月ノ木2号	同上	円	径2.1 高さ0.7				
523	月ノ木3号	同上	円消滅					
524	月ノ木4号	同上	円消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
525	月ノ木5号	飯田市小路字月ノ木	円 消滅					
526	明殿脇1号	飯田市川路字明殿脇	円					
527	明殿脇2号	同上	円					
528	明殿脇3号	同上	円					
529	坂裾	飯田市川路字坂裾	円 消滅					
530	下辻垣外	飯田市川路字下辻垣外	円 消滅					
531	辻垣外1号	飯田市川路字辻垣外	円 消滅					
532	辻垣外2号	同上	円 消滅					
533	丸山	飯田市川路字稲葉	円			金環・青・勾玉・須恵器		
534	大荒神	飯田市川路字荒神	円	径11.1　高さ1		土師器		
535	下井戸	同上	円					
536	庚申塚	飯田市川路字大明神	円 消滅					
537	八王子塚	飯田市川路字大野垣外	円	径6				
538	切石	鼎町鼎字切石				須恵器		
539	鞍骨	鼎町鼎字鞍骨	円	径19.8　高さ1				
540	大塚	鼎町鼎字宮下	円					
541	萱垣	鼎町鼎字萱垣	円					
542	宮ノ原	鼎町稲井字宮ノ原	円	径4.2　高さ0.71				
543	西の原	鼎町稲井字西の原	円	径7.3　高さ1.3				
544	行人塚	鼎町稲井字行人塚	円	径13.4　高さ3				
545	地蔵堂	鼎町稲井字地蔵堂	円	径11.5　高さ1.7				
546	物見塚	鼎町稲井字物見塚	円	径18.2　高さ4.9		土師器		
547	京田原	阿智村春日字京田原	円 消滅			土師器・須恵器		
548	狐塚1号	阿智村春日字下平	円	径19.6　高さ3.5		土師器・須恵器		
549	狐塚2号	同上	円 消滅					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
550	五反田1号	阿智村駒場字五反田	円消滅					
551	五反田2号	同上	円消滅					
552	五反田3号	同上	円消滅					
553	古城	阿智村駒場字古城	円消滅					
554	漆垣外	阿智村駒場字漆垣外	円消滅			須恵器		
555	無常土	阿智村駒場字舞常土	円	径11 高さ1		土師器・須恵器		
556	城坂	阿智村駒場字城坂	円消滅					
557	千人塚	阿智村駒場字木戸脇	円	径9.5 高さ1.7				
558	島垣外	阿智村駒場字島垣外	円消滅			勾玉・管玉		
559	長塚	阿智村駒場字横手口	円消滅			刀子		
560	庚申塚	阿智村駒場字合戸替	円消滅					
561	坊塚	同上	円	径14.9 高さ2.3				
562	姥塚	阿智村駒場字山の神下	円消滅					
563	塚本	阿智村伍和字塚本	円	径8.8 高さ2				
564	塚腰	阿智村伍和字下山	円消滅					
565	浅間塚	上郷村黒田字浅間塚	円					
566	ドドメキ1号	上郷村別府字ドドメキ	円					
567	ドドメキ2号	同上	前方後円			直刀・刀子・鉄鏃・轡・鐙・金環・銀環・雲珠・管玉・切子玉・紡錘車・鍬・土師器・須恵器		
568	ドドメキ3号	同上	円			管玉・切子玉・小玉・土師器		
569	ドドメキ4号	同上	円					
570	中島1号	上郷村別府字中島	円					
571	中島2号	同上	円			管玉・切子玉・ソロバン玉・須恵器・石製模造品		

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
572	中島３号	上郷村別府字中島	円			勾玉		
573	中島４号	同上	円			管玉・丸玉･切子玉･多稜形玉		
574	中島５号	同上	円	径9.1　高さ2.1		管玉・土師器・須恵器		
575	中島６号	上郷村別府字向垣外	円	径11　高1.2		轡・須恵器		
576	中島７号	上郷村別府字中島	円					
577	中島８号	同上	円					
578	中島９号	同上	円					
579	中島10号	同上	円					
580	化石１号	上郷村別府字化石	円	径19.5　高さ3.6	横穴石室			
581	化石２号	同上	円			直刀・須恵器		
582	番神塚	上郷村別府字北村	前方後円		横穴石室	鈴鏡・直刀・勾玉		
583	溝口の塚	上郷村飯沼字堂垣外	円					
584	弓矢	上郷村別府字弓矢	円			直刀・柄頭・金環・銀環・銀線・鉄鏃・切子玉・馬具・須恵器		
585	川底	同上				轡・須恵器		
586	聖賢塚	上郷村別府字榎木戸	円	径6.7　高さ1.8	横穴石室			
587	中井	上郷村別府字中戸	円					
588	庚甲原	上郷村別府字庚井	円	径16.3　高さ３		丸玉		
589	宮前垣外	上郷村別府字宮申原	円					
590	鳥屋場	上郷村別府字鳥屋場	円			土師器		
591	久保	上郷村別府字久保				土師器		
592	門前	上郷村飯沼	円			直刀・刀子・鐔・鉄鏃・土師器・須恵器		
593	天神塚	上郷村飯沼字天神塚	前方後円	全長74.5 前方部幅39.4 高さ7.5		神獣鏡・四鈴鏡・環頭柄頭・鉄鏃・馬具・鈴・馬鈴・杏葉・丸玉・密柑玉･切子玉･臼玉・棗玉		
594	塚田	上郷村飯沼字塚田	円					

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
595	中しま	上郷村飯沼字中しま	円 消滅					
596	神道塚	下条村陸沢字神道塚	円	径38 高さ1.2				
597	若宮坂	下条村陸沢字若宮坂	円					
598	塚田	下条村陸沢字塚田	円					
599	月井戸	下条村陸沢字月井戸	円	径2.6 高さ1.4				
600	宮ノ原	下条村陸沢字宮ノ原	円	径3 高さ0.6				
601	大麦田	下条村陸沢字大麦田						
602	京ノ塚	下条村陸沢字京ノ塚	円	径10.6 高さ1.4				
603	塚沢	下条村陸沢字塚沢	円					
604	岩塚	下条村陸沢字岩塚	円					
605	高塚	下条村陸沢字親田	円					
606	藤塚	下条村陽皐字藤塚	円	径24 高さ0.8				
607	万蔵塚	下条村陽皐字上野原	円					
608	塚越1号	下条村陽皐字塚越	前方後円	全長72.7 後円部径26.4 高さ7.8 前方部幅15.3 高さ7.8		丸玉		
609	塚越2号	同上	円 消滅					
610	塚越3号	同上	円	径4.7 高さ0.5				
611	長塚林	下条村陽皐字長塚林	円	径9 高さ0.9				
612	堤林	阿南町北条字堤林	円			直刀・須恵器		
613	大平	阿南町北条字大平	円	径11.6 高さ0.6		刀子・鉄鏃・土師器・須恵器		
614	大畑	阿南町西条字エウド	円	径9.8 高さ2.1	横穴石室	勾玉・須恵器		
615	大開工	阿南町南条字大開工						
616	八幡社の家	同上	円	径8.5 高さ1.5				
617	種田塚	阿南町南条字ヒルイバ	円	径17.6 高さ3.4	横穴石室	直刀・土師器・須恵器		

	古墳名	所在地	形状	規模(m)	内部構造	副葬品	葺石	埴輪
618	塚谷垣外	阿南町南条字塚谷垣外	円					
619	新熊山	阿南町目開字新熊山	円		横穴石室	須恵器		
620	他所根	阿南町富草字粟野他所根	円			直刀・土師器・須恵器		
621	天宝林	阿南町富草字粟野天宝林	円	径16.4　高さ3.2	横穴石室			
622	堂保	阿南町富草字粟野堂保	円	径10.8　高さ1.9	横穴石室	直刀		
623	塚山	阿南町富草字粟野塚山	円	径15.1　高さ3.8				
624	上垣外	阿南町富草字上梅田上垣外				直刀・土師器・須恵器		
625	上粟田	阿南町富草字鴨目山田	円	径10.3　高さ4.7		直刀・鉄鏃・柄頭・土師器・須恵器		

らは銅盌が出土しており、これも七世紀に入ってからと考えて間違いなかろう。その外にも末期古墳に属するものもあると思うが、確実な副葬品や正式な調査が行われた古墳が数少ないのでとりあげることが出来なかった。

神坂峠を越えて信濃に入った古墳文化は飯田盆地に最初に根をおろしたのであり、その時期は遅く見ても五世紀初期頃で前期古墳末葉か中期古墳文化のはじめ頃と考えられる。飯田盆地ではぐくまれた古墳文化は、北上して上伊那郡に進出した（後期古墳文化期）。その代表的なものとして王墓をあげることができよう。よって上伊那郡の古墳文化は伊那谷の第二に展開した古墳文化ということができる。

なお飯田盆地においても飯田市の川路、桐林地区の南部に中期古墳が築造され、後期に至ると北部の高岡古墳群が築造され北進を開始する動きを見せている。

表3 伊那谷の前方後円墳

	古墳名	全長	後円部の径	後円部の高さ	前方部の幅	前方部の高さ
1	天神塚	74.5			39.4	7.5
2	大塚	73.0	49	9		
3	塚越1号	72.7	26.4	7.8	15.5	7.8
4	塚原1号	72.0	41.4	6.0	44.6	6.5
5	高岡1号	72.0	41.9	5.5		
6	西1号(御猿堂)	66.0	26.4	8.5	29.6	9.0
7	代田1号	63.6	40.0	8.5	32.3	3.7
8	兼清塚	63.6	28.0	5.0		
9	権現堂1号	60.8	28.2	7.4	26.2	4.6
10	王墓	60.0	30.0	10.2	45.0	11.0
11	永佐代1号	54.2	27.4	4.0	21.4	4.0
12	上溝1号	50.0	14.5	6.1		3.9
13	金山1号	49.1	37.2	7.9	36.4	6.1
14	上ノ坊	46.0	19.0	6.0	20.8	5.0
15	上溝6号	40.0		5.4	23.6	5.2
16	上溝5号	40.0	21.8	7.9		
17	郭1号	38.2	27.3	7.3		

この外の前方後円墳は規模が不祥である。また古市場1号墳は前方部が消滅してしまい後円部だけが残されているのでこの表からはずした。

表4　伊那谷の円墳

	古墳名	径	高さ
1	番匠塚	38.4	4.0
2	藤塚	34.5	2.6
3	石塚2号	32.7	5.4
4	塚原2号	31.3	2.8
5	塚原4号	30.4	5.7
6	妙前3号	30,3	4.9
7	新井原12号	28.0	5.5
8	三ッ塚1号	27.6	1.9
9	塚原3号	26.1	4.4
10	一ッ塚	26.1	3.2
11	高松8号	25.5	2.2
12	物見塚	24.4	3.2
13	小野山1号	24.5	1.1
14	金山6号	22.9	5.2
15	八幡山3号	22.6	1.7
16	茶柄山3号	22.6	7.7
17	最見塚	22.0	4.5
18	塚原7号	22.0	0.4
19	妙前5号	21.8	4.0
20	石塚1号	21.8	3.3
21	大洞2号	21.5	1.4
22	矢野2号	21.3	1.0
23	妙前4号	21.1	3.4
24	態野2号	21.0	1.6
25	入道洞1号	21.0	1.0
26	前林	21.0	2.6
27	上毛賀1号	20.8	5.0
28	今洞2号	20.2	2.9
29	塚原10号	20.1	3.5
30	杵が塚	20.0	0.8
31	泥抜	20.0	

表5　伊那谷の鏡を出土する古墳

	古墳名	鏡
1	武稜地1号	珠文鏡
2	里原1号	四神四獣鏡
3	宮ノ平2号	内行花文鏡
4	畦地3号	変形四神四獣鏡
5	平地1号	変形神獣鏡
6	新井原6号	珠文鏡
7	新井原7号	乳文鏡
8	新井原8号	三角縁三神三獣鏡
9	島屋場1号	変形四獣鏡
10	上溝6号	七鈴鏡
11	張原丸塚	鈴鏡
12	殿垣外4号	珠文鏡
13	塚原5号	四獣鏡
14	塚原10号	内行花文鏡
15	兼清塚	二神二獣鏡・四神四獣鏡・内行花文鏡
16	西1号	画文帯四仏四獣鏡
17	権現3号	珠文鏡
18	石原田	変形鏡
19	高松7号	五鈴鏡
20	大畑	盤龍鏡
21	殿村1号	四獣鏡・素文鏡
22	天神塚	神獣鏡・鈴鏡
23	金堀塚	内行花文鏡
24	番神塚	鈴鏡
25	神送塚	六鈴鏡
26	久保田1号	五鈴鏡
27	新道平18号	内行花文鏡

表6　冑・短甲・桂甲出土古墳

	古墳名	伴出遺物
1	柏原	冑・土師器・須恵器
2	井ノ上	冑・金環・鉄鏃・轡・切子玉
3	新井原2号	冑・短甲・直刀・鉄鏃・鉾・馬具
4	権現堂1号	冑・直刀・土師器・須恵器
5	塚原5号	短甲・馬鐸・直刀・四獣鏡
6	石原田	冑・短甲・変形鏡・剣・直刀・刀子柄・桂甲・小札・鉾
7	高松3号	短甲・冑・直刀・鉾・須恵器
8	高松4号	短甲・剣・直刀・鉾
9	妙来堂	桂甲・小札・直刀・鉄鏃・轡・鏡板・鉄斧・鉸具・鎌・鎹・座金・尾錠

古墳の分布図を見ると中川村の片桐古墳までは下伊那古墳文化圏として連続して見られるが、北部の駒ヶ根の原垣外古墳まではかなり離れており、片桐古墳は下伊那古墳文化園の最北端に位置すると考えることができそうである。竹や茶等の植物の分布や方言等についても中川村は下伊那郡と上伊那郡の境になるといわれ、今日では中川村は上伊那郡に属しているが、片桐古墳は下伊那古墳文化圏の末期古墳を代表するものと考えた方が適切と思われる。

下伊那古墳文化圏においては、前方後円二七基、また円墳でも径二〇メートルを越えるもの三一基をあげたがすべて下伊那郡に在り、なかでも飯田市番匠塚古墳は径三八・四メートル、高さ四メートルの伊那谷随一の円墳である。

上伊那郡の前方後円はたった一基、箕輪町の王墓があるだけである。しかし伊那市富県の駒合古墳は東西一六メートル、高さ一・五メートルの方墳が存在し、これは伊那谷に唯一の方墳である。

代表的な前方後円と円墳の大きいものと、鏡と冑、短甲を出土した古墳をあげておくことにする(表3～6)。

第二節　善光寺平とその周辺

下伊那古墳文化とともに信濃における主要な古墳分布地域で、千数百基を数える。僻遠の山間部に古墳文化が開化したのは何時頃からであろうか。更科市森大穴山森将軍塚古墳(4)と更科郡篠ノ井町の川柳将軍塚古墳(5)が、この地域で最古式の古墳と考えられる。

(4)長野県森将軍塚古墳　更科郡教育委員会
(5)川柳村将軍塚の研究　森本六爾

森将軍塚古墳は全長九八メートル、前方部幅三〇メートル、同高さ約五メートル、後円部径四五メートル、同高

さ約八メートル、痩尾根に築造されたためか、後円部のねじれた前方後円墳である。内部構造は後円部に竪穴式石室、前方部にも組合石棺が設けられている。副葬品には三角縁神獣鏡の破片四、剣、刀、槍、鏃、刀子、鎌の残欠、硬玉製十字頭勾玉、碧玉製管玉、土師器、円筒埴輪、朝顔形埴輪、底部穿孔土器等が見られる。墳丘はややくずれているが、前方部が低く、前期的な様相を有しており、土師器の中には非常に古式的なのも含まれている点から見て、善光寺平の中で最古式か、遅くとも五世紀初頭頃に築造されたのであろう。

これと同時期かつづくものとして川柳将軍塚古墳がある。山頂に築かれた全長九〇メートル、後円部の径四二メートル、同高さ八・二メートル、前方部の長さ四八メートル、幅三一メートル、高さ六メートルの前方後円墳である。内部構造は竪穴式石室で、副葬品の中には時間的に相違のあるものが見られ、本古墳の年代的な系列を明確にとらえることは至難である。

出土遺物として、異体字日月銘内行花文鏡、四獣鏡、珠文鏡、変形文鏡二面、内行花文鏡二面、異形石製品、勾玉、管玉、切子玉、小玉が見られ、伝世品として信濃奇勝録に出ているものには銅鏃一七、筒形銅器、金環、銀環、車輪石破片、軸形石製品、異形石製品、管玉、小玉、勾玉がある。すべて本古墳の副葬品かどうか問題がありそうであるが、とにかく古式古墳の墳丘、内部構造を持っており、中期初頭の古墳と考えて間違いあるまい。

以上のことから、善光寺平に古墳文化が発生したのは遅くとも五世紀初め頃と考えられるであろう。これにつづくものとして埴科郡西篠村舞鶴山第一号墳、第二号墳があり、前者は円墳で後者は柄鏡式の前方後円墳である。

後期古墳から末期古墳に至ると古墳築造の風潮は盆地全域に浸透してくる。比較的古式古墳が盆地西南部の更科郡篠ノ井町を中心とした千曲川左岸とそれに対峙する埴科郡屋代町・松代町に限られていたのに、後期古墳以後には盆地北部の長野市・長岡丘陵の中野市、あるいは飯山市にも見られるようになった。といっても中心区はやはり、更科・埴科の両那であった。特に末期古墳の時代の一大特色は、埴科郡松代町寺尾地区大室を中心にした数百基

にのぼる積石塚の存在である。殊に石室の合掌造りは問題となるであろう。

合掌造りの石室は朝鮮の家形石室の概念であって、中野市長岡地区田麦林畦一号墳や長野市上松上池ノ平には、土盛の円墳の中にも合掌造りの内部構造を持つものも見られる。積石塚は古代朝鮮の渡来人によって造営されたと考えられ、大室古墳群を中心として一部は東筑摩郡・諏訪郡にも及んでいる。積石塚は円形に築かれるのが一般的であるが、東筑摩郡坂井村安坂古墳群、同麻積村麻積塚の如く方墳あるいは上円下方墳をもつのも見られ、また更科郡中郷古墳の如く、前方後円を形どるものも見られる。積石塚の多くは小形粗造で副葬品の中には奈良時代にも降ると思われるのも見られ、大部分は末期古墳期から歴史時代初めにかけて築造されている。

以上の如く善光寺平の古墳文化は中期初頭より開花し、末期古墳時代に渡来人の参加もあって特徴ある発展を遂げ、その終末は奈良時代にまで及んでいるということが出来よう。

第三節 その他の地域

小県地方の古墳

小県地方の古墳は貧弱で、前方後円墳一基、方墳らしきもの一基の他は皆小円墳である。自然の洞窟を利用した丸子町依田御嶽堂の如く特殊なものも存在している。

上田市太郎山二子塚古墳は、比較的大形の前方後円墳で後期古墳の特徴をもつ墳丘を有している。

要するに小県地方の古墳は、地理的環境から善光寺平の古墳文化の影響を受けた後期古墳期より築造され、終末は歴史時代にまで及んでいる。

佐久地方の古墳

南北佐久地方の古墳も年代的には下降した小円墳が大多数を占め、前方後円墳の築造はされていなかった。また内部構造や副葬品にもあまり見るべきものがない。

その中で唯一佐久市東一柳古墳[6]からは、多量の副葬品が発見された。墳丘は東側と西側が削りとられて、東西六・八メートル、南北一〇メートルの長楕円形をなしている。現形は一辺が一〇メートルほどの円墳であったろうと思われる。

(6)佐久市岩村田東一柳古墳緊急発掘調査報告　長野県考古学会誌第一三号

内部構造は両袖式の横穴式石室で、副葬品として金銅製杏葉四、金銅装飾金具二二、鉄製円頭柄頭一、勾玉九、丸玉四七、小玉一六、ガラス玉六一、馬具五八、鉄鏃四五、刀子二、金環六、土師器五、鐔三が出土し、土師器の坏には「久」の墨書が見られた。これらの副葬品から本古墳は七世紀末～八世紀にかけた末期古墳と考えることができよう。佐久地方の古墳は、古代官牧の存在と切り離して考えられないかもしれない。

松本平地方の古墳

松本平の広大さに比して古墳の分布は極めて希薄で、南安曇郡穂高町有明地区と松本市東縁地区から中山地区にかけて見られるにすぎない。前方後円墳の築造はなかったが、松本市大字出川丸山の弘法山古墳[7]は前方後方墳の墳丘を持ち、この地方いや信濃においても特殊な古墳といえよう。

(7)弘法山古墳　斎藤　忠　松本市教育委員会

この弘法山古墳の構造は、全長六三メートル、後方部の幅約三三メートル、後方部の高さ約六メートル、前方部幅約二二メートル、前方部高さ約二メートル、内部構造は竪穴石室である。ガラス製小玉、四獣文鏡、鉄斧、鉄剣、

銅鏃、鉄鏃、土師器（壺形、坩形、器台形、高坏、埦形）等を副葬し、非常に古式な様相が土師器に見られ、銅鏃及び墳丘、内部構造から見て松本平の最古式と考えて間違いあるまい、この弘法山古墳は早く見て四世紀末、遅くとも五世紀初期と考えられ、松本平はこの時期に古墳時代に入ったと推定したい。

東筑摩郡本郷村桜ヶ丘古墳[8]は後期古墳の代表的な列として挙げられる。山頂に築造された円墳で、一種の礫床と考えられる内部構造を持っている。金銅製天冠、短甲、衝角付冑、直刀、剣、鉾、鉄鏃、ガラス小玉、丸玉、瑪瑙製勾玉が出土している。副葬品から後期古墳と考えて間違いなかろう。三葉形の金銅製天冠の出土は、中央文化と密接な関係を持つものであろう。

（8）信濃浅百古墳　長野県東筑摩郡本郷村

東筑摩郡坂井村安坂に存する方形積石塚は、その所在地が高句麗の渡来人の居住地であることとあいまって、渡来人との関係を明確に結びつける古墳ということができよう。

松本市桜立古墳は円墳で、頭椎柄頭、鏡、硬玉製勾玉、管玉、金環、銀環、刀、剣、馬具、土師器、須恵器が副葬され、これも後期古墳を代表する。

松本平地方の古墳は、弘法山古墳の如く前期古墳の様相を持つものも見られるが、大半は後期古墳から末期古墳、さらに終末は歴史時代に築造されたのと思われる。

諏訪地方の古墳

藤森栄一氏[6]によって詳細に論じられているこの地方[9]は、諏訪湖を挟んで湖北地域と湖南地域に分けられる。湖北の代表的な古墳として前方後円墳の青塚があり、後期古墳の特徴を有する墳丘を持ち、葺石、円筒、形象の埴輪が見られ、横穴式石室である。また糖塚からは六獣鏡が出土し、内部構造は横穴式石室である。

（9）信濃諏訪地方古墳の地域的研究　藤森栄一　伊藤書店

岡谷市には唐櫃石古墳（カロウトイシ）、姥懐古墳（ウバガトコロ）[10]があり、前者は酸化鉄による塗彩された横穴式石室を有し、直刀、鉄鏃、刀子、刀装具、鉸具、土師器、須恵器、灰釉陶器を出土し、奈良時代に降るものと推測されている。

（10）唐櫃石古墳・姥ヶ懐古墳　長野県岡谷市教育委員会

姥懐古墳も横穴式石室で鉄鏃、刀装具、鉄釘、土師器、須恵器を伴出し、七世紀末から八世紀の古墳と報告されている。

その他の古墳も小形の円墳で粗造の横穴式石室をともない、副葬品の中には鰾切先大刀や飛燕形鏃、柄の長い片刃鏃、形式の新しい土師器、須恵器が見られ築造年代が奈良時代を下限とするものが多く見られる。茅野市宮川地区では和銅開珎、神功開宝を出土した古墳や、岡谷市湊地区の大村古墳の如く蕨手大刀を副葬しており、歴史時代と明確に比定できるのも見られる。

湖南地域には茅野市姥塚出土と伝えられる葡萄唐草文鏡がある。その年代をどこまで降げられるか、今後の研究課題であろう、またこの地域唯一の前方後円墳である大熊双子塚からは、飛燕形の鉄鏃、石製錘が出土し、明らかに歴史時代に降るものと考えられている。この諏訪地方の古墳は、青塚や糖塚等も存在するが、殆んどは奈良時代を中心とするもので、古墳の伝播は伊那谷からの影響であろう。

以上の如く信濃の古墳文化は伊那谷と善光寺平を中心としている。善光寺平では中央文化の影響下に根をおろし、やがて周縁化した姿相をもって地方化していく。伊那谷の場合はかなりの中央文化が継承されている。古代の交通路の要衝である東山道に沿っていたことが要因となったのであろう。また北信地方を中心に数多く見られる積石塚は、信濃の古墳文化の大特徴であり、渡来人の東国開拓の例証といえよう。

第四章　片桐古墳と残された問題

第一節　築造時期について

片桐古墳は、墳丘裾部を果樹園と墓地によってはげしく削りとられ著しく変形されてしまい、原形を復原することは不可能であった。径は約一六～二〇メートルの円墳で、高さは約四～三・五メートルであったと考えられる。

内部構造は片袖の横穴式石室で、石室の全長六・四メートル、玄室は三メートル、羨道部は三・四メートル、石室の幅は奥壁で一・八メートル、玄門部で一・一メートルである、ことに羨道部の袖部前から羨門部にかけて、約四〇センチほど西側に寄せてつくられており、本古墳の特徴となっている。天井石も巨石が使用されており、横穴式石室の中でも決して小形とはいえないであろう。

副葬品の殆んどは石室内の堆積土の水洗いによって検出したものですべて配置状態を復原することは不可能であるが、原位置を保っている副葬品から考えて見ると、埋葬された遺体は頭を北に置き、頭の上部の奥壁西隅に鉄鏃をたばねて安置し、胸の西側には金銅装の円頭大刀を置き、足部近くの西側には轡、羨道部の玄門に近い東壁、西壁よりには、須恵器、土師器の土器類がおかれている。

副葬品の中で須恵器はⅢ型式に分類されるが、羨道部前のトレンチ出土の須恵器には非常に新らしいものも見られる。土師器も油坏・盌から見ると後期に属するものである。

直刀三のうち二は鰐形切先につくられ、鉄鏃にも飛燕形があり、金銅装の柄頭には丸タガネによって打ち込まれた唐草文の変形したものが施されている。これらの副葬品から七世紀中頃に入ってからの末期古墳と考えて間違いなさそうであるが、さらにここで一二〇の古墳をあげて円頭形柄頭大刀を伴出するもの又は、環頭大刀、圭頭大刀、方頭大刀、頭椎大刀を集成し、片桐古墳の築造年代比定の参考にしたい。なお一般的に環頭大刀といわれるものの中には素環頭式、単鳳式、単龍式、双龍式と分類されているが報告書で詳細にされてないものはすべて環頭大刀とした。

これらの古墳で比較的古式に属する古墳としてあげられるものには、銅鏃を出土している岡山の花光寺山古墳と盤龍鏡を出土する福岡の藤崎古墳がある。素環頭の大刀を伴出しているところをみれば、素環頭大刀は早くから副葬品に使用されていたとも考えられる。

また千葉県市原市山王山古墳は前方後円墳で内部構造は粘土槨で環頭大刀と櫛を伴出し、長野県の飯田市西一号（御猿堂）も前方後円墳で「吾作明竟、幽凍三商、衆徳玄道、配像萬疆、曾年益壽、子孫蕃昌」の銘文をもつ四神四獣と環頭柄頭を伴出している。愛媛県の岩子山古墳も前方後円墳で粘土床の内部構造を有し、素環頭大刀を出土している。以上の古墳は中期初頭から中葉と考えて間違いあるまい。その他の古墳はいずれも後期末葉から末期古墳―六世紀末から七世紀なかに八世紀にまで降るものもあるようである。

銅鋺を伴出している古墳には福島県の蝦夷穴、栃木県の足利公園麓、千葉県の金鈴塚、内裏塚北方、殿塚、埼玉県の将軍山古墳、長野県の大塚古墳、高知県の八王子古墳、山口県のゲンベイ山古墳があり、ことに金鈴塚古墳からは円頭大刀、環頭大刀、圭頭大刀、頭椎大刀、鳥首大刀と殆んどすべてが揃えられて出土している。

銅鋺は六世紀後半に渡来人銅師公（まりしのきみ）が伝えた技術で元来舎利容器、供養仏器として用いられたもので、仏教的色彩の強いもので、末期古墳よりの副葬品である。

円頭大刀を出土する古墳としては、宮城県の中山囲横穴群、福島県の真野二〇号墳、栃木県佐野市小中、群馬県

表7 柄頭出土地一覧

	古墳名	所在地	墳形規模(m)	内部構造	副葬品	備考
1	杉山古墳群	岩手県西磐井郡花泉町杉山 宮城県登米郡上沼村粧坂	円・100基以上	変形横穴式石室	方頭大刀・直刀・鉄斧・鉄鏃・勾玉	岩手・宮城の両県にわたる
2	中山囲横穴群	宮城県柴田郡村田町中山囲	10数基		金銅装円頭大刀・直刀・剣・鉄鏃・鉄斧・金銅製双魚佩	
3	山囲	宮城県名取市飯野坂	円・20	横穴式石室	金銅装頭椎大刀・直刀・刀子・鉄鏃・玉類	
4	亀井囲横穴群	宮城県志田郡松山町金谷字亀井囲	100基以上		方頭大刀・直刀・鉄鏃・須恵器	
5	洞山横穴群	福島県岩瀬郡長沼町南横田字洞山	50基以上		方頭大刀・直刀・鉄鏃・須恵器	
6	蝦夷穴	福島県須賀川市浜田大字和田字蝦夷	円？	横穴式石室	頭椎大刀・圭頭大刀・刀子・金銅装鈴・銅鋺・馬具・槍・勾玉・三輪玉・馬歯	
7	前原古墳群	福島県須賀川市大字提字前原	円？		単鳳環頭大刀・圭頭・大刀・直刀・鉄鏃・須恵器・土師器	
8	下高久	福島県平市高久			単鳳環頭大刀	
9	跡見塚古墳群	福島県岩瀬郡岩瀬村桂田	小円墳多数		頭椎大刀・直刀・鉄鏃・刀子・玉類・馬具・須恵器	
10	正直古墳群	福島県田村郡田村町正直	円・30基		環頭大刀・石製模造品・土師器	
11	根岸古墳群	福島県安達郡本宮町高木字久保	円		圭頭大刀・玉類・金環	
12	真野20号	福島県相馬郡鹿島町寺内	前方後円全長29	方形礫槨	円頭大刀・直刀・剣・鉄鏃・鉄斧・金銅製双魚佩	
13	内出	栃木県下都賀郡藤岡町赤麻	円	横穴式石室	圭頭大刀・金環・銅環・管玉・切子玉・金銅製馬具	
14	和泉	栃木県下都賀郡岩舟町和泉			圭頭大刀・刀子・直刀・鉄鏃・銀製杏葉・轡	
15	天王塚	栃木県芳賀郡益子町			(単鳳)環頭大刀	
16	助戸3丁目古墳群	栃木県足利市助戸			方頭大刀二振	末永雅雄博士日本上代の武器
17	長林寺裏山	栃木県足利市西宮	円	横穴式石室	環頭柄頭・銅釧・金環・小玉・鉄鏃・轡	
18	足利公園麓	栃木県足利市縁町	円	横穴式石室	頭椎大刀・冑・馬具・銅鋺	
19		栃木県佐野市小中			円頭大刀	末永雅雄博士日本上代の武器

	古　墳　名	所　在　地	墳形規模(m)	内部構造	副　葬　品	備　考
20	二子山	群馬県前橋市総府町大字植野字立石	前方後円全長85	前方部と後円部に石室あり	頭椎大刀・金環・銀環・勾玉・剣・刀・鉄鏃・刀子・須恵器	埴輪・葺石あり
21	間の山	群馬県伊勢崎市波志江町	円	舟形石棺	環頭大刀・刀子・鏡・管玉・鉄斧・鉄鏃・釘・冑・馬具	
22		群馬県群馬郡豊秋村			円頭大刀	末永雅雄博士日本上代の武器
23	箕輪村	群馬県群馬郡箕輪村			圭頭柄頭	同上
24		群馬県群馬郡倉賀野町			単龍環頭大刀	
24	八幡村	群馬県多野郡八幡村			円頭大刀	末永雅雄博士日本上代の武器
25		群馬県藤岡市			圭頭・方頭大刀	同上
26		茨城県多賀郡関南村神田			圭頭大刀	同上
27		茨城県常陸太田市田渡東松院			(単龍)環頭大刀	
28	幡第9号	茨城県常陸太田市幡町			(単龍)環頭大刀	
29	稲荷山	茨城県新治郡出島村風返	前方後円全長70	横穴式石室箱形石棺	頭椎大刀・円頭大刀・直刀・刀子・鉄鏃・金環・玉類・金銅製馬具・銅鋺・金銅密柑玉	
30	笄崎	茨城県新治郡新治村笄崎			頭椎大刀	
31	大柳	茨城県直壁郡直壁町南椎尾大柳			圭頭柄頭	末永雅雄博士日本上代の武器
32	木原台古墳群	茨城県稲敷郡美浦村木原	前方後円3基、円3基		圭頭柄頭	同上
33	八竜神塚	茨城県猿島郡境町金岡八竜神	円30	横穴石室	単鳳環頭大刀・銅釧・金環	
34	城山古墳群1号墳	千葉県香取郡小見川町城山	前方後円全長68	横穴式石室	環頭大刀・円頭大刀・頭椎大刀・刀子・鏡・鉄鏃・金銀環・玉類・甲冑・金銅製馬具・須恵器・土師器	
35	山王山	千葉県市原市姉崎町	前方後円全長80	粘土槨	環頭大刀・直刀・刀子・鉄鏃・胡簶録・青銅冠・銅環・櫛・鏡	埴輪
36	権現塚	千葉県山武郡松尾町大堤	前方後円全長117	横穴式石室作り付石棺	頭椎大刀・圭頭大刀・金銅刀子・刀子・鉄鏃・金環・玉類	
37	殿塚	千葉県山武郡横芝町中台	前方後円全長88	横穴式石室	頭椎大刀・直刀・刀子・鉄鏃・銅鋺・金銅製鈴・金環・玉類・鉸具	

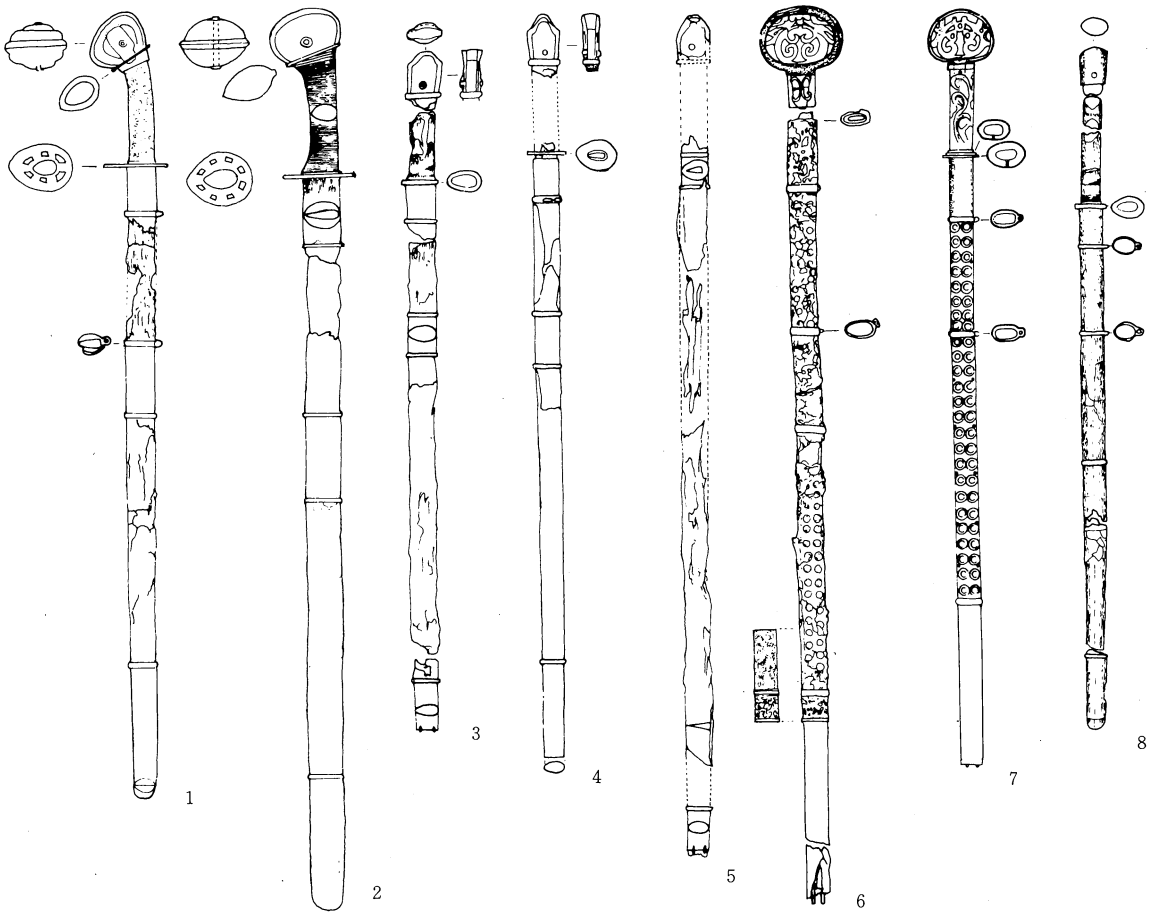
	古墳名	所在地	墳形・規模(m)	内部構造	副葬品	備考
38	金鈴塚	千葉県木更津市長須賀	前方後円 全長95	横穴式石室 箱形石棺	環頭大刀・円頭大刀・圭頭大刀・方頭大刀・鳥首大刀・鏡・銅鋺・鉾・鉄鏃・刀子・玉類・金鈴・金銀製腰佩・金銅製さしば・衝角付兜・桂甲・弭・金銅製馬具・馬鐸・須恵器・土師器	金鈴塚
39	鶴巻	千葉県木更津市祇園	前方後円		円頭大刀・圭頭大刀・鏡・馬具・玉類・垂飾付耳飾・土師器	
40	内裏塚北方	千葉県君津郡富沢町飯野	前方後円		鳥首大刀・直刀・鉄鏃・銅鋺・桂甲・金環・須恵器	
41	小見	埼玉県北埼玉郡荒木村小見			圭頭大刀	
42	秋山古墳群	埼玉県児玉郡児玉町秋山字中通	前方後円1基と円墳60基		頭椎大刀・銀象嵌	
43	畠山古墳群	埼玉県大里郡川本村畠山	前方後円1基 方墳1基 円20数基		頭椎大刀	人物・馬・家形・埴輪
44	直観寺	埼玉県行田市荒木小見直観寺内	前方後円 全長112	横穴式石室	頭椎大刀・圭頭大刀・兜・桂甲・鉄鏃・金環・須恵器	
45	将軍山	埼玉県行田市埼玉丸墓通	前方後円 全長91	横穴式石室	環頭大刀・銅鋺・金銅製馬具・鉾・兜・桂甲・鏡・馬鈴・鈴・玉類・金製勾玉・金製平玉・銀製丸玉・金環・蛇行状鉄器・直刀・鉄鏃	
46	岡本町横穴	東京都世田谷区岡本			円頭大刀・直刀・鐶環・鉄鏃	
47	下沼部	東京都太田区田園調布東光院裏	円	横穴式石室	方頭大刀・直刀・銅環・鉄鏃	
48	塚越14号	東京都太田区馬込西1・2丁目上池上町			金銅装頭椎大刀・金銅装圭頭大刀・直刀・桂甲・鉄鏃・杏葉・轡	
49	久地下作延横穴群	神奈川県川崎市下作延津田山町久地	30数基		頭椎大刀・直刀・玉類・金環・土師器・須恵器	
50	赤田横穴群	神奈川県横浜市港北区花田町赤田谷	2基		頭椎大刀	
51	新宿横穴群	神奈川県逗子市新宿	17基		圭頭大刀・銅釧・玉類・金環・鉄鏃	
52	洞ヶ谷	静岡県掛川市下俣			(単龍)環頭大刀	
53	船津	静岡県富士市舟津			(単鳳)環頭大刀	
54	二子塚	静岡県沼津市東井出			(単鳳)環頭大刀	
55	東本郷3号	静岡県沼津市香貫東本郷	円 消滅		(単鳳)環頭大刀	沼津市誌下

	古　墳　名	所　在　地	墳形・規模(m)	内部構造	副　葬　品	備　考
56	夏梅木７号	静岡県三島市谷田	円　消滅	横穴式石室 組合式箱形石棺	圭頭大刀・金環・須恵器	
57	新見	静岡県駿東郡長原町本宿	円	横穴式石室	環頭大刀・圭頭大刀・須恵器	静岡県史１、長原町の歴史
58	東本郷３号	静岡県沼津市上香貫	円　消滅		環頭大刀	沼津市誌下
59	一本柳	長野県佐久市大字岩村田字東一本柳	円　10	横穴式石室	鉄製円頭柄頭・鐔・鉄鏃・刀子・鞘金具・轡・鉸具・杏葉・ガラス小玉・丸玉・勾玉・金環	
60	土合１号	長野県北佐久郡浅科村五郎兵衛新田	円　50	横穴式古墳	円頭柄頭・直刀・銀象嵌鐔・鉾・鉄鏃・馬具・金環・勾玉・管玉・小玉・切子玉	
61	ノリヨセ	長野県北佐久郡小沼村			鉄製円頭柄頭・大刀・鉄鐔・金環・勾玉・丸玉・小玉・須恵器	信濃諏訪地方古墳の地域的研究　藤森栄一
62	諸別府	長野県北佐久郡大里村諸別府			鉄製圭頭柄頭２・大刀・鉄鐔・小刀・鉄鏃・コ字勾玉・金環・銅釧・辻金具・須恵器	
63	糖尾	長野県南佐久郡岸野村糖尾			鉄製円頭柄頭大刀・八窓卯形鐔・鉄鏃・須恵器	八幡一郎 南佐久郡の考古学的調査
64	桜立	長野県松本市中山桜立	円　25		頭椎柄頭・鏡・硬玉・勾玉・管玉・金銀環・鉄鏃・馬具・土師器・須恵器	
65	大塚	長野県茅野市塚原	円　60	横穴式石室	頭椎大刀・刀・鉄鏃・馬具・玉類・銅鋺・釘・土師器・須恵器	
66	姥塚	同上		横穴式石室	頭椎大刀・桂甲・鉄鏃・鏡・砥石・玉類・金環・青銅鈴・須恵器・土師器	
67	フネ	長野県諏訪市神宮寺		粘土並列	素環頭大刀・曲刃剣・鹿角製剣・刀・刀子・鈴・鏡・平玉・鉇・鉄・角付鉄釧・斧・ノミ	
68	御社宮司	長野県上伊那郡辰野町平出	円	横穴式石室	頭椎大刀・馬具・玉類・金環・須恵器・土師器	
69	片桐	長野県上伊那郡中川村片桐字六万部	円　14	横穴式石室 （片袖）	金銅装円頭柄頭大刀・直刀・刀子・金環・銅環・鉄鏃・轡・留金具・鉸具・鐔・釘・鋲・ガラス小玉・須恵器・土師器	1977年、調査
70	東養寺１号	長野県下伊那郡豊丘村神稲	円	横穴式石室	環頭大刀・金環・玉類・須恵器	
71	西１号 （御猿堂）	長野県飯田市上川路字西	前方後円 全長66		環頭大刀・直刀・鏡・桂甲・小札・鉄鏃・轡・雲珠・杏葉・勾玉・切子玉・須恵器	

	古墳名	所在地	墳形・規模(m)	内部構造	副葬品	備考
72	平地1号	長野県飯田市上飯田座光寺字平地	円		環頭柄頭・変形神獣鏡金環・切子玉・須恵器	
73	西羽場	長野県飯田市長野原字前田	円		環頭柄頭・直刀・剣	
74	弓矢	長野県下伊那郡上郷村別府字弓矢	円		環頭柄頭・直刀・金環・銀環・銀絲・鏡・鉄鏃・切子玉・馬具・須恵器	
75	天神塚	長野県下伊那郡上郷村飯沼字天神塚	前方後円全長74		環頭柄頭・神獣鏡・四鈴鏡・鉄鏃・馬具・鈴・馬鈴・杏葉・切子玉・密柑玉・丸玉・白玉・棗玉	
76	猪之洞	愛知県春日井市神明	円 消滅		双頭環頭柄頭・鉄鏃・管玉・須恵器	愛知県報8
77	岩谷1号	愛知県幡豆郡吉良町	円 14	横穴式石室(両袖)	金銅装大刀・鉄鏃・金環・鏡片・須恵器	
78	王塚	愛知県豊橋市王ヶ崎	円 19	竪穴式石室	頭椎大刀・環頭大刀・金環・玉類	
79	北谷1号	愛知県豊橋市石巻西川町	円 21	横穴式石室(両袖)	環頭大刀・金環・玉類・須恵器	
80	舟山2号	愛知県宝飯郡一宮町長山	前方後円全長45	横穴式石室(両袖)	円頭大刀・金環・鉄鏃・須恵器	
81	二ノ宮	三重県勢多郡荒砥村二ノ宮			方頭大刀	
82	ノンバリ	三重県一志郡白山町ノンバリ			(単龍)環頭大刀	
83	車塚	三重県鈴鹿市国府町国府			(単龍)環頭大刀	
84	鏡山	滋賀県蒲生郡竜王町山面老々塚			(単龍)環頭大刀	
85	稲荷山	滋賀県高島郡高島町鴨	前方後円全長50		環頭大刀・金銅冠・沓・漁佩・金製耳飾・鏡・玉類・鹿角装大刀・刀子・鉄斧・馬具	
86	風巻	福井県丹生郡清水町風巻	前方後円全長52		素環頭大刀・剣・勾玉・管玉	
87	寺井和田山古墳群9号	石川県能美郡寺井町	前方後円全長52		素環頭大刀・管玉・勾玉	
88		京都府乙訓郡向日町附近古墳			素環頭大刀	
89	多村	京都府磯城郡多村			(単龍)環頭大刀	
90	今里大塚	京都府乙訓郡長岡町今里	円 20	横穴式石室	環頭大刀・馬具・須恵器	
91	嵯峨丸山	京都府京都市右京区嵯峨	円	横穴式石室(家形石棺)	環頭大刀	
92	桃谷	京都府中郡峰山町新治	円	横穴式石室	円頭大刀・圭頭大刀・鏡・金環・玉類・空玉・耳鐺・鉄鏃・須恵器	

	古　墳　名	所　在　地	墳形・規模(m)	内部構造	副副　葬　品	備　考
93	岡古墳群	京都府竹野郡網野町小浜		木炭槨	環頭大刀・勾玉・須恵器・土師器	
94	珠城山１号	奈良県磯城郡大三輪町穴師	前方後円全長45	横穴式石室	環頭大刀・玉類・金環・桂甲・工具・馬具・須恵器	
95	団栗山	奈良県磯城郡田原本町矢部			単鳳環頭大刀	
96	猫塚	奈良県五条市西河内	方　１辺30	竪穴式石室	環頭大刀・鏡・玉類・帯金具・眉庇付兜・短甲・桂甲・鉾・鉄鏃・埴製枕	
97	石上神宮禁足地	奈良県天理市石上町			(単鳳)環頭大刀	
98	安部山３号	奈良県北葛城郡広陵町安部			(単鳳)環頭大刀	
99	岡峰	奈良川吉野郡下市町			(単鳳)環頭大刀	
100	海北塚	大阪府茨木市福井	円　20	横穴式石室	「石棺内出土」 環頭大刀(単鳳) 槍・鉄鏃・馬具・須恵器 「封土出土」 鏡・勾玉	
101	舟塚	兵庫県多紀郡丹南町			(単鳳)環頭大刀	
102	大藪	兵庫県養父郡市場村			(単龍)環頭大刀	
103	佐用都比売神社裏	兵庫県佐用郡佐用町			(単龍)環頭大刀	
104	大塚	岡山県吉備郡箭田町大字八幡前			(単龍)環頭大刀	
105	花光寺山	岡山県邑久郡長舟町服部	前方後円110	組合石棺	素環頭大刀・剣・槍・鏡・刀子・銅鏃・鉄鏃・斧・鉇	円筒埴輪
106	白鳥	広島県賀茂郡高屋町郷	円　30		素環頭大刀・鏡・勾玉	円筒埴輪
107	東宮山	愛媛県川之江市妻島町春日山	円　14	横穴式石室(箱形石棺)	環頭大刀・剣・鉄鏃・鏡・金銅冠・金環・管玉・切子玉・棗玉・銀平玉・衝角付兜・鐔・鈴・須恵器・土師器	
108	岩子山	愛媛県松山市北斉院岩子山	前方後円全長25	粘土床？	環頭大刀・小玉・丸玉・白玉・鉄鏃	
109	八王子	高知県香美郡土佐山植八王子山	円	横穴式石室	頭椎大刀・銀環・和同開宝・須恵器	
110	東前寺古墳群	山口県熊毛郡平生町大野南	円10基以上	横穴式石室	頭椎大刀・刀子・金環・鉄鏃・釘・土師器・須恵器	
111	ゲンベイ山	山口県光市西ノ庄	円	横穴式石室	環頭柄頭・金環・鏡板・銅鋺・須恵器	
112	天神山	山口県防府市江泊	円		環頭柄頭・銅鋺・鹿角装大刀	

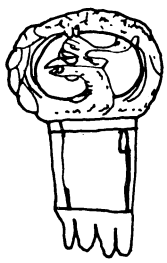
	古墳名	所在地	墳形・規模(m)	内部構造	副葬品	備考
113	拾塚古墳群	山口県長巾市東深川			頭椎大刀・圭頭大刀・金銅製壺鐙・銅鈴・鏡・鎌・切子玉・貝釧・須恵器	
114	円光寺	山口県荻市大井町	円		環頭柄頭・勾玉・管玉鉄鏃・環・刀	
115	日拝塚	福岡県筑紫郡春日町大字下白水			(単龍)環頭大刀	
116	泊	福岡県糸島郡前原町大字泊			(単鳳)環頭大刀	
117	丸山	福岡県京都郡勝山町箕田丸山			(単龍)環頭大刀	
118	藤崎	福岡県福岡市西新町鹿原		箱式石棺	素環頭大刀・盤龍鏡	
119	竹原	福岡県鞍手郡若宮町竹原	円 20	横穴式石室	圭頭大刀・金環・小玉・銀制丸玉・馬具・鉄鏃	森貞次郎、福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳 美術研究
120	宮地嶽古墳	福岡県宗像郡津屋崎町宮司宮地嶽神社境内	円	横穴式石室(全長22メートル・全国第2の長さ)	頭椎大刀・金銅製壺鐙・杏葉・轡・鏡板・ガラス板・ガラス丸玉・銅鋺・馬具・金銅透彫・龍文冠・ガラス器・銅壺・土器を組合せた蔵骨器・鞍金具	



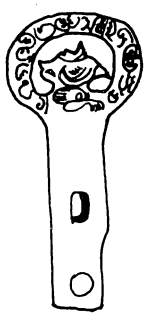
1～11　千葉県木更津市金鈴塚
　1・2　頭椎大刀　3～5　圭頭大刀　6・7　環頭大刀
　8　円頭大刀　9～11　鳥首大力
12　京都府向日町附近古墳　素環頭大刀
13　大阪府南河内郡小山村津堂城山古墳　素環頭大刀
14　楽浪古墳9号墳　環頭大刀
15　熊本県玉名郡江田村舟山古墳　素環頭大刀
16　京都府向日町附近古墳　素環頭大刀
17　朝鮮慶尚南道昌寧郡昌寧古墳　円頭大刀

Fig. 19　大刀集成①

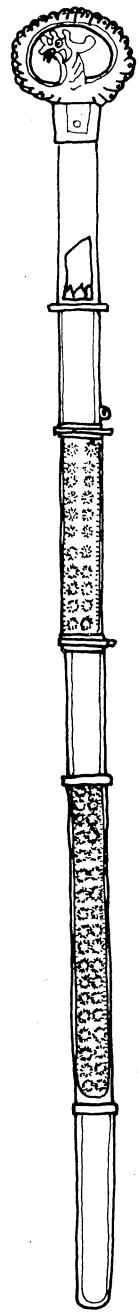
1



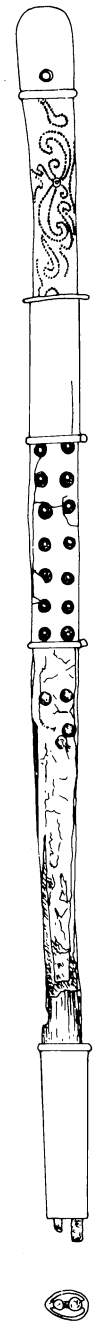
2



3

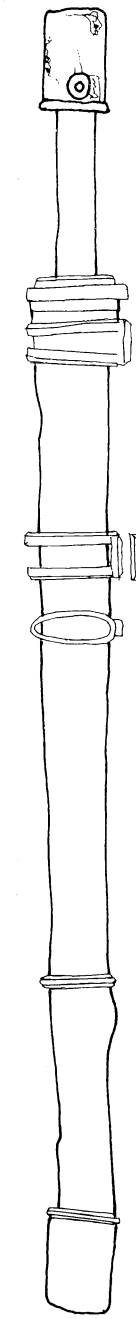


4



5

6



7

1　奈良県磯城郡多村古墳　単龍環頭大刀
2　兵庫県養父郡市場村大藪古墳　単龍環頭大刀
3　奈良県石上神宮禁足地　単龍環頭大刀
4　静岡県富士市舟津古墳　単龍環頭大刀
5　群馬県多野郡八幡村古墳　円頭大刀
6　茨城県新治郡　素環頭大刀
7　三重県勢多郡荒祇村二ノ宮古墳　方頭大刀

Fig. 20　大刀集成②

の豊秋村、八幡村、茨城県の稲荷山古墳、千葉県の城山古墳群一号墳、金鈴塚古墳、鶴巻古墳、東京都の岡本町横穴、長野県の一本柳古墳、土合一号墳、ノリヨセ古墳、糖尾古墳、片桐古墳、愛知県の舟山二号墳、京都府の桃谷古墳の一七基がある。このうち中山囲古墳群と片桐古墳例は金銅装の柄頭で金鈴塚古墳のは銀装である。環頭大刀では柄、鞘とも金銅装で包み、円文を打ち出して足金物をつけているものは、七世紀中頃に用いられているとされているが、片桐古墳例は円頭大刀であるが、この時期に属するものと考えて間違いなかろう。

以上の如く比較的早く副葬品として用いられたものには素環頭大刀が見られ、長野県の西一号墳では環頭大刀である。後期古墳末葉から末期古墳にかけては環頭大刀をはじめ円頭大刀、方頭大刀、圭頭大刀、鳥首大刀、頭椎大刀を副葬品として盛んに用いたようである。

第二節　被葬者について

古墳が築造される地域には豪族の発生がなければならず、それには経済力を裏づける肥沃な農耕地が開発されていなければならないであろう。

片桐古墳の所在する中川村は、竜東は山が川岸までせまり耕地も狭く、竜西にはやや段丘上の扇状地も開拓され、天竜川沿岸に水田も開かれていたかもしれないが、豪族が富を誇るほどの経済力豊であったとは考えられない。

ではいったい古墳を築造し得る経済力をいかなる面で補強したのであろうか。

片桐古墳の東方三〇〇メートルの地点には牧ヶ原なる地名も残っており、また苅谷原、佃、横厩等の地名からも馬の飼育のさかんであったことが伺れる。当時において馬の飼育は重要な仕事であり、中央政府も馬の飼育に全力をあげ、信濃国に官牧が多く設置されていることによっても、それはうかがうことができよう。馬は官人の重要な

交通機関であった。片桐には官牧こそ設置されなかったが、駅馬育成の牧場として牧ヶ原を考えて間違いなかろう。

大化改新（六四五年）によって駅馬制がしかれるや賢錐駅の実権を握り、東山道の交通の要衝をおさえ、馬の飼育によって相当の経済力を持ち得た豪族が賢錐駅附近に発生した考えられそうである。

賢錐の常備駅馬は記録によると十疋とされている。往来が頻繁になり、常に二・三倍の予備馬が用意されていたことは想像に難くない。牧ヶ原以外にも「厩尻」「駒ツムリ下」「ませ口」等牧場の所在を推測させる地名も残っており、中川村には官牧ほどの大きな牧場は存しなかったが、私牧であっても良馬は賢錐駅の駅馬として供されたであろう。こうした賢錐駅の別当となんらか関係のある人物こそ片桐古墳の被葬者でなかったろうか。中央政府と密接な関係にある人物であれば、その権力を背景に古墳の築造も可能であろうし金銅装の円頭大刀を帯びたこともうなずけ得るのである。

信濃国の豪族については前章で述べたが、金刺氏と同族で国造の一族に他田氏が伊那郡にいたことも知られており、この他田氏の一族が賢錐駅にも関係があったのではなかろうか。歴史的背景から片桐古墳の被葬者は他田氏に関係があり、賢錐駅の実権と馬の飼育を司った人物であったと推定したい。

なお羨道部前に設置したトレンチ内より、土師器、須恵器が多く発見され、追葬の跡ではないかと考えたこともあったが、遺物の出土状態が不規則であるのと、盗掘者が石室内から持ち出した副葬品が混入しており、墓前祭の追葬と考えるには少し問題もあり、今後の研究課題とすることにした。

おわりに

昭和五二年三月二七日～四月四日（第一次調査）、七月一九日～八月六日（第二次調査）、八月一〇日～八月一三日（第三次調査、堆積土の水洗い作業）、九月二一日～九月二八日（第四次調査）と四度に亘り調査を実施してきたわけである。第三次調査は地元の高校生の手だけで石室内の堆積土のフルイ作業と水洗い作業で、この結果玉類の検出を見ることが出来大成功であった。

第四次調査は、石室内の測量調査で、予算の関係上日時を短縮するため夜業も実施し、一日を二日分の作業としたのである。片桐古墳の調査は述べ三八日にもわたり、想像以上の副葬品も発見され大成功の調査と考えている。

最後に古墳の調査中にも御指導をいただきさらに金銅装の柄頭の修理についても御骨折をいただいた末永雅雄先生には深く御礼申し上げる次第です。

また焼つくような炎天下の中、きびしい調査に参加してくれた調査員及び地元の高校生、中学生、とくに中塚利司、宮崎千里、桃沢貴美、斎藤五月の四君には長期にわたって手伝っていただき調査に多大な尽力をしてくれたことと誠に有難く、感謝でいっぱいである。

調査期間中から報告書完成に至るまで御多忙中にもかかわらず相談にのっていただいた宮崎昌直村長にも心から御礼申し上げたい。度々遠路拙宅にまで連絡にきていただいた、教育委員会橋沢次長にも感謝している次第である。

四度にわたって調査をした期間中、何かと御面倒いただいた当時の片桐支所長林常登氏、教育委員長の荒井倭氏、また文化財係の新井稔氏、さらに調査員の食事一切を御世話下さった竹村ミツ子さんには深く御礼申し上げます。

五四年春生田にて　筆者

信濃片桐古墳

昭和五五年七月二一日印刷
昭和五五年七月三一日発行

編著者　上川名　昭

発行者　中川村教育委員会
長野県上伊那郡中川村

製作　東出版寧楽社